（第三種郵便物認可）
大正九年九月十四日
昭和二年一月一日發行（毎月一回）



建築と社會

第拾輯　第拾號

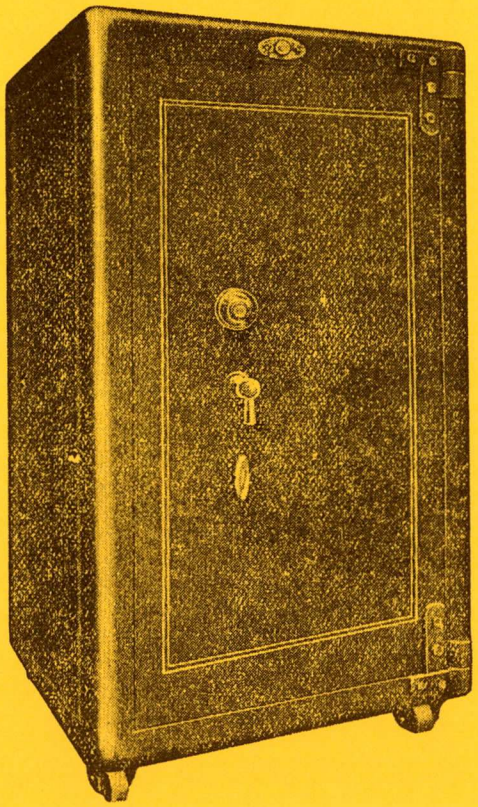
日本建築協會

昭和二年一月一日

THE OTANI LIGHT SAFE

大谷製 輕量金庫

本金庫は重量普通金庫の約五分の一にして内容積も又比較的廣く而かも防火裝置完備し居れるを以て高層ビルデイング用其他防火設備なき階上等に設置するに最も格好のものなり。



諸官署
諸銀行
諸會社
御用

大阪市東區淀屋橋筋道修町北入

大谷金庫店

電話本局三九三四番
東京 京都 神戸

（カタログ進呈）

特許第七九三五號（延長許可）

大野式防火捲上ヶ戸

（特許大野式シヤッター）

這般の大震火災に於て兼ゝ御定評を蒙り居り候日常開閉の至便、防火耐熱力優秀にして内外國同種類品中最も御安心相願はれ得可きものなることは左記事實に依り能く之を證明致候

一捲上ケ戸の閉鎖が咄嗟の間に完全に行はれたること

一戸鈑の連鎖堅牢にして烈火に面したる場所に於ても戸鈑各個の脫落、鎖鎖の破壞を來したるものなかりしこと

一戸鈑と戸鈑との間、戸鈑と溝金との間、上方捲込口煙返し等の密着充分にして間隙を生じたるものなく能く火炎熱風の浸入を阻止し防火の效を奏したること

以上數多の實蹟に徵し更に一段の注意を拂ひ御期待に副ひ可申確信の下に努力罷在候處幸ひ御承認を辱ふし他製品取換の御注文を始め有數建築物の復興工事新建築物防火設備等着々御採用を蒙り居候、何卒多少に拘らず御用命被仰付度奉希候

資合會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地（電話高輪 長五五七七番 三二三三番）

出張員詰所・上福島中二丁目六〇 電話土佐堀二七二五番

口　繪

兵庫縣・住吉村・某邸庭園之一部……其の一
同・同・……其の二
同・同・……皮附丸太之門
同・同・……四阿舍
同・同・……茶　室

▼土のかほり……佳　山　生

▼現代市街地建築物法は果して完璧か……大阪府建築監督官　玉置豊次郎……二……八

▼建築士法の制定に就いて……會　員　池　田　實……九……一三

▼憲法發布記念建造物の計畫發議……武藏野高等學校教授　山　本　良　吉……一五……一八

▼土地區劃整理後の町界町名地番整理……(一)……會　員　加　藤　善　吉……一九……二四

▼現代の住宅とは……會　員　津　田　鑿……二五……二六

拾輯第拾壹號目次

▼溝穴を有する塔の心柱礎に就いて……理學博士 川村清一……二七……三七

▼ハウスマン……藤田進一郎譯……三九……四四

‖都市計畫家銘名傳‖

▼本會秋季大會記事……四五……四七

有隣生命保險株式會社大阪支店新築工事概要及プラン……四八

大阪・有隣生命支店……外觀

大阪・同……營業部の一部

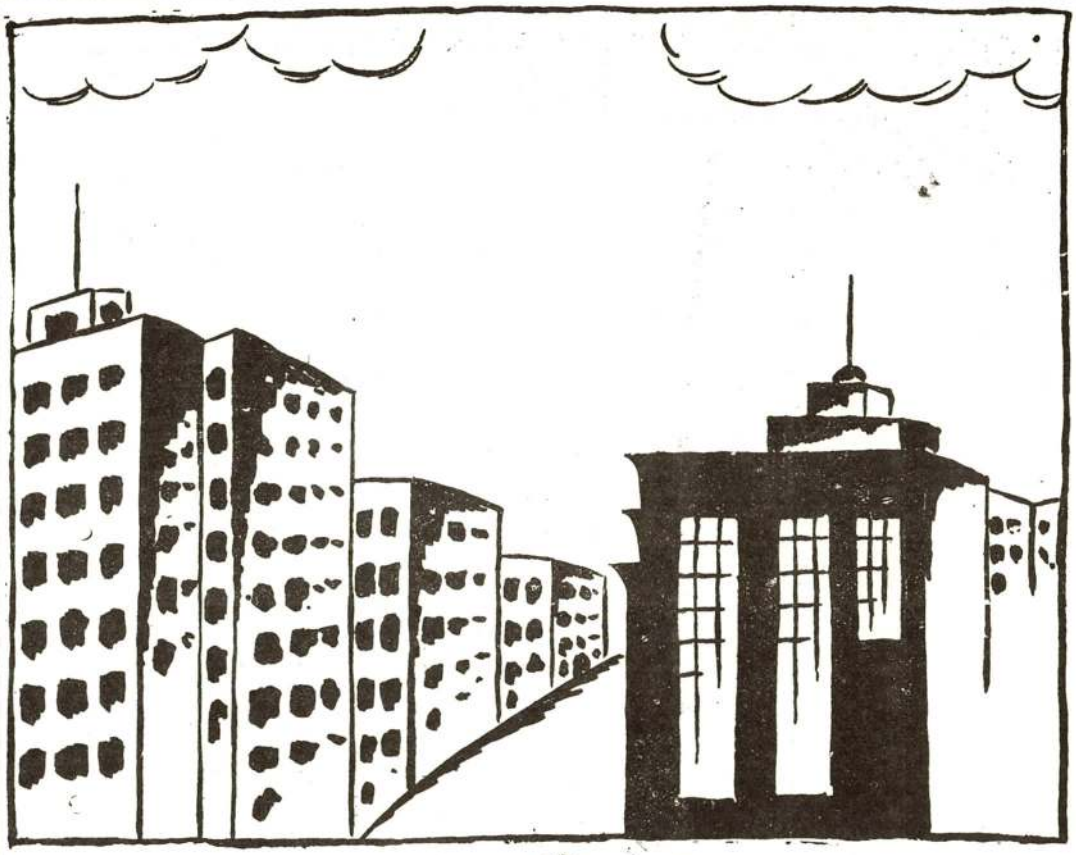
大阪・同……重役室の一部

新築紹介

▼都市計畫及建築に關する勅令法令其他……四九……五三

▼新刊紹介◇正誤表……

▼日本建築協會報……附廣告目次……



IS

伊奈製陶株式會社

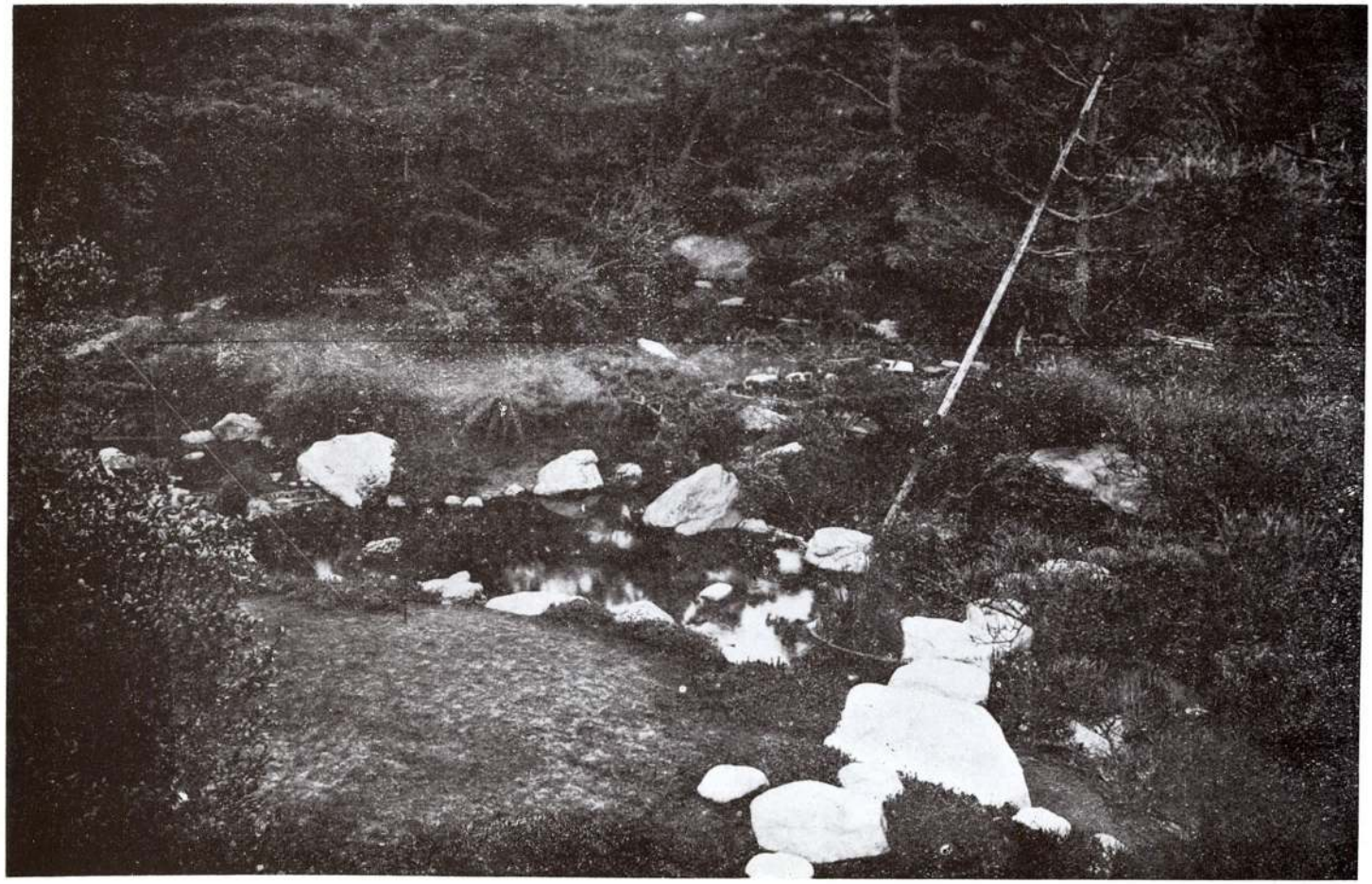
本社 愛知縣常滑町 電 七〇五 二〇〇

土木工事用

各種高級陶管
并地中電纜管

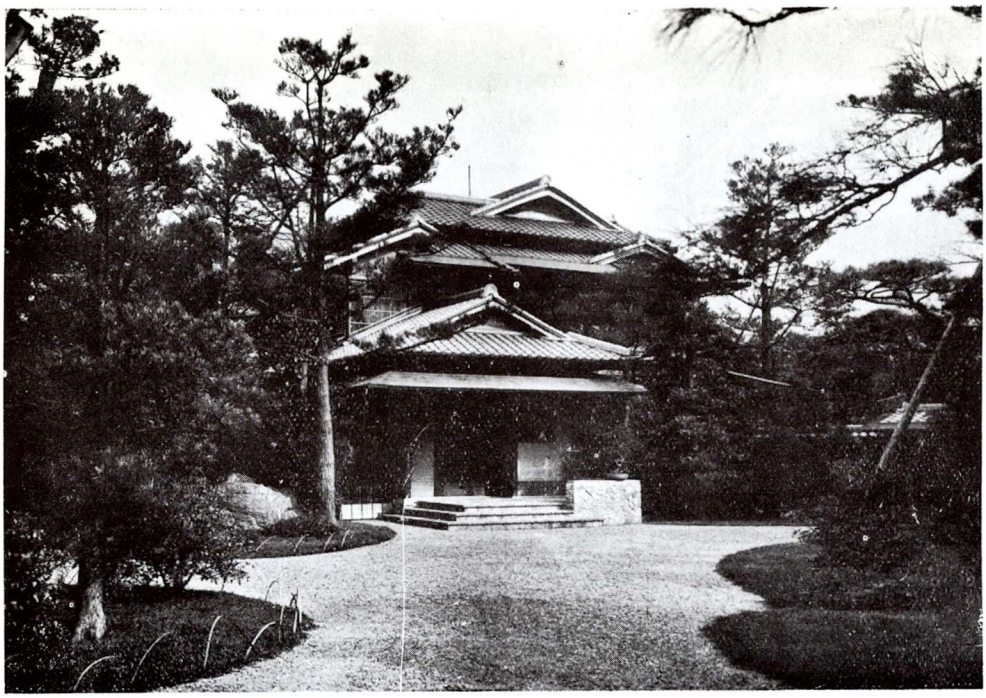
建築工事用

テラカッタ
タイル
モザイク
タペストリ
スクラッチ



兵庫縣·住吉村·某邸庭園之一部 (其一)

之はほんの一部分でありますが何樣幽谷に等しき出來榮でありますので寫眞では如何に苦心いたしましても到底眞の感じを現はすこの出來ないのを遺憾とします

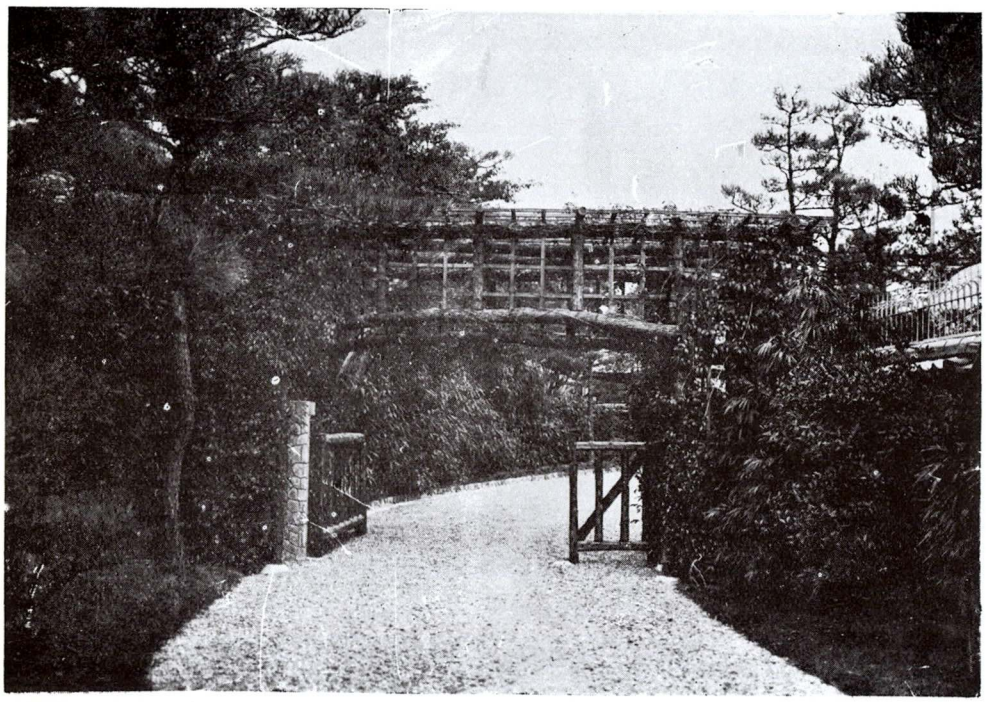


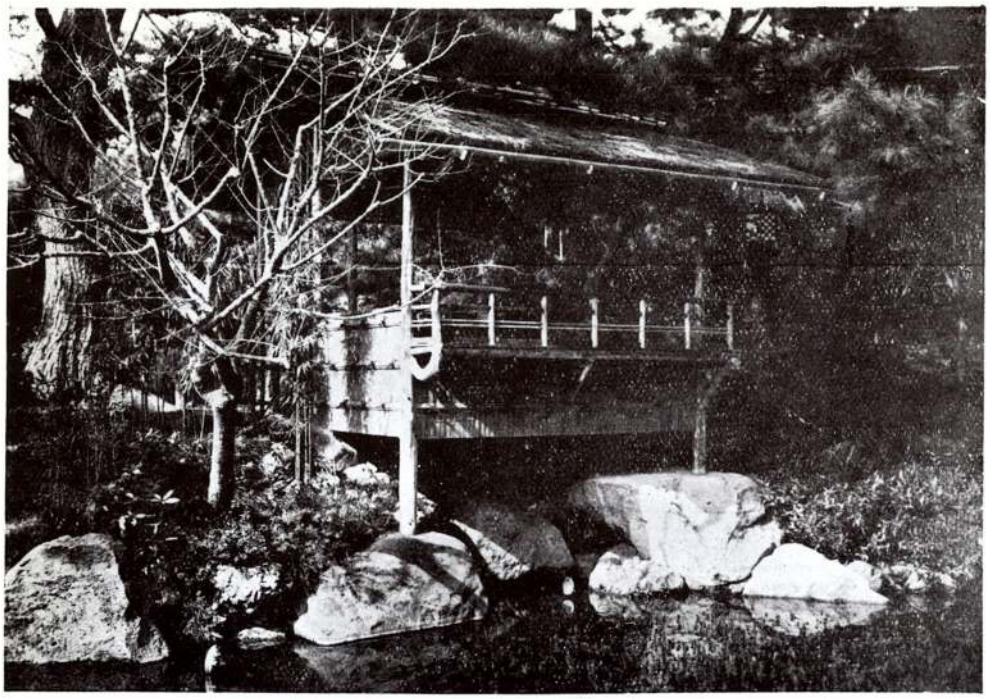
上圖は正門を入つて直ぐの所から撮つたものでありますが古雅な燈籠杯配置してあります、視野の加減で映りませんでした。

菜邸庭園（其二）

兵庫縣・住吉村

下圖は正門の外に構えられた皮附丸太で造つた門であります、兩側の植込との調和に苦心して居るやうです





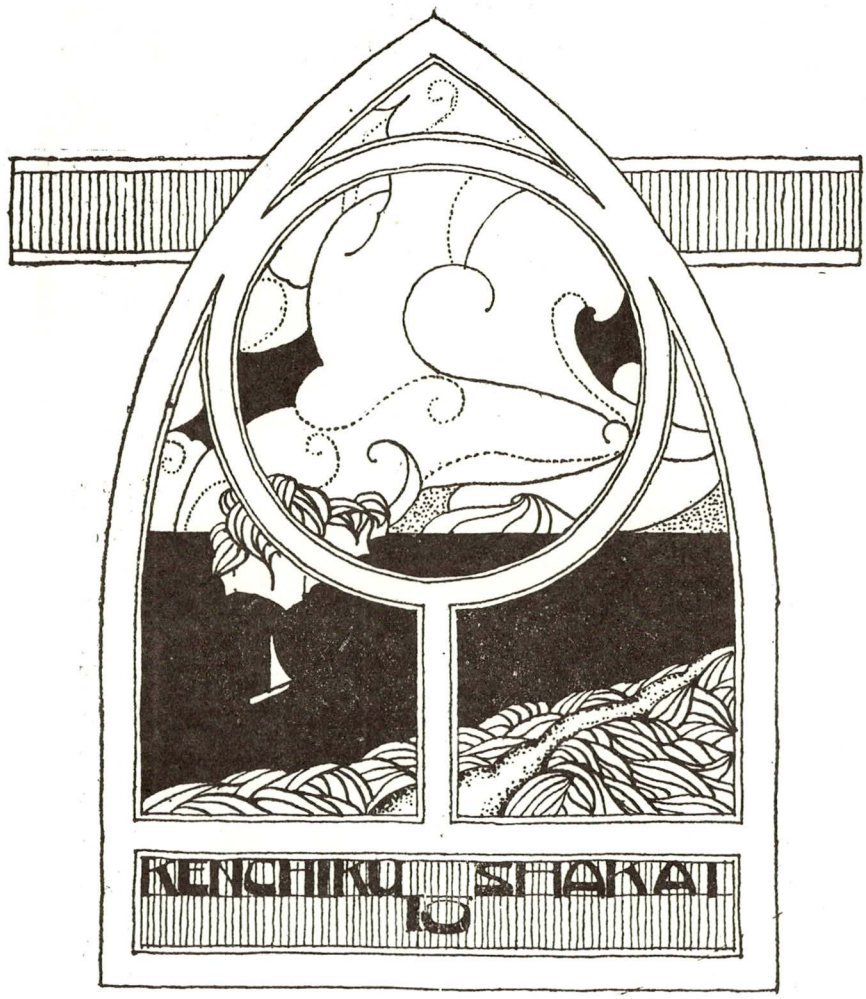
某邸庭園（其三）

兵庫縣・住吉村

上圖は下圖の茶室と水を距てゝ建つて居ます幽邃な植込に取かこまれ、一方小橋によりて母屋の椽から芝生地に連つて居ます。

瀟洒な母屋の椽先より清淨な芝生地を踏んで流の飛石を渡つて行くやうになつて居ます、茶室は殆ど樹木に覆ひ被つて居ます。　（下）

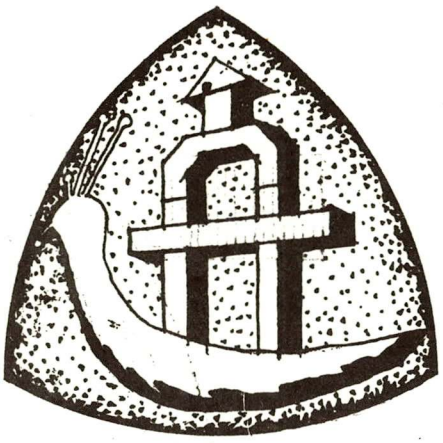




土のかほり

今日の時勢に於いては社會の各般共に餘りに當面の問題に拘束せられ過ぎるの嫌なきか、巧遲は拙速に如すと云ふ場合は元より數多くあることなれども、斯の如き言葉は應急的事物にのみ當てはまるものにして、如何なる事物に對しても之を摘要するは甚敷く誤謬を生ずる基となる場合多きものであるまいか特に都市の問題の如き一度之を決して行はんか、其の施設は多くの年月と尊き人力と巨額の經費とを要し永く將來の子孫に對して其過、福共に遺傳するものなれば當事者の責任も亦重大なりと云はねばならぬ。明治時代に於いては吾人の先輩は新を追ふに實に急であつたやうだ、然し其追付き得たものは眞實新らしきものであつたらうか、吾人を以て言はしむれば新は即ち眞であつて、時代の推移と共に其存在價値を減じやがて箔の剝げ落る樣なものは眞に新らしいと言ひ得ざるものに非ずやと思惟するものである。品變り物異なれりと云ふ丈では新とは言ひ得ない。都市の建設をして永久に其の生命を保だしめ其の都市の建造物をして未來に於いても尙新らし味を失はしめざる爲には、其都市をして其の建造物をして眞實の新らし味を有せなければならないものだと思はれる。フランスにはフランスの土の香あり米國には米國の土の香があり、日本には日本の土のかほりがある筈だ其のかほりは我民族性の亡びざる限り存在して日に尙新らしく其馥郁たる價値を失はないものである。建築展覽的都市も或る意味に於いて結構に相違ないかも知れぬけれども、日本には矢張日本特有の土の香がある筈であるから、單なる技工の移植に非らざる而して民族性を迄無視した模倣に非らざる眞に日本の土のかほりある即ち永久に其の新らしみを失はざる都市を建築を求めてやまぬ次第である。

（二・十・二九）　佳山生



現行市街地建築物法は果して完璧か

大阪府建築監督官　玉置豊次郎

市街地建築物法が實施せられてからこの方、都市の建築物が質に於て向上した事は實に驚異に價するものがある。今迄の陰鬱な中二階式の家屋が軒の高い晴々としたものに變り、明るい家には金が貯らぬと云ふ俚諺が全く一蹴されてしまつた。又八幡の藪知らずを思ひ起さす樣な町並も順次整然たるものになつて都市の面目は日に月に一新されつゝある。明治から大正の初年頃迄即ち市街地建築物法施行を見る迄に開けたらしい都市の中輪部の醜い家屋群に蔑視を投げながら、今都市の外輪部は見違へる程新市街に發達しつゝある。殊に下級住宅方面の改善に就ては最大の功績を擧げて居る。色々な法規が次から次へと年毎に發布されて居るが、我々都市民の生活程度を斯くも向上せしめたものは恐らく空前絶後であらう。常習語を借りて云ふならば、貴賤貧富は勿論老幼男女の別なく一樣に彼等の住居に就いて温い保護と美しい利導とを受けつゝある。

日本の多くの文明的施設がいづれも明治年間に芽え孕まれて居たのに拘はらず、この建築上の重要な問題が大正の而も後半期迄放棄されて居た事に就ては寧ろ不思議に堪えないものがある。然しその種蒔が遲くとも、今我々が隨所にその美しい花を見、その馥郁たる香を嗅いで唯恍惚とするばかりである。我々は今その花を引き續き咲せる爲めに、施肥に草取りに忙がしい。所が最近その根にその幹に蟲が喰ひ入つて居る事を發見して居るのである。我々は今その蟲が何の程度の害を與へつゝあるか、及び如何にしてその害を防ぎ得られるかに就いて考へねばならない。

左にその代表的の問題として二三を擧げやう。

一、現在の住居地域の制度が果して我々に滿足を與へて居るかどうか。

二、現在の工業地域の制度が地域制本來の趣意に合致して居るかどうか。

三、現在の防火地區の制度に我々は信頼出來るかどうか。

四、建築線に關する條項が現行の儘では果して豫想通りの仕事が出來て居るかどうか。

五、現在の建築監督の制度が完璧かどうか。

市街地建築物法令が取扱つて居る問題は相當に多い。その規定も比較的浩瀚なものである。從つて問題の起る度數の多いのも亦止むを得ないかも知れない。以上に列記したのはその代表的のものに過ぎないのであるが、いづれも相當重要なものと考へられる。以下その卑見に對し御批評を得ば幸甚である。

住居地域に關する考察

地帶制即ちゾーニングは普通建築物用途制限地域制、建築體積制限地域制、建築構造制限地域制の三種に分けて考へられる。我國の市街地建築物法では巧に前二者が組合されて居る爲に、判然その區別を意識されて居ない傾向があるが、當然區別して考へらるべき性質のものである。

地帶制に關する總ての問題を建築條令で解決しやうとした點は確に市街地建築物法の大成功であつた。その代りに建築物法が地帶制に關する總ての責任を負はねばならない事はこれ又止を得ぬ事であらう。

この地帶制は非常な勢で各國に歡迎されたけれども、問題が比較的新らしいだけ何處共にまだ試驗濟と云ふ譯には行かない。まして我國に於ては現行の地帶制が果して成功して居るかどうかに就ては未だ疑問時代であると思はれる。

現在地帶制に就ては一見頗る波靜の樣である。然し乍らその靜けさは紙箱の中に盛られた水面の靜けさであつて、今に紙箱の繼目に水が滲み込んで糊がはなれた時には忽ち水が溢れ出さねばならぬ靜さである。私は現行用途地域制中殊に工業地域の未來に就ては絕對悲觀論者であるが、追て評論する事にしたい。

今この地帶制中住居地域の用途制限並にその體積制限に就て考へて見たい。云ふ迄もなく體積制限とは面積の制限と高さの制限である。

我國の用途地域制は法律で住居と商業と工業の三地域に分けられて、工業地域内に特別地區を指定する事が出來る樣になつて居り、省令でその特別地區を更に甲種と乙種に分けられる事に規定されて居る。我々はこの組織を見て疑問を懷かねばならない事は何故工業地域に限つて再分割及再々分割を許されて居り他の地域にはそれが無いかと云ふ事である。私はこの疑問を解決するために次の樣な考へ方をしたいと思ふのである。それは工業地域のみが再分割されべきではなくて他の住居地域の如きものも當然再分割されるべきであるが、偶々忘れられて居るに過ぎないのであると。

成程我國の法規の建前から考へると、工業地域だけが再分割及再々分割されて居ることは一見頗る當然の樣である。何故ならば法第二條で住居地域と云ふ篩を一つ造つて、その篩糟を次には第三條の商業地域と云ふ篩にかけ、その殘りの大部分を第四條で衞生上有害若は保定上危險の虞ありとして工業地域でないと建築出來ない事にして居る。その結果これに該當するものゝ數が相當ごつさり出來てきたのであつた。所がものに依り有害と云ひ危險と云ふても隨分程度があり規模

の大小もある。のみならず工業地域内と雖も、人間が居ない譯ではないから規模の小なるもの有害危險の程度の低い仕事に從事するものは、當然工業地域内でも保護されねばならないと云ふ事になつて、更に特別地區と云ふ箍が出來たのである。故に工業地域内に特別地區が出來た理由は眞に當然である。

然らばこの考方は同時に住居地域や商業地域にも及ぼさるべきではなかつたか。唯商業地域は商業の利便を害する虞ある用途に供するものが建築出來ないのであつて商業の利便が目的であるから差し當り痛切な要求はないとしても、住居地域については必然的に考へられねばならない問題ではなかつたか。法では住居地域内には住居の安寧を害する虞ある用途に供するものは建築出來ない事になつて居る、換言すれば住居地域内では住居の安寧が保證されて居る事になつて居る。所がその保證と云ふのは勅令の第一條に規定されて居る位の程度に過ぎないのであつて、その結果住居地域内には宿屋御座れ、料理屋御座れ、市場御座れ、遊技場御座れ、工場も或程度迄構はない、作業場なら尚更構はないと云つた調子で、相當廣い範圍に迄色々なものゝ建築の自由がある。安寧を害するとか害れないとかは程度の問題であつて勿論立證さるべきものではない。その限界は人によつて相當相異するであらう。故に何が住居の安寧を害し何が害しないかの決定は中々困難である。然し乍ら單に程度の問題だけであるならば工業地域に於ても當然同樣であらねばならない筈である。特別地區に入れられねばならないものと、然らざるものと限界は疑問でなければならない。現に住居地域に建築支障なきものゝ中にも安寧を脅し、脅かさない迄も充分ならしめないものがある。

我々は住居の安寧を絶對に保持する爲に、住居地域を再分割するの必要を感ずるのである。分割された一方の地區は現行の儘止むを得ないとしても、新に選び出された他の地區内には、在來の似而非的な住居地域と全々趣を異にした住居のみが、而も安寧を充分保ち得る住居のみを存せしめたいのである、その地區内では空氣は澄み渡つて、商賣的な嫌な雜音も聞へしめず、眼に寫るものは清淨な住家のみであつて、一圓は夢の如く靜に、何物にも妨げられざるまどらかな市街を展開せしめたいのである。

以上は單に用途制限の見地のみからの住居地域の觀察であるが、體積制限の見地からも觀察されるべきである。現行法規では空地に就ては建築面積と敷地面積の比が住居地域では十分の六を超過する事を得ない事になつて居り、高さに就ては絶對高は六十五尺を、相對高は前面道路の對側境界線迄の水平距離の一倍四分の一を超過する事を且前面道路幅員の一倍四分の一に二十五尺を加へたものを超過する事が出來ない事になつて居る。將してこの數字で滿足出來るかどうかの問題である。

市街地建築物法令の規定の仕方は實に徹に入り細を極めて居る。漠としたものであつたならば取締が相當困難であつたらうが、尺度比例等を事細かに規定してある爲に法令の實施に當つては頗ぶる便宜よく出來て居る。然し乍ら取締られる方の立場即ち設計者の立場から考へると相當手嚴しい格桎に違いない。何の場合でも亦誰の場合でも相當手嚴しい制限乃

至干渉を受けると、その人間は縮かまるものである。この原理は不幸にして市街地建築物法令に於ても眞理であらう。その結果法規に適合させるためには、設計者は屢心ならざる設計を餘儀なくされて居る。その中に或る設計者は全然法規の虜になり、法規の奴隷になる。終に法規にさへ合へばよいと云ふ事になり、合ふ事が即ち最全の設計であると考へる。私達は殘念乍らこの種の設計者を多く見出すのである。その人達は法規を一歩進み出すと云ふ事を知らない。住居地域には四割以上の空地が必要であると云ふ條項を見るとき、四割以上の以上と云ふ字を放つて置いて丁度四割にして來る。四割であれば最全の設計であると考へて居る。柱の大きさは横架材間の距離の幾分の一以上と云ふ場合でも同樣である。寸法の記入してある所、比例の規定してある所、皆同一心理が働いて居る。寸法比例を列記する事と法令の施行上當然必要ではあつたのであるが、餘想外の虜が入つて來、奴隷が生じて來たのである。故に立法者側の立場から考へるならば、寸法比例は最小限を示すものに過ぎないのであると云ふ考へ方を全々裏切られて居る勘定になつて居る。然しこの事は實際上止むを得ない事であり、且必然的の結果に違いない。當然歩まれて行く道程であつたのである。そこで問題は最小限であるべき筈のものが必要にして、且充分であると云ふ風に考へられて居るが、それをその儘放置して置いてよいかどうかと云ふ事である。この事は空地問題に於て最も適切である。

色々な事情が手傳つて都市の空地は段々減少する傾向を以て居るから、空地の保全と云ふ事は今後の都市問題の中可なり重要な地歩を占めるに相違ない。嘗て我國の住家は皆それ相當の庭を持つ事になつて居り狹い乍らもその間で自然に接する樣に出來て居た爲め、つい公園なるものが忘れられて居たと云ふ事である。それが時代の趨勢に供ふてその庭が狹められて行くとなると、一考されねばならないのである。そこで公園の設置と云ふ事も一つの問題であるが、出來得るならば個々の家に十二分の空地を保有せしめて空地問題を個々に解決せしむべきである。

然し乍ら商業地域や工業地域では時代の趨勢に逆行して迄も十二分の空地を保有せしむると云ふ事は事實困難であるがせめて住居地域にだけは實行されなければならない。現行法では住居地域の空地は四割以上となつて居ても、前述の如く一般的には四割を以て必要にして且充分であると解されて居り、この考へ方を矯正する事は殆んど不可能に近いものである。四割と云ふ割合の多寡は數字的に論ずる事は困難であるが、實際問題として充分でないと云ふ事は我々の屢々經驗する所である。純粹の庭以外に家には色々な用途で可なりの空地が必要なものである。純粹の庭として享樂される部分は四割からこの必要な空地を除いた殘りである。故にその殘りが過少であるのは當然である。忙がしく事務をとり、忙がしく身體を動かすものには差程の要求はないにしても、終日の疲勞を醫し、或は一日そこに起居するものには出來るだけ多くの空地を與へ、充分な光線と充分な空氣とを利用せしめなければならない。然るに四割で不充分であるとするならば、更にそれ以上の數字に書き換へなければならないのである。私は住居地域を再分割して一方の地區は在來の儘止むを得ないとしても、他の地區内にはこの充分な空地を持たせたいこと

を提唱するのである。そしてその地區内には廣い樹園菜園花園等十二分な空地に圍繞された理想に近い健康な團欒を造り出したいのである。

充分な空氣と充分な光線を家庭に享樂さす爲めには、我々は空地を考へると同時に建物の高さも考慮せなければならない。都市の建築物は初夏の筍の如くに日毎夜毎に天に向つて伸びて行く。その結果太陽光線の直射する土地は段々減じて行く。かくの如くにして不衛生の度を增して行く。それも場合によつては或る程度迄止むを得ないかも知れない。然し乍ら健全な家庭が營まれなければならない所では出來るだけそれは防がねばならないのみならず、必要限度で止める事を指導されねばならないのである。衞生的見地から現在の高さの制限の不充分な事は太陽の撓角研究によつて既に明瞭であるから、出來得る範圍内に於て完全に近かゝらしむべきであるその爲めに私は現在の住居地域を再分割して一方の地區の建築物の絶對高並に相對高を現行法規以下に下げることを主張するのである。そしてその地區には日當りのよい瀧澗たる市街の展開を見たいのである。

然らば以上の諸要求を貫徹する爲めに現行法令を如何なる程度に改正するかと云ふ問題が殘る。勿論筆者は立法技術に就ては全然無知識であるから。唯單に程度を示すだけに停めたい。

改正私案

法第二條・建築物ニシテ住居ノ安寧ヲ害スル虞アル用途ニ供スルモノハ住居地域内ニ之ヲ建築スルコトヲ得ス

令第一條　建築物左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ住居地域内ニ之ヲ建築スルコトヲ得ス

一、常時十五人以上ノ職工ヲ使用スル工場、常時使用スル原動機馬力數ノ合計二ヲ超過ル工場又ハ汽鑵ヲ使用スル工場但シ行政官廳住居ノ安寧ヲ害スル虞ナシト認ムルモノ又ハ公益上已ムヲ得スト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラス

二、五臺以上ノ自動車ヲ常時收容スル車庫

三、劇場、活動寫眞館、寄席又ハ觀物場

四、待合又ハ貸座敷

五、倉庫業ヲ營ム倉庫

六、火葬場

七、屠場

八、塵埃燒却場

九、前各號ニ揭クルモノヲ除ク、外行政官廳住居ノ安寧ヲ害スル虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スルモノ

建築物左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ住居地域内特別地區ニ之ヲ建築スルコトヲ得ス

一、前項第一號以外ノ工場及ヒ作業場

二、商業ヲ營ム用途ニ供スル建築物

三、**旅客用以外ノ社交的施設ヲ有スル**旅館
四、**飲食店及料理屋**
五、**遊技場**
六、**貸事務所**
七、**市場**
八、**汽車及電車々庫**
九、**三戸建以上ノ長屋**
一〇、**前項第二號乃至第八號**
一一、**前各號ニ掲クルモノヲ除クノ外行政官廳**
住居ノ安寧ヲ充分ナラシメサル虞アリト認メ
命令ヲ以テ指定スルモノ

令第四條　建築物ノ高ハ住居地域内ニ於テハ六十五尺ヲ、**住居地域内特別地區ニ於テハ四十五尺ヲ**、住居地域外ニ於テハ百尺ヲ超過スルコトヲ得ス
但シ建築物ノ周圍ニ廣濶ナル公園、廣場、道路其ノ他ノ空地アル場合ニ於テ行政官廳交通上衛生上及保安上支障ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス

令第七條　建築物各部分ノ高ハ其ノ部分ヨリ**建築物**ノ敷地ノ前面道路ノ對側境界線迄ノ水平距離ノ一倍四分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス且其ノ前面道路幅員ノ一倍四分ノ一ニ二十五尺ヲ加ヘタルモノヲ限度トス**但シ住居地域内特別地區ニ在ル建築物ニ付テハ一倍四分ノ一ヲ一倍ニ**ソノ他ニ在ル建築物ニ付テハ一分四倍ノ一ヲ一倍二分ノ一トス前項ノ高トハ前面道路ノ中央ヨリノ高ヲ謂フ

令第十四條　建築物ノ建築面積ハ建築物ノ敷地ノ面積ニ對シ住居地域内ニ於テハ十分ノ六、**住居地域内特別地區ニ於テハ十分ノ四**、商業地域内ニ於テハ十分ノ八、ソノ他ニ在リテハ十分ノ七ヲ超過スルコトヲ得ス但シ行政官廳特ニ指定シタル角地其ノ他ノ地區ニ於ケル建築物ニ付テハ此限ニ在ラス

細則第〇條　**住居地域内特別地區ニ於ケル高三尺以上ノ建築物ノ壁面ハ道路巾境界ヨリ六尺以上後退セシムヘシ**

前記の文面では法律からの改正と云ふ事になつて居るが、出來得るならば法律には手を附けず、勅令の改正によつて甲種住居地域と乙種住居地域に分け得られるならば結構であつて、目的は一つであるから手段が簡單な程理想である。唯その點は立法技術者に依頼したい。

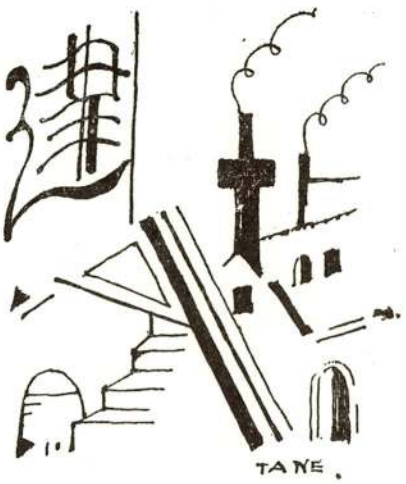
偖前記のものが勿論完全な總ての要求ではないが少くともこれだけ實行し得られるならば、現行住居地域制を著しく改善せしめ得るに相違ないと確信する。

唯この住居地域再分割制を主張するに當つて最も審議されねばならない事は地價の高い家賃の高い大都市に於て果してこの制度が實行性を帶びて居るかどうかと云ふ問題である。今日大都市の地價は他の物價に比して著しく割高である。大都市に土地を得る爲めに莫大な固定資本が投じられて居るその割高であるものを出來るだけ割高でなくする爲め、或ひはその固定資本を利廻りよくする爲めには土地は出來るだけ有利に使用せなければならない。即ち建築物の體積を增大せ

なければならない事になつて居る。然るにこの住居地域再分割制は建築體積の制限を更に嚴重ならしめ樣とするのであるからこの潮流に逆行するものである。故に一見この制度は方法としては拙なるもの或ひは實行難なる如く考へられ易い。然し乍ら上記の傾向は商業地域では顯著であつても、今後住居地域内に限つて必ずしも大したものでない事を斷言したいのである。何故ならば今後の地價の評定に就ては地域制が絶對の要件であつて、或る土地が商業地域であるか住居地域であるかによつて現在の地價及將來への地價の推移が著しく相異せなければならないのである。商業地域に於ける土地の選定と住居地域に於ける土地の選定には追々難易の差が甚だしくなり、商業用としての土地の獲得に就ては企業上土地の所在地が都市の中心地にのみ限定されることになり、企業に便宜な土地は多くの企業者から引つ張り凧になつて地價が躍り上げられる反し、住居用としての土地の獲得は交通機關の發達に伴ふて幾らでも郊外地に延び得られるから容易である。換言すれば商業用地の供給は限定されて居るから高價になり住居用地の供給は交通機關の發達によつていくらでも補充し得られるので地價の騰貴率は前者程でないことが明瞭である故に用途地域制が制定されて居る都市の商業地域の地價は或る高率な冪數を持つものに比例するに反し、住居地域の地價は生活費が因數をなすものであると考へられるのである。從つて前記の體積制限の加重も住居地域内なるが故に實行難に非らざることを斷言し得られる事になる。

のみならず住居地域の地價は住居の安寧を害する用途に供する建築物が一箇或る地に出來るとその界隈の地價が著しく下落するものであると云ふ事實に着目しなければならない。それは瓦斯タンク移轉期成同盟事件とかセメント降灰事件等で既に著明であるが、それに反して或る地方に立派な住宅が出來るとその邊の地位が著しく高上され、その數を增すに從つてその土地の品位を增すと云ふ事は事實である。故に住居地域内特別地區と指定された所は土地の品位の高上と云ふ意味に於て地價の騰貴を見ることが出來るのである。この事は既成住宅地に於て既に證明濟であるから今更說明を要しないであらう。この結果を豫想し得るだけでも特別地區の指定の困難でない事が分るのである。

最後に顧慮されねばならない問題は住居地域内特別地區の實行は一部有産階級に於てのみ可能であつて、果して全市民に普遍性があるかどうかと云ふ事である。總て地帶制に實行難がありとすれば必ずその地域指定の際に無理があつたと斷言出來るのである。本問題も特別地區指定の方法にさへ誤がなければ普遍性を帶びて居る事は保證される。又特別地區が指定されたからとてその地區内の家は全部廣大なる邸宅になるとは限らないのであつて、家主の採算上間數の少ない家も多く出來るであらう。この事實が本問題に解決の鍵を與へるものであると思はれる。（續く）



建築士法の制定に就て

會員　池田實

建築士法の制定に付ては二三年前から、日本建築士會の人達が頻に研究をせられて、其の草案を發表され、それに付て建築學會並に我日本建築協會に賛否の意見を求められたことがあつたが、建築學會もそれに賛同の意を表せず、建築協會も亦それに不同意の旨を決議したことがあつたやうに記憶して居る、併ながらそれは必ずしも建築士法の制定それ自體に對する反對ではなく、其の法案の内容如何が問題になつたのだと思つて居る、其の後の形勢は帝國議會の開會毎に建議案の形式で其の關係者の手から提出されて、最近には貴衆兩院とも採用されることになつたやうにも聞き及んで居る、併しながら其の建築士法案の内容に付ては人々に依て個々の意見は有つて居られるやうであり、又其の一二は耳にしたこともあるが、全體を通じた議論は餘り聞き覺えが無いやうな氣持がするので、根本的に少しく講究して見たいと思ふ。

外國の例を見ても、既に建築士法を制定した所もあるが、まだ議論中で其の運びに至らない所も、歐米の先進國内に於てもあるやうである、此の際急進國である我國がそれと轡を列べて驀地に突進しやうと云ふことも必ずしも悪いことではない、併しながら同時に事を新に定めると云ふに付ては餘程愼重な態度を以て研究する必要があると思ふ。

それで先づ根本的に考へることは、建築士の業務と云ふものは果して法律の下に之を規定する必要があるや否や、今假に建築士の業務に付て其の業務上似たものを擧げて見ると、一面に於ては辯護士、醫師、計理士の如きものとも共通するやうな點があり、又他面に於ては畫家、彫刻家、或は文士小説家と云ふやうなものとも類似な點が發見される、而して前三者に付ては既に辯護士法、醫師法、計理士法と云ふやうな法律が定められて居るが、後者に付てはまだ法律の力に依て之を制限して居らない、仍ち果して建築家の業務が前者に類似する點が多いと云ふことならば、建築士法案の必要はあるであらうが、建築士の業務が寧ろ後者に類似の點が多いとすれば、今日に於て其の必要が無いやうにも考へられる。

そこで先づ第一に茲に考へなければならぬことは、日本建築士會が建築士法の制定を唱導した理由が前者に類似したものと認めたものとして、尚ほ一つの問題は、果して醫師法の如き必要があると認めたものであるか、又は辯護士法の如き必要を認めたのであらうか——此の二つの法律は無論社會的にも必要と認めて制定せられたものではあるが、其の出發點に於て二つの大なる異つた徑路を辿つて居るものと思はれる言ひ換へれば、辯護士法は所謂三百代言などゝ云はれた不都合なる者の存在を除く必要上、其の制定を見たものであるが醫師法に至ては寧ろ醫師が自己の地位を安全ならしめんが爲に其の法の發布を要求したものと見られる、今日本建築士會が建築士法の制定を唱道して居るのは、果して其の何れの動機に依て居るのであらうか、徒に建築に對する學識素養の無い者が建築設計に携つて、社會に害毒を流して居ると云ふ點から其の必要を唱へるのか、又は所謂建築家が自己の業務の防衞の爲に、他より其の業務の範圍を侵されないやうにしたいと云ふ意志から起つて居るのか——或は此の二者を兼ねて居るものであると云ふ說も立つ場合もあり得やうけれども、自分の見る所では、寧ろ自己業務の防衞と云ふことが其の主要なるものを構成して居るのではあるまいか、從て其處に種々なる點に於て反對論が起り得るのである、例へば、相當資格のある建築士にあらずんば、建築設計に干與することは不可なりと云ふ立場から論すれば、內務省あたりに於ける市街地建築物法の施行に當る方面より見れば、此の市街地建築物法に依て建築物が社會に及す害毒は十分取締りつゝある故に其の設計者の能力如何は必ずしも問ふ必要はないのである、若し其の設計にして不可なる點があれば、建築監督は之を是正せしめて、施工せしむるが故に、必ずしも相當の資格ある建築士の設計に俟たねばならぬと云ふ理由を發見し得ないと云ふことになるのである、又建築の設計と云ふことは二つの方面から大體考へ得ることであつて、構造の方面から見たならば、是は相當の專門的知識を有つ者でなければ、之に干與し得ないことは明なことであるけれども、併し一面圖案と云ふ方面から見れば、是は必ずしも建築に對する特殊知識を必要としない、如何なる人にても相當に常識の發達し、圖案に對する天才を有つて居る者は建築の圖案を作製する能力もあり、又之を爲した所で、何等他に害を及すことも無い筈である、それで建築家の業務と云ふものが寧ろ畫家　彫刻家と同樣であるとすれば、今更法律の制定の下に自から狹い範圍に跼蹐して働くと云ふことは至て愚なことである、誰が考へても繪師法彫刻家法などゝ云ふものが將來に於ても出來やうとは豫想も出來ないであらう、併し建築家が辯護士、又は醫師と同樣なる社會的地位及び業務であると見れば、建築士法の制定は必ずしも不必要ではあるまい、今建築士法の制定が全然不必要なりとする立場ならば、こゝに何等言を費す必要もないけれども、遠からず我國に於ても建築士法の必要なる時代が來ると云ふ前提の下に考へたならば、法案の內容それ自體に付て考慮して見る必要が起つて來るのである。

前にも述べたやうに、日本建築士會が起草した建築士法案の內容に對する反對は之を分けると、大體次の二點である。

一は、建築士は請負業を營み又は之に從事することは出來ない。

二は、建築士に非ずんば建築の設計監督を爲すことを得ない。

此の二點が問題の中心となつたやうに思ふ、其の第一の、建築士は請負業を營むことを得ず、と云ふ點に付ては多小議論の餘地はあるも、大して反對の意見は無いかも知れぬが、請負業に從事することを得ぬと云ふ點に付ては、少壯の建築家であつて、請負業者に雇傭されて居つた者、言ひ換へれば請負業者の設計部に於て活躍して居つた連中は自から建築士の資格ある者と考へて居つたに拘らず、請負業に從事するが故に、其の資格を得ざるものとすれば、こゝに非常な或種の侮辱を受けた如き感を有つであらう、又第二の建築士に非ざれば設計監督を爲し得ないとすれば、從來各官廳の技師又は各大學に於ける敎授助敎授の連中は內職的に建築の設計監督を依賴され來つたことを、將來に於ては全然之を放棄しなければならない立場になる、從て其の方面に建築士法の制定に對する反對の聲が盛である、殊に其の方面の人が建築學會の重要なる地位を占めて居つた關係上　建築學會に於ては日本建築士會の法案に對して根本的に反對をしたやうに見受けられる、之に付ては其の後原案に修正を加へて

建築士は建築の設計監督を爲すものであるが、建築士としての登錄をしないものでも建築の設計監督に從事し得ると云ふやうな骨拔の案になつた、言ひ換へれば、建築士として登錄すれば、何等か過失のあつた場合には罰せられ、建築士の登錄をせずして設計監督をなせば、何等さう云ふ制裁を受けないで濟む、と云ふやうな、矛盾した骨拔の案となつてしまつた、即ち之に依て第二の諸官署の技師連並に大學或は專門學校の敎官連中の內職に差障りの無いやうな拔道を作つた譯であるが、併しそれでは法を制定する根本義が崩れるものと見なければならない、苟くも建築士法を制定する以上は建築の設計監督は建築士に非ずんば爲すことを得ずと、何處までも明斷的に制定すべきものである、姑息な、骨拔な、一部の氣息を窺ふやうな案は當然として成立さすべきものではない、又第一の建築請負業を營む者、又は之に從事する者が建築士たることを得ずと云ふのも、餘程考慮すべき餘地があるので、請負業に從事する者は寧ろ建築士たる資格を與へることに何等不都合は無い、のみならず、將來の建築をして事實上良好なもの、完全なものたらしめんとするのには、建築請負業者自から建築士たるの資格ある者に限る、又は少くとも建築請負業者は建築士を專任的に自から雇傭して、其の營業に當らしむる必要のあるものと自分は思ふて居る、言ひ換へれば、自から建築士たるの資格を有つか、然らずんば、建築士たるの資格ある者を雇傭するに非ずんば、建築請負業を開始することを得ずと、明に何等かの法律に於て定めることが至當であると思ふ、何故ならば、所謂建築士の爲すことは紙上に於ける設計と、口頭に於ける指揮命令に過ぎずして建築の實體を構成して行くものは、寧ろ建築請負業者の手中にあるからである。

そこで右に述べた二大難關を如何に解決すれば可しいかと云ふことが、此の建築士法が成立するや否やと云ふ岐路であると思ふ、以下それに對する自分の解決案を述べて見やうと思ふのである。

建築士に非ずんば、建築の設計監督に從事することを得ず

――と制定して、前述の一部に於ける缺陷を補ふことは、一面から云へば、之に依て諸官衙の技師或は學校の教官連中が設計監督に從事し得ないことになつても、それは場合に依れば止むを得ないことである、併しながら初に於て述べたやうに、建築家の業務が一面醫師、辯護士に似て居ると同時に、一面畫家、彫刻家とも共通の點があると云ふことから考へて見て、辯護士になる者は同時に裁判官たることは出來ない、併ながら醫師は大學の教授或は官廳の技師にしても醫師法の登錄に依て醫師たるの資格を持つて居る者が、醫科大學の教授にして病院の委員長、或は課長其の他の醫師として働いて居る、今假に建築家の業務が醫師の業務と同じやうなものであると考へたならば、專門の建築士は所謂開業醫であつて、大學の教官或は諸官廳の技師は矢張り官吏にして同時に建築士たる資格を有つて居ることに於て何等不都合も無いことゝ思ふ、但し官吏なるが故に他の委託を受けて建築設計に從事することは不可なりと云ふ場合があつたとすれば、それは一般官吏が他の委託を受けて何事を爲さんとする場合にも本屬長官の許可を得なければ出來ないことに、所謂官吏服務規律に於て制定されて居るのであるから、其の問題は其の服務規律に依て自から解決されることで、建築士法に於ては何等考慮する必要は無いのであるまいか、言ひ換へれば、建築士なる資格は辯護士の如き資格に非ずして、醫師の如き資格なりとして、開業すると、せざるとを問はず、當然其の人の所有して居る資格なりとすれば、其の資格を有する建築士が自營を爲すとも、又他の官廳其の他に奉職しながら、間職的に之に從事しやうとも、何等差支ないものである、此の點から見て建築士に非ずんば建築の設計監督に從事することを得ず、と斷定しても、如何なる方向にも理論上又現下に於ける實際の狀況より見ても、何等の不都合は起らないのである、詮じ詰めれば、其の見方は建築士の業務は醫師の業務と同樣なりと認むることに於て此の結論を得られるものと思ふ。

次に近頃の傾向を見ると、世の中の不景氣な關係からでもあらうが、相當なる請負業者は同時に其の中に設計部なるものを置き、建築士たる資格ある者を雇傭して、設計監督のことに當らしめて居り、而も其の傾向は漸次擴まりつゝある、又他方所謂建築士なる設計監督を本務として居る者が一面に於て實費精算其の他之に類似する名稱又は方法の下に建築の施工に干與せんとしつゝある傾向を認める、そこで根本的の問題として、建築家は唯紙上に圖案を作り、而して其の實施に當つては單に口頭に於て指揮命令をして居るのみか果して其の根本的の任務であらうか――建築の本體は寧ろ其の施工にあるのであつて、設計は其の前提に過ぎないものである、前提が如何に良くつても、實現が不可であつたならば、何等意義を成さないものと見られる、從て建築に關しては設計に重きを置くと同時に、施工と云ふことに付て從來以上に建築家が深い注意を拂ふべき必要があると思ふ、斯かる點から考へると、建築家が施工に當て、唯請負人の手を經て、それの使用する各職工其の他を間接的に指揮命令して居ることは、所謂隔靴搔痒の感がある、何故に建築家は自から職工其の他を直接指揮監督して行くやうな組織の下に建築の實現を圖らないのであらうか、言ひ換へれば、請負人たる實施上の總指揮官たる位置に建築家自からが當るべきものであると思ふ、但

し一言之に附加へて置く必要のあるのは、今述べた事柄は、建築の施工の實體に付て言ふたのであつて、其の請負金額の如何と云ふことを併せ言ふて居るのではない、又近頃唱道されて來て居る所の實費計算式なるものは、將來に於て暫くの間或程度まで發達するものと思はれるけれども、併し長き將來を考へると、到底成立するものではないと思ふ、尤も今日新しき急進の建築家が其の實費計算式に依てでも建築の施工實現に直接干與しやうと云ふ其の心事は洵に稱讃すべきものにして、又必ずや斯くあるべきものと自分は信ずるのである之に付て曾て或人が、從來の如く、建築家は唯所謂設計と監督のみをやつて、施工は全然請負人任かせにして置くと云ふが如きは、恰度之を醫師に譬へると、診察は醫師自から之をするが、それの手術は醫師たるの資格なき一看護婦に任かせて居るのと同樣である、と喝破して居たことがあるが、言は少しく過激なやうではあるけれども、今日の設計監督のみが建築家の任務であるが如く誤解して居る所謂建築家に對しては、又以て深く味つて見るべき價値のある言葉だと思ふ、それで建築家は請負業を自から營むことを得ず、と、建築士法の中に制定することに付て敢て異議は無いのであるが、之に從事する建築家が尚且建築士たるの資格を保有することは何等差支ないのであつて、恰度官廳の技師教官が官吏であると同時に建築士の資格を保持して居ることに差支が無いのと同樣に取扱つて可いと思ふ。

尚ほ最後に一言附加へて置くことは、建築家が施工の衝に當ると云ふことは、其の自から設計したるものゝ施工に當ることを主として論じたのであつて、他の者の設計したものまでも之が施工に當る場合は、是は當然たる請負業であると認めて、其の建築家の任務であると見ないことは、固よりのことである、即ち今自分の建築家が其の施工の任に當るべきものだと云ふことを述べたのは、其の範圍に於ける事柄であつて、此處が一般請負業者と建築家との間の大なる又明瞭なる差異である、從て建築家は施工の任に當る場合に於ても、入札或は見積合せなどを爲して、尚且施工を爲さんとすれば、是は當然請負業者の範圍に入いるものと見るべきである、然らずして施主が設計、施工、監督の全部を其の人を信賴して一任する場合に於ては、建築士は當然其の施工の任に當て何等差支ないことゝ思ふ、言ひ換へれば、建築士は請負業を營むことを得ず、と云ふ中には、前述の施主より信賴されて、設計、施工、監督共に一任されたものを含まないものと解釋すれば、こゝに適當な解決が得られるものと思ふ。

まだ盡さない點もあると思ふが、詳細なことは又他日を期するとして、大體以上の二つの大なる問題を速に解決して、之を建築士法案の骨子としたならば、建築士法の成立は洵に易々たるものであつて、一般建築家が如何なる方面から見ても、此の建築士法の制定に關して反對する理由は全然消散するものと信じし疑はない。

建築士法制定ニ關スル建議案

建築士法制定ニ關スル建議

方今時運ノ進展ニ件ヒ公私ノ建築的施設竝經營ノ事業漸ク隆昌ヲ來シ其ノ問題處理ノ上ニ於テ複雜ナル事情ト機微ナル事態ノ頻出ヲ見ルコト亦往日ノ比ニ非ス此ノ時ニ當リ能ク一般經營ト企業ノ實際ヲ善導シ以テ個人ノ利益ノ保護ト併セテ國民生活ノ改善進歩ニ資セムカ爲ニハ之カ事業ノ計畫監督竝其ノ實施ノ指導ノ上ニ公平ナル技術的判斷ト適當ナル專門的訓練ト專心ナル職業的奉仕ヲ要スルコト今日ノ如ク急ナルハナシ而シテ專門的ノ教養ト實際上ノ訓練ヲ有スル技術者ナル建築士ヲシテ營利ノ立場ニ非サル獨立ノ職業的地位ニ立テ能ク其ノ心ヲ專ラニシテ一般公私工營ノ問題ニ關スル公平ナル處理ノ職責ニ任セシムルハ之カ對策ノ一トシテ正ニ缺クヘカラサル必須ノ事ナリ

之カ爲ニ建築士法ヲ制定シテ建築士ノ資格ト職責ヲ明ニシ登錄ノ制ニ依テ其ノ社會的ノ地位ヲ確立セシムルト共ニ兼テ其ノ義務トシテ操守スヘキ所ヲ示シ以テ同業相率ヰ相戒メテ其ノ使命ヲ全ウスルノ途ヲ啓クハ徒ニ歐米ノ制度慣例ヲ模倣シテ惟レ足レリトスル所以ニアラス寔ニ我カ國ニ於ケル刻下ノ急務ナリトス蓋本法制定ノコトタル即チ之ニ依テ現行ノ建築物法カ職能トスル建築ニ關スル物的消極的ノ取締ナル其ノ一面ニ新ニ人的積極的ナル助長ノ一面ヲ加ヘ以テ現行制度ノ缺ヲ補ヲテ之ヲ完成スルト共ニ彼此相俟テ始テ茲ニ其ノ現行法規立法ノ精神タル建築改善ノ實ヲ擧ケ得ルニ庶幾キヲ以テナリ

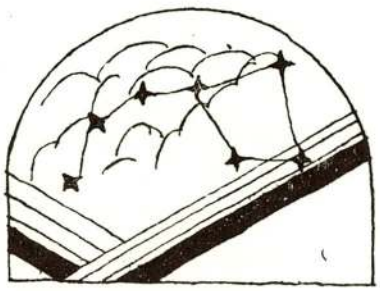
本法ノ制定ニ關シテハ曩ニ第五十回帝國議會ニ於テ本院ヨリ政府ニ建議シ第五十一回帝國議會ニ於テ再ヒ本院議事ノ日程ニ上リタルモノナリ而モ今日ノ世態ハ徒ニ之カ遷延ヲ容ササルモノアリ政府ハ速ニ建築士法ヲ制定シ建築士ノ資格及職責ヲ明ニシ且其ノ登錄ノ途ヲ啓カレムコトヲ望ム

右建築ス

建築士法制定ニ關スル建議案理由書

本案提出ノ理由ハ本文ニ詳ナルヲ以テ茲ニ之ヲ贅セス

○副議長（小泉又次郎君）　省略ト認メマス



憲法發布記念建造物の計畫發議

武藏野高等學校教授　山本良吉

明治天皇の御一代に於ては、わが歷史上後世に記念すべき事蹟はいくつもあるが、その中に於て最も偉大なものは憲法の發布である。わが國民は是非ともそれに對する記念物をもたねばならぬ。天もしわが國に幸し、將來に於て漸次憲政の美果を實現し得るならば、それと共に種々の記念事業が益々多く營まるであらうが、取り敢へず發布五十年の記念として國民は今から準備する必要があらう。五十年には尙十二年あるが、しかし憲法を記念すべき事業としては、國民は十分に考慮を練り、後代をして眞にその目的に反かぬと首肯せしめるだけにせねばならず、それには十二年の年月は決して長いとはいはれぬ。

この種記念事業は、誰にもすぐ眼に見えて、それかとわかる性質のものであるのを必要とする。慈善事業とか社會事業などは性質はよいが、この種の記念には適しない。況んやその事業の經營がもし適當に行かぬときは殊に面白くない結果を生ずる點に於ても、避くべきである。從つて憲法發布の記念としては建造物が最も適當であると考へる。歐洲に於て大戰の記念は今尙年にいくつとできるが、いづれも此建造物であり、大小色々あるが、記念以前に精神的又は物質的に國家又は都市町村の飾となるのを主として居る。

憲法發布記念としては、それを建てる場所は將來は知らず第一回のとしては是非とも東京の宮城附近に置きたい。宮城の正面馬場先門（今は便所だか燈籠臺だかわからぬ不思議な不恰好な小建造物が左右にならんである處）の內側に大きな門を造るか、然らずはその左側、今の松原中に美術館を建てるか、この二が最も適當かと思はれる。

右の場所を擇ぶのは、宮城の正門に當るからであるのは勿論であるが、その外にも建築上から理由がある。あの處の外は全くの外國風の建築でみちてゐる。然るに御壕もその內の石垣も遙か向ふの宮城一帶も皆純然たる舊日本式である。橋の上にたつてみると、前と後とで全く時代と民族性とを異にした物が相對してゐる。あの橋はまさしく封建時代と二十世

紀とを連結してゐる。それは丁度明治が兩時代の連結者であるとと同樣である。明治が時に於てなした事を、あの橋は場所に於てなしてゐる。明治維新が兩時代の境目であるといひたいが、明治維新は實は破壞しただけで、何物をも建設しない明治維新の精神は積極的に建設した者(の一)は即ち憲法發布であり、その記念がこの永遠に兩時代の連結者として殘る馬場先門の內にできることは誠に宜しきを得た企であるまいかこの意味に於て憲法發布五十年の記念は正に右の場所にたてらるべきである。

兩時代を連結する場所にたつ兩時代連結の記念建造物としては、建築の樣式には十分の注意が拂はれねばならぬ。それはその建築の樣式が憲法發布及びこの場所と同じく、兩時代の連結たる意義を適當に表象することである。現代に於て盛んに行はれる公共的建造物の樣式については、識者の悉く顰蹙する所である通り、何等日本民族特殊文化の精神がくみいれられない。それ等は皆民族文化史の何等知識もない建築技師が、外國を素通りして、その建造物をちよつとのぞき見てしかもそれを理解すべき西洋文明の知識もないので、頭の中には秩序もなく系統もなく西洋建築の印象を濫りに混入させて歸つて來て、直ちにそれをわが國に移さうとするのであるそしてその建築されるべき場所に關する歷史的知識もなく、その現在の周圍との關係をも深く考へず、たゞ頭の中にふいと浮び來つた外國の某建造物を模してそれを移入する。それが現代の所謂設計家であり現代の新建造物である。實に大學を卒業したばかりで實際に當る危險は建築界(と行政部)に最もよく見える。現代の建造物を譬へていへば下痢患者の糞便と一般で、消化されない種々の物の片れ端が無秩序に雜糅して居るにも似て居る。維新以來、外國の思想とさへいへば何でもかまはず移入し、反對の物、矛盾の物、わが民族性が國體と相容れぬ物でも、表面上甚だしい不都合さへなくば—少なくも深い意義に於ては無教育な細吏がかく考へさえすれば—わが社會に大手を振つて橫行することを許されたわが思想界と同一步調のものと見れば、やむを得ぬことではあるが、六十年の歲月は建築にとつては餘りに短かい時ともいはれまい。國民はもう下痢患者的設計から脫出してもよい時である私が馬場先門を憲法發布五十年記念物建造地にあてたのはこの目的からである。

この建造物は、それが何であるに論なく、一方御壕外の氣分に適すると同時に、更に大切な事は石垣內宮城全部を企んだ氣分に最もよく適應することである。それを見る者をして一方舊日本の空氣內に逍遙するの氣分を抱かしめ、しかも尙現代人たるの意識をもたしめることが、この建造物の任務でなくてはならぬ。勿論かゝる設計は公募されるに相違ないがその審査に當る者についても少なからぬ注文がある。かゝる設計の審査者はその第一資格としてよくわが日本の文化に精通することを必要とする。わが建築學界一般未進の結果、從來の所謂審査員なる者の態度が亦甚だ怪しく、建造物そのものゝ意味を考へるよりも、寧ろ自ら舊式思想といはれるのを恐れ、何にも何物にも適合しないものでも、單に意匠が新らしいからとて當選せしめたのではあるまいかと思はれた事は殆んど常例といつても差支あるまい。藝術には新舊はない、只眞なればこれ新である。新なるを衒はんがために、意味そ

の物を沒する如き不純な思想の者には、斷じて大建造物設計の審査を托すべきでない。新といふが、新は常に變ずる。價値のない物程早く變ずる。それが今日印刷して明日消える小說類ならば差支はないが、建造物はそれを設計する時に於て常に永遠を期せねばならぬ。もし新を望むならば、永遠に新でなくてはならぬ。設計者は永遠の新即ち眞をその建築に表現し、それに永遠に民族を指導する力を與へねばならぬ。一時の思ひ附や一時の流派などの傾向に捉はれて、永遠的たるべき建造物を設計し又審査してはならぬ。藝術は常に固有文化の中から止むに止まれず押し出されたものでなくてはならぬ。新らしく見せよう、評判を取らう、賞金をあてよう、外國のまねをしようなど一切不潔な動機から來たものには、眞の生命はあり得ない。審査員はそれを看破して、眞に固有文化の核心に徹し得る人でなくてはならぬ。材料保强學の知識があるから民族文化の理想を理解し得るだらうと信ずる如き笑ふべき標準によつて審査員を選定してはならぬ。

この永遠的建造物の設計に於て、右の方針で公募し又審査すれば、必ず從來の外國移入の物と類を異にした純日本に近い建造を得ることゝなり、そしてそれが恐らく一般建築界に影響して、この方面に於ても固有文化に眼ざめる機運を促さう。かくしてこの記念物は民族思想上に於て帝國憲法がなしたと同質の効果をあげることゝなる。かゝる設計は相當に調査考究を要し、假すに年月を以てせねばならぬ。十二年の年月がかゝる企に對して決して長きにすぎぬといつたのは、このためである。

現狀に於ては、宮城前の御壕内に於ても政府の手によつて遠慮なく西洋まがひの建造物がたてられる。考なく見ればあれで結構かも知らぬが、まじめな日本人としては、せめてはあの部分だけは純日本の氣分のたゞよふやうにしたい。西洋風の建造物は經濟上に於てさけ得ない。しかし宮城前まで經濟的建築をたてつめねばならぬ事もあるまい。街路に於て移入そのまゝの建築物を見、足一歩御壕を渡れば固有の建築の氣分に接し、固有の文化を懷ひ起せること、民族に取つていかにゆかしく奥深く感ぜられるであらう。國民が民族固有の文化に於て中心の滿足を感ずるとき、そこに始めて民族たる眞心が起る。この民族たるの眞心が即ち愛國心である。民族文化に對する愛着心がなくて、たゞ外國に對してのみ感ずる精神狀態を從來愛國心と誤り考へて來たが、あれは愛國ではなくて敵愾心である。敵愾心は戰時だけには効をも奏さうが民族文化の發展にはさしたる効果のあるものではない。國民が外國品の移入のみを見、それに滿足を感じないで、しかも滿足な氣持をもたねばならぬとなると、國民はいつも不滿足を以て滿足せねばならぬ。國民の情操の中には滿足といふものが消滅する。その結果は、落附もなく、秩序もなく、丁度國をあげて常に火事場に居る樣な氣持となる。今のわが國民は思想が亂雜なのではなく、感情全體が亂雜なのである。中心の滿足といふものを全く味ひ得ない精神狀態である。大戰後のイタリヤの精神狀態と幾分似通つた所がある。ちよつと外力が觸るとすぐ爆發する潛性は、民族文化に接しない不滿足の結果である。ムソリニのえらいのは、イタリヤ民族にこの求めて得られなかつた民族文化のひらめきを與へた所にある。私はムソリニといふ人格が與へた事を、せめては建築によつてでも與へたいと思ふのである。

勿論私が前に固有の建築の氣分といつたのは、萬事封建以前に溯るべしといふのでは決してない。たゞ無理解無判斷に不適當に―又は適當か不適當かを全く考へないで―外國の物を移入する氣分に反對する意味に外ならぬのである。實は東京には維新以後歷史とか民族文化とかの感じは消滅に近づいて居る。明治の維新とは東京にとつては江戸の歷史と全く關係のない田舍武士の蹂躙といふ事である。東京は田舍武士が財を貪り官位を貪り色を貪る場所であつた。歷史や文化が東京の表面から抹殺されたのはやむを得ない。その中に人工的に生長した所謂新らしい學問を修めた小行政官、小技術家が震災後の東京復興に當つて居る。かれ等は復興事業を學術の實習と心得て居る。かれ等がなす東京復興は單純に歷史の汚瀆であることが少なくない。廣い東京は全體としては一の工場の感じを與へる。どこへいつても、靜かに心をおちつけてわれがわれに歸る氣分を與へる處は一つもない。否、東京人は既にかゝる氣分その物を忘れてしまつた。イタリヤ人は大戰後の情態に對して尙心の一隅に不滿を感ずる力があつた。さすがにイタリヤには民族文化が大切に保存されてある。わが東京人は既に不滿に感ずる力をも失つた。人生その物を職工生活と考へて居る。人はそれを以て新文明に向ふ展開であるといふ。私はそれが民族が自滅に向ふ一階段ではあるまいかと恐れる。東京は實にわが帝國の都であるが、どう考へても帝國の御座敷ではない。今の處帝國の應接室の役を勤めて居るにすぎない。せめては宮城前だけでも稍座敷に近い處としたい。そして畏れ多いが、わが皇室を民族文化の表現で同時にその保護者と仰ぎたい。英國皇室の如きは常に多大の注意をその民族文化の保護に拂はせられる。まじめな國民尊崇の中心となられるのは誠に尤もである。わが宮城前のこの記念建造物を以て、願くば眞の帝國の御座敷の飾りともしたい。

かゝる記念物を造るには、その經費をいかにすべきか。性質からいへば一般臣民が拂つて居る租稅でするのが當然であらうが、租稅ですると、種々の拘束がいり、殊に文化にも建築にも思想にも何の關係もない若い行政官が往々不當な容喙權をもつ恐れがある。實をいへば、現時に於ても各地方に於てわが民族の文化財を破壞する元は多くはかゝる官公吏である。文化に關する事はなるべく官吏の容喙を許さず、眞に國民文化を愛し憂へる、眞の意義に於ける愛國者の手に於てすることゝしたい。殊に現今の如く無教育無知識な者が何時でも國家最高官につくことができ、泝猴でも鷄冠さへすれば、それがどこにでも發言權を有する情態にあつては、まじめな仕事はなるべく民間で執行することにしたい。そして五年十年同一の方針で進み、政黨などの勢力の消長によつて方針の變更を見なくしたい。從つて記念物の經費は全く民の手で集めることにしたい。その方法の例として考へられる一をいへば、十二年間每月小學校生徒の父兄から一錢(又は以上)づゝ集めるとすれば、年々百萬圓を得ることができよう。即ち十ケ年で千萬圓を得られるわけである。これは國民が憲法に對して感ずる興味によつて定まることであり、憲法に對する興味は憲政に對する興味によつて定まる。政府が政黨と混同され、政府の地位につけば、私黨擴張のためには國家の將來の如きは一切考へるに足らぬとの思想が社會の一隅に凝結して居る樣では、識者は憲政に對して高い感興をもち得ない。識者の不贊成はかゝる記念事業の達成に對して強い反對となるに相違ないが、かゝる變則的行爲は社會を通じて深く愼み、憲政は國家の將來に對して眞に無終の美を成すものとの信念を一般にもたかしめるに至らば、この事業の遂行は餘り困難ではあるまいと思ふ。又記念事業によつて國民の注意を新たに憲法に向けることができれば、これ亦憲政の幸である。小學生徒の父兄から徵集するのは一の方法であるが、類似又は更に有效な方法は尙いくらもあらう。いづれにして國家內に於ける信用ある士君子が力を合せてこの事業に盡せば、經費はさしたる問題ではあるまいと思ふ。

土地區劃整理後の町界町名地番整理（一）

會員　加藤善吉

一緒言

現代都市發達膨脹の異常なるに伴つて市周圍部に於ける農耕地も急進的に都市化し宅地として開發せられつゝある現狀に於て、この秩序なき無系統なる發達を防止し統制ある健全な市街地を形成せしむるには都市計畫法に於て認められたる土地區劃整理を斷行するにあらざれば不可能である。此の意味に於て大阪にあつては阪南土地區劃整理組合を始めとして續々組合の設立を見るに至つたが更に大正十四年四月一日西成、東成の二郡四十四ケ町村を併合して大大阪を現出せしめたる其の新市域に對して着々として區劃整理を奬勵し實行の歩を進めつゝあると同時に其の他の郡部に於ても必要なる町村に對して之れを慫慂して實行せしめ三島郡吹田町、北河内郡守口町に於ても區劃整理設計認可を急ぎつゝある現狀である、又從來耕地整理法に基きて土地を整理區劃して宅地として形成せしめつゝあるあつて兎に角斯の如き方法に於て大阪も漸次周圍部の秩序ある發達をなし得べき方策を確立して着々進捗しつゝあるのである。然しながら土地區劃整理は言ふまでなく位置形狀又は面積の不良なるため建築敷地として適せざる土地を適當なる建築敷地となす目的を以て土地の分合をなすことであるから其の劃地の形狀及面積はその上に建築せらるべき建築に關して十分の考察を必要とするものである都市計畫も亦然りであつて此の意味に於て歐米に於ける都市計畫は從來街路を主としたるものが近時は漸次建築を中心眼目として街路を從たる地位に置かむとする新傾向を齎らして來た事は大に味ふべきことであると思ふ、殊に區劃整理の如き都市計畫街路系統に準據してその幹線街路間に介在する土地の整理はその凡ての計畫に於て建築物に關する考察を閑却する譯には行かぬ。この點に鑑みて今日計畫し實行せられつゝある土地區劃整理に於ける建築敷地は合理的であるや否や元より當局に於ては勿論實施者に於ても十分なる調査考究の上に實施されつゝあるのであるが其の街廓及劃地の形狀面積は果して將來に備ふるに適當であるかどうか何れもが只單に矩形の街廓の連合に過ぎざると思はるゝ單調な區劃整理のみでなく土地の地勢風物に依つては變化あるものとするを要せざるや、この點に關して尚一段の攻究を要するものありと思ふのであるが、何れにしても區劃整理に依りて整然たる街廓

及適當なる劃地を得ることは衛生上に及ぼす影響は勿論交通保安上の需要を充すものであることは殆ど說明を要せぬ。然しながら尙一層これを効果あらしむべく更に進んで整理完成後になすべき重要なる事項がある。即ち都市政策上最も必要なる問題として區劃整理後の町界、町名、地番の整理變更である。町界町名地番の複雜にして無秩序なるは通信、交通行政上等に及ぼす支障不便は言ふまでもなく都市民一般の受くる迷惑も亦甚だ大なるものであることは吾々の常に實驗する處である。然しながら從來は斯の如き支障困惑を感じながらも我が國に於ける如き漸進的に膨大したる都市にあつては收拾すべからざるものとして等閑に付せられてあつたのである。が彼の關東大震災の後を受けて帝都及橫濱に於ける復興計畫に伴ふて之れを斷行すべき時期に際會し區劃整理後に於て町界町名地番の整理を實行するに至つたのである。これが發端をなして識者間に注意を惹くに至つた事は晩まきながらも喜ばしきことゝ言はねばならぬ。從來の如き何等の規格統一なき町界町名地番は凡ゆる方面に非常なる迷惑を及ぼすものであるから是れを統律する必要痛切に感ずるものであつて大阪に於ける市域擴張に伴ふ今回の町名變更も一時的急場の姑息的手段に過ぎず、まぎはらしき町名は改稱したが大部分は舊町村大字名を其の儘襲用したものであるから區劃整理に伴つてこの機會に於て町界町名地番の改廢を行ひ改善整理することは最も時機を得たるものであつて此の機を逸して悔を將來に殘してはならぬ。故にこの場合是等に對する町名地番の統一ある組織的整理方針を用意して置くことは最も必要なことである。町名地番の變更は其の都市の市長及稅務署長の權限に屬するものゝ如くなるが區劃整理の場合に於ける相當廣き面積に渡る集團的のものに於てはその町界町名地番の變更は豫め組合に於て案を計畫せしめそれを尊重してなさるべきもので阪南土地區劃整理組合の如きは既に案を立てゝ市に提出してある故に大阪に於ける如く土地區劃整理の進捗著しく且個人所有の土地を單獨で整理する場合等あるに於ては當局者は勿論土地區劃整理組合に於て十分攻究する必要があらうと思ふのである。勿論大阪市當局に於ては十分の調査研究を怠らず既に之等に關する大阪市の組織的方針がある筈であるが一般組合及市民の注意を惹くに至らざるは遺憾であるから或は既に熟知せられてゐる向もあるであらうが余は本誌をかりて復興局に於ける調査研究と富樫建造氏の所論を基礎として少しく其の綱要を述べて見やうと思ふのである、堺市に於ては既に同市都市計畫部の梶浦技師は大に研究せられ同市の區劃整理に手腕を振はれて居る。

二　町界町名の整理

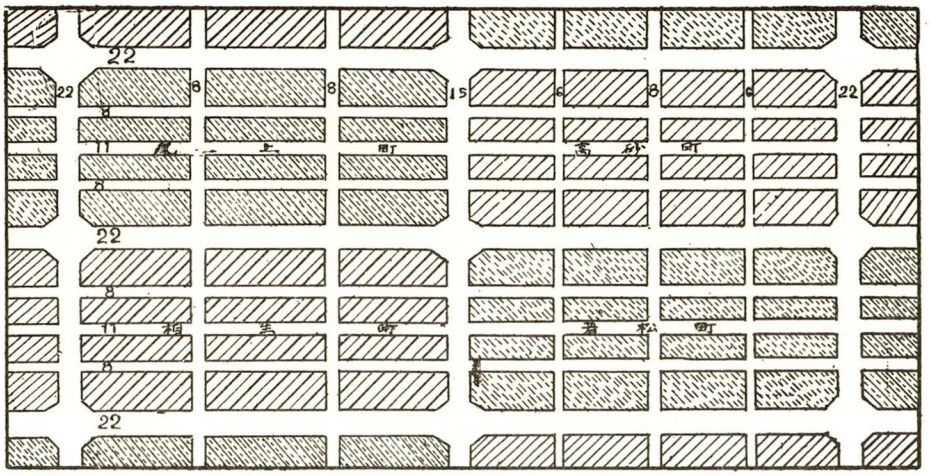
町界町名の整理に關しては種々なる方式と方針がなければならぬ、今之れを述べる順序として一、町割の方式、二、町の境界線、三、町の形狀及大さ、四、町の組織、五、丁目の境界、六、町の配列、七、町の起點及進路、八、町名の八項に分ける。

先づ第一は町割の方式であるがこれを分ちて街廓式と路線式となし得ると同時に之れを併用する結合式もある、更に分ちて左の五種とする。

一、街廓式　（第一圖參照）
二、第一路線式（並列式）　（第二圖參照）
三、第二路線式（縱橫式）　（第三圖參照）

町割方式一

街廊式

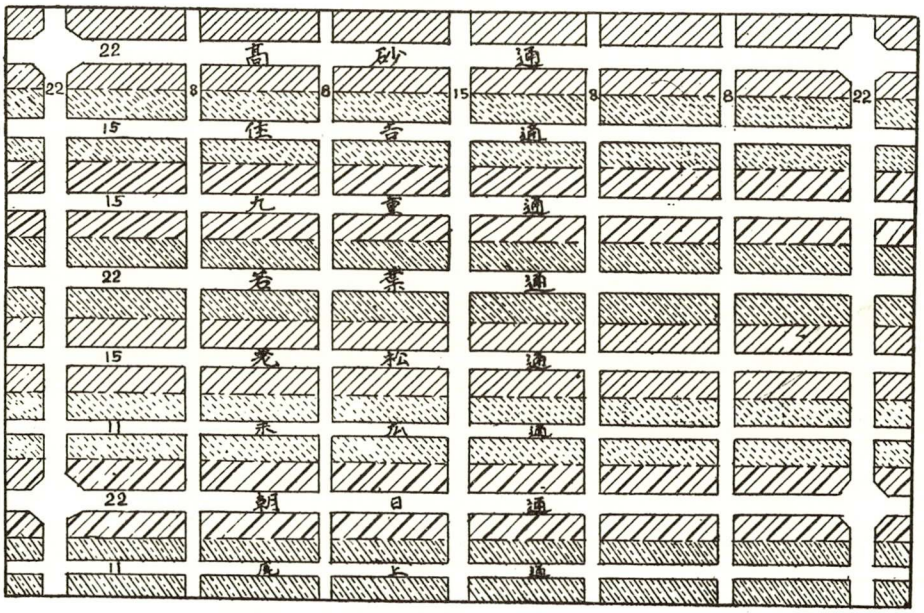


（圖　一　第）

町割方式弐

路線式

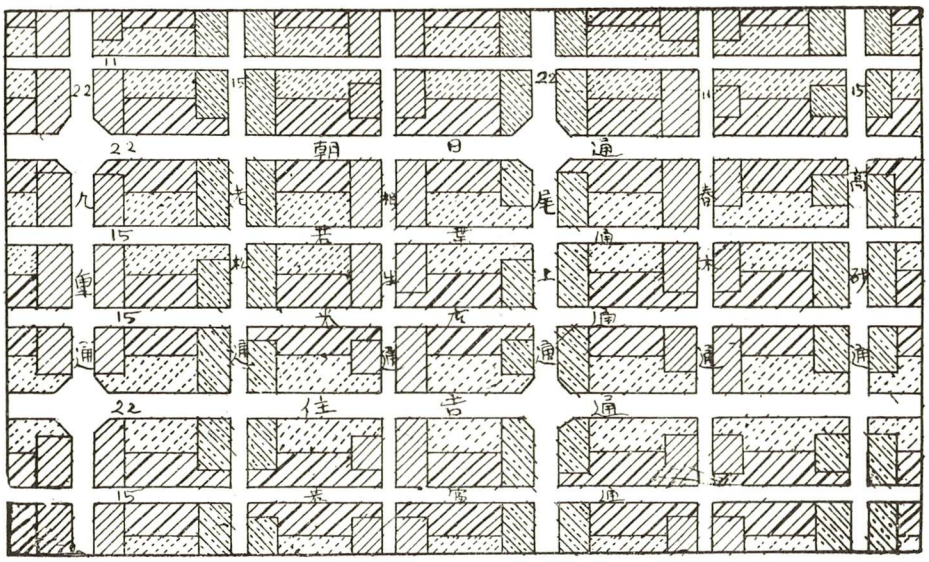
（並列式）



（圖　二　第）

町割方式三

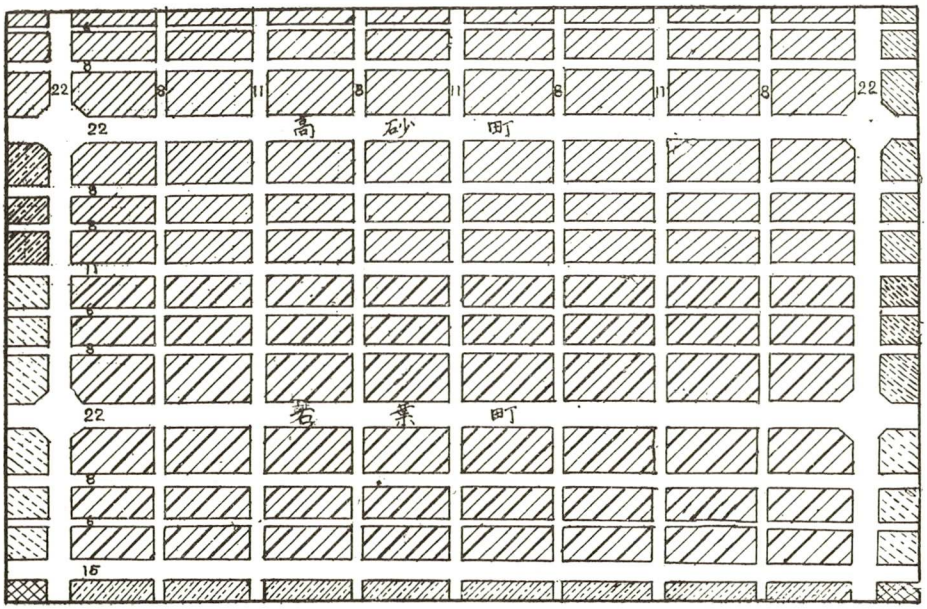
路線式
（縱横式）



（圖　三　第）

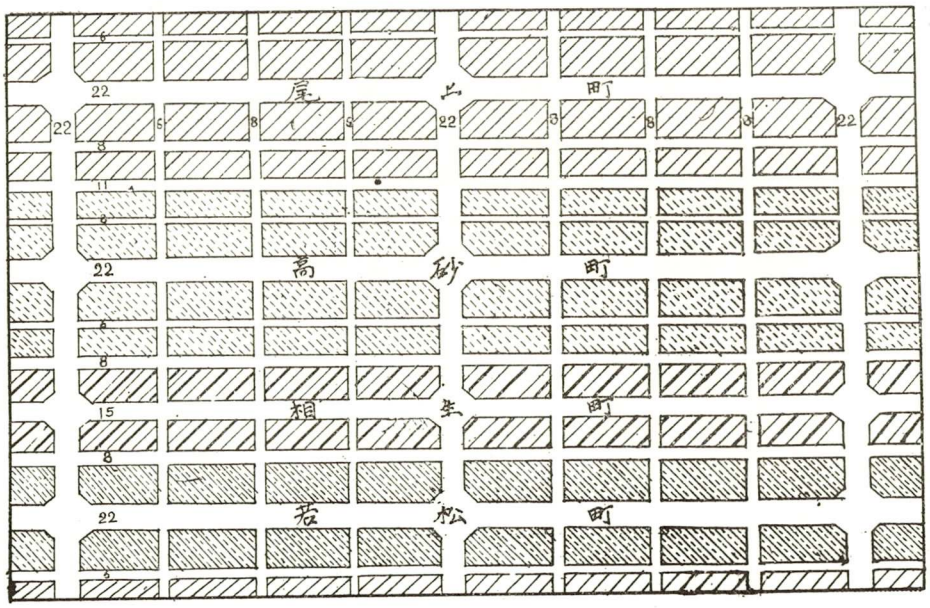
町割方式四

結合式
町幅廣々場合



（圖　四　第）

（第五圖）



四、第一結合式（町幅廣き場合）（第四圖參照）

五、第二結合式（町幅狹き場合）（第五圖參照）

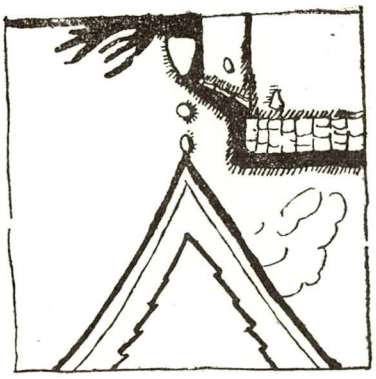
之れを說明すれば街廓式とは一つ又は二つ以上の街廓の集團を以て町を構成し町界は主として主要街路の中心線をとるもの從つて多くの場合主要街路の兩側に於て町名を異にするものである。而して路線式とは街路を以て町名とし街路に沿ふ建築敷地を以て町を構成するから從つて町界は街廓の背中割りとなるのである。又結合式とは街廓式と路線式を併用したるものであつて圖を參照すれば判明するであらう。例として各都市の狀況を述ぶれば帝都の整理方針は結合式を原則とし必要ある場合に街廓式を斟酌することになつてゐる。即ち結合式とは圖に見る如く街廓式に路線式の長所を加味したるものであつて主要街路を差挾んで兩側に並列する街廓の集團を以て町を構成するものである。横濱の整理方針は路線式及結合式を併用するものとしてある。元來町割の理想は路線式とされてゐるのであるが帝都に於ては今回の復興計畫に依る街路網及び區劃整理に依る宅地割は路線式を採用するには猶ほ未だ不充分の點が甚だ多きが故に今回は少しでも町割の理想に近き結合式を以て全整理區域を統一せんとしたのである。街廓式の町は町割を混亂せしむる基となるから止むを得ざる場合の外は成るべく之れを避くべきである。之れを我が國の都市に見るに帝都從來の町割は主として街廓式或は結合式であつて銀座一、二、三、四丁目は宛も結合式の適例であつて路線式は日本橋區の一部に稀に見るに過ぎない、又京都の街路系統は平安京時代に於ては凡て碁盤目式であるが現在に於ては大部分南北に長き格子型である。町割は所謂縱横路線式

即ち前記第二路線式である。神戸市は路線式を加味したる街廓式を以て統一せられ一部結合式と路線式がある。特に珍らしきは堺市であるが同市の舊市街は特異なる街廓式を採用してをる、堺市に於ては此後の區劃整理に伴ふ町界町名整理に當つて既に其の方針綱要が決定してあるやうである。飜つて之れを大阪の狀態に見るに大阪舊市從來の町割は所謂路線式でその配列方法は並列式即ち前揭第一路線式に當るのである前說に述べたる如く町割の理想は路線式を最良とするのであるから此點に於ては大阪市は他の東京横濱等と比較して大に誇り得るのであるが並列式は十字街に於て一方町名を有するも之れと交叉する方向の街路には獨自の街路名なく一方街路に依る町名を呼ぶに過ぎざると云ふ缺點を有してゐる。例せば大阪に於ける此並列式町割の部分の町名なき街路を何々筋と稱してをるが如きそれである、この點に於ては第二路線式即ち縱横式は其の缺點を除き得る。然れども大阪從來の整理の跡を見るに港區、此花區方面其他の町割は舊市の町割に則つて第一路線式(並列式)を採用してをる。然らば新市域及郡部に亘る區劃整理後の町割は如何なる方式に據るべきか、こは大に攻究を要する問題であらうと思ふ。之れは一に行政廳の既定方針に據ることであるが既に整理されたるものより考察すると當局に於ては大阪從來の町割に則つて第一路線式を以て理想とし之れを以て全市を統一せむとする方針の如く思意せられるので從つて區劃整理に於けるそれも同一方針の元に整理を見ることであらうが、前述の如く並列式の缺點に對しては大に研究すべきものありと思ふのである。故に舊市に對しては街路名を附するか或は將來の考慮に待つ事とし同整理に對しては方針を更めて第二路線式(縱横式)に依るを可とせざるやこの點愼重なる考慮を要するものと思ふ。

第二は町の境界線である。

町の境界線で道路、河川又は運河を町の境界とする場合には其の中心線を以てするのである。帝都、横濱其他の都市も同樣であるが帝都に於ける隅田川の如き大河川に於ては例外として河岸線を以て其の境界線とすべきものとされてある、横濱に於ける方針も土地の狀況に依つては適宜に定むることになつてゐる。大阪に於ても此後の整理に對して異論なきところであらう。

第三は町の形狀及大さであるが町の形狀は丘陵地を除きては事情の許す限り適當の長さを有する長方形とし徒らに細分し或は尨大に失することを避くべきものである、これは町割を系統立て地番の配列を單純化するに極めて重要な條件である、帝都、横濱は此の條件に基いて居る勿論工業地域に於ては其の用途の性質上中樞商業地域に比較しては多少大ならしめることは必要である。之れを都市の現狀に見るに東京に於ける銀座は町の形狀に於て又その大さに於て今回帝都整理の理想的標準と言はれてゐる、大阪に於ける一ケ町の大さは東西街路とも各街廓を背中割にしたる半街廓四個即ち約二街廓の面積を有してゐる。京都に於ては周圍部約三百十三萬坪を劃して土地區劃整理計劃をなし周圍發展の基礎を確立するに至つてゐる、その計畫に於ては町の面積は餘り大に過ぎず小に過ぎざる略一定にすると言ふ方針の元に一町の戸數を凡そ百戸前後となし一町面積は凡そ五千坪を要し同市の街廓三ブロックに相當する面積五千四百坪を一區所とすると云ふことである。(續く)



現代の住宅とは

會員　津田鑿

長足の進歩をした現時住宅は昔に比較して間取や姿に變化を來たし洋風赤瓦の文化住宅が流行して居るが果して之が理想否　現時に適する住宅として共鳴する事が出來やうか、或は屋根のない地震火事には確實に有効な鐵筋混凝土で造られた住宅の内にも床柱を建て襖を嵌込み日本天井を張り趣味の方からと或は經濟の點から使用する米松は遠慮なく脂を吹き出しても舊慣を取り去る事が出來ない人と反對に床の上に薄縁を敷いても椅子を用ひねば氣が濟まぬ人とある、洋館のストーブ前飾を邪魔にする人は理窟はなくてもよいものであるが丁度日本家で床棚の様な具合で一部の人には既に床の間不用を唱へられてもなか〳〵取去る事が出來ないと同じくストーブの前飾りも無暗に排斥は困難で其れ程に習慣を取り去る事が出來ないのは自然である。服裝としても勿論洋館に必ず洋服着用でなければならぬ理屈はないが主人は浴衣の着流しで來客は洋服の頑苦しい釦を几帳面に嵌込んで訪問し主客の禮儀も何もあつたものでなく鹿爪らしい洋館の持主が大抵之の有様では折角改善された住宅が過度期を口にしながら然も更に徹底して居らぬのは衣食と習慣の罪もある。尤も住宅は自己生活の場所であつて他人からは別に干渉を受ける必要がないと云へば夫れ迄であるが住宅としてある以上家らしい感じも必要であり、又多少風俗習慣を基礎とせねばならぬ點があるであろふ。

舊來の日本住宅の改むべき點は確かに多くを有つて居るが現時我國の様な復雜な生活をして居る處は甚だ不幸である勿論何處でも住宅改良は行なわれてをるが夫れは眞の改良であつて我國の様に改造ではない近來の住宅問題は餘りに改善の聲が大き過ぎ浮腰になつて多少血迷ふて居るからで眞に現時住宅を論ずるにはもう少し眞面目にならねばならぬ、歐風の住宅には細部は夫々變化があつても大凡一つの軌道を進み得らるのは都合がよい。

隨所に建てられて居る洋風にさへ見ゆる家なれば例令文化的の設備がなく屋根が赤瓦で下見がクレヲソート窓が白ペンキ塗りであれば人々に賞揚される垣根が低く縁先きの洗濯物が通行人に見へても之を新らしい家と云ふて滿足して居る裏長家ならばいざ知らず相當の住宅で通行人の鼻の先きに襤褸をぶら下げねばならぬのは餘り感心しない、之等に對しては

相當の設備が必要である、家丈假りに洋風になつても前に述べた和服が重な服裝であつてみれば一考を要する事である、無理に調度や設備に歐米の眞似をする爲め窮屈千萬にも箱の様な住家を無理算段して建てゝ合の子生活を得々とするにも及ぶまい、思い切つて衣食住とも洋風にするならば進んで歐米の長所を取り我が風土に應じて大に徹底した生活をする様に設計をする事が必要であろうが洋館で澤庵を噛ぢる風土病が拔けぬなれば寧ろ在來の日本家を改良したもので決して不足はない猫も杓子も洋館を口にするが住む事も知らず見榮に造る事は考へものではなかろうか、然らば現時の住宅は結極どうするか勿論其の人々の生活の程度に關係するが位置を中流とし住宅地域であると假定すれば二ッ位の異つた方法に分れる、此邊が先づ無理がなくてよかろふ。

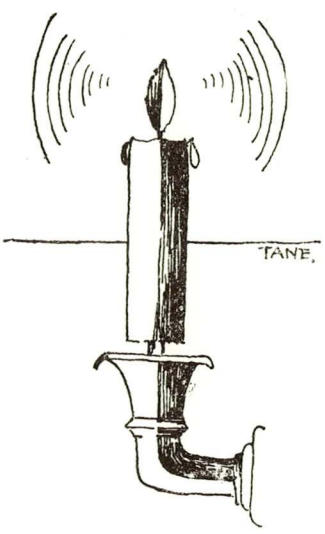
第一は日本家の通りにする但し電燈、瓦斯、給水設備の様なものは出來る丈け嶄新な方法を用いると同時に間取りを能く撰練する勿論居間本位で衞生的で內外とも普通の日本家でも現時は昔の様な床の低い陰氣な不衞生なのは好ましからぬ椽側も三尺の狹いのは成るべく廢して替りに短かくとも巾廣いベランダー即ち入側を必要とし部屋は疊又はコルクを敷いて座式にも立式にも用ひられ寢臺や椅子を使用しても不自由のない様に床板は厚いものを張り詰めて置き雨戸は手數の割合に不便であるとすれば外は硝子戶內紙張り障子にするそして書齋や納戶の様な處には書棚や簞笥の大さに應じた入り込みを造り八疊は全く其の大さに使用出様る様にし之と同じ方法で押入は必要に應じた大さに改め天井から塵埃の落ちぬ様に又室の換氣法の爲め上部に引違ひ小窓を造り若し椅子を用ひる部屋なれば天井を大和張り位に改めて調和を計り柱の間は漆喰壁でも壁紙張りでも差支ない玄關土間の應接、臺所、浴室等狹くとも氣の利いた事に改める。

第二折衷した例

純洋館は前に述べた様に現時としては多少の無理のある點から折衷された案である間取りは洋風に近い居間兼客間食堂兼仕事場と云ふ風に兼用出來るのが便利で其他は日本風に疊を用ひ外觀は洋風に近くとも日本室必要なれば調和上から建具を二重にして內外其の調子を合せたい即ち椽側あれば外は洋風の建具なれば出窓にするか又は一尺位の棚にして內側に其室に應じたものを嵌込むやうにする押入は相當に必要があることを忘れてはならぬ同時に玄關土間を少し廣くして手輕な應接にするそうして洋館にしたとしても內部造作も日本風で一向差支へない必ずしも洋風の腰羽目とか巾木とか窓額緣とか無暗にくど〳〵しい操形をしたものでなくとも普通の方法で之れをペンキを塗る必要もなく手輕くスティンをして却つて吾々の趣味に適する色合が出來る屋根の赤瓦はドク〳〵しく目立つて俗惡であるから普通の瓦でも決して差支へない或は天然スレート又は若し銅板葺にするなれば瓦捧を附けたものは調子がよい結極日本人が住む家は日本流になるのが自然で純洋館には不便があることは當然である

床のコルク敷、書棚、入り込み等は第一案と同樣尙ほ電力瓦斯、給水、臺所の設備等は夫々文化的に改造したものを應用することは躊躇すべきことでない勿論衞生的設備として費用の許す限り汚物處分は淨化裝置にしたい床棚の不用の聲はあつても祖先より讓られてある掛物を捨てることにも當るまい織部床は最も要領を得たものである棚は必ずしも六尺を必要とせず三尺にても事足る奥行を狹くしても他を利用する此等の設計は容易に隨時に實現され決して不調和の物でないと思はれる。

以上は先づ現時の住宅として適應する方法ではなかろうかと思はれる。



溝穴を有する塔の心柱礎に就て

理學博士　川村清一

古い時代の寺院の遺跡に殘つてゐる礎石の中で、塔の心柱の礎石に、往々穴や溝の穿たれてゐるものがあつて、從來之れに向つて種々の解釋が下されてゐる。

塔礎の中、他の者には穴がなくて、唯心柱礎だけに夫れがある場合を見て、『其の穴には佛舍利が納められてゐたもので、心柱が其上に樹つてゐた間は舍利は穴の內に密封されてゐたものであつたのが、廢寺となつた後、礎石だけが遺跡に殘り、穴が露出してゐるのであらう』と云ふ人もあつた。

此說に對し或人は、『總て塔の心柱は普通の柱の如くに礎石に樹つものではなくて、上から吊り下げられて振子の樣に動き得る構造のもので、礎石はあつても之に心柱は密着してゐないのだから、礎石の穴は心柱で塞がれてゐない筈だ。從つて佛舍利のやうな大切な物を藏する爲の穴であつたとは、受取れない』と述べた。

又或他の人は、『塔の心柱が吊り下げらるゝ樣に至つたのは德川時代の事に屬すると云ふから、遠い昔の建築に係る古塔の心柱は普通の柱の如く礎石の上に樹てられてゐたものと解すべきが至當であつて、問題の古寺の遺跡に殘つてゐる有穴塔礎を論ずるには、心柱の吊り下げ說を持ち出す譯には行かないから、矢張舍利穴說が支持される譯である』と主張した。

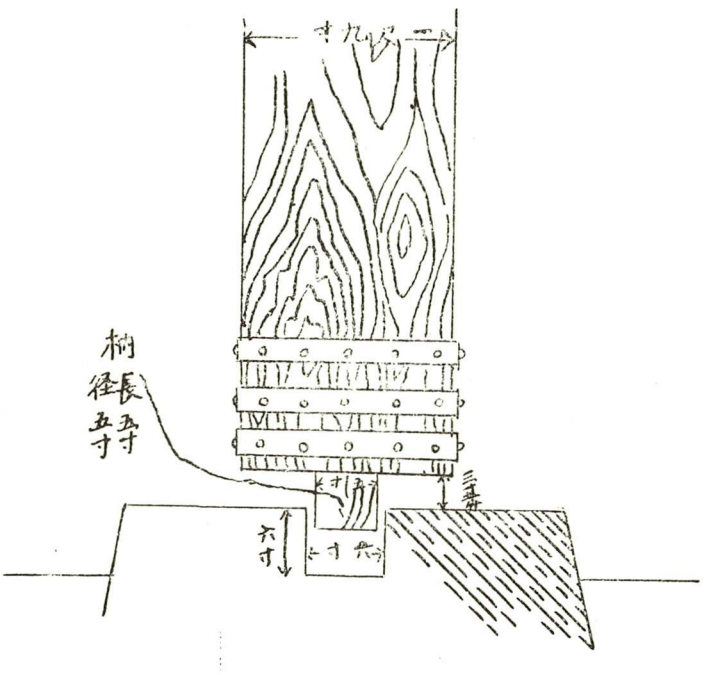
扨塔の心柱が上から吊り下げられてゐると云ふ說は一般に唱へられてゐるもので、私も曾て建築學者の一人から『五重塔の如き細くて高い建築物が地震の多い我邦に於て能く其安定を保つて倒壞しないのは重い心柱が吊り下げられてゐて、塔の重心が外れんとする場合に、之を牽制するからだ』と敎へられた。

然るに私が古建築物の柱の下端に存する通氣孔に就て研究してゐる中に、日光東照宮の五重塔の礎石を調査した時、心柱の礎石は四尺角で其中央に深さ六寸徑六寸の圓柱形の穴が穿たれ、心柱は徑一尺九寸の圓柱で、其下端には圓柱形に長さ五寸徑五寸の枘が造つてあつて柱の下端と礎石との間には三寸五分の隙があるから、外からちよつと見ると、心柱は礎石に達しないで、ぶら〳〵振子のやうに吊り下つて可動性の

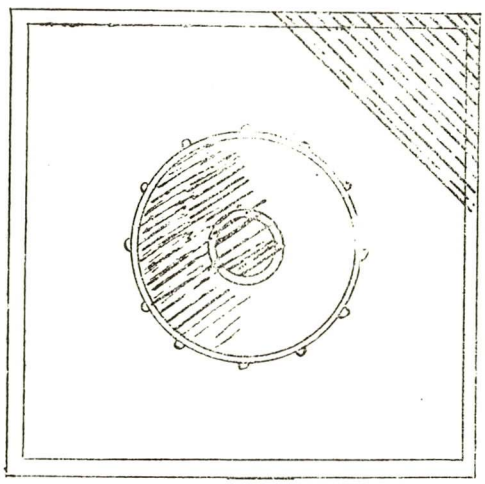
ものであると誤認せられるであらうが、前述の通枘があつて枘穴に入つてゐる爲、心柱は動くとしても、枘と枘穴との隙間、僅かに左右五分宛しか動き得ないものであることを調べ得たから、私は其時心柱が振子の如く懸垂可動性の構造のものと豫て聞いてゐたのに、此の日光の塔は何故に枘があるのであるか。元來枘なるものは柱が礎石上にあつて、變位しない樣に固定せしむる目的で造られてゐるものである。（第一圖參照）して見ると少くとも東照宮の塔は心柱に振子動を許さない構造であるが、然らば何故に上から吊り下げられて、礎石面と柱の下端との間に三寸五分の隙を保持する樣にしてあるのかと私には此構造に就て久しい間頗る疑問に思はれてゐた。

日光東照宮五重塔心柱ノ構造

第一圖



然る處一昨年の十月、東京に開かれた日本學術協會第一回大會に於て、伊東博士が「五重塔の心柱」と題して講演せられた中に東寺五重塔再建の記錄を得て心柱の吊り下げの目的は、塔の四圍の構架が建築後沈下するのを見越して心柱を礎石から離して、或高さに吊り上げて、最初は柱礎間に木を挾んで置くが、瓦を葺いた後には之を取除いて、瓦の重みで四圍の構造が幾らか沈下するが儘に心柱が下がり、尙若干の隙間の殘る分は其後久しい期間に下がるのに備へるのであることが判明したといふ事を發表されたので豫ての私の日光五重塔心柱の構造に對する疑問は一時に氷解したのである。



今其東寺五重塔再建の記錄なるもの丶一節を爰に再錄して

見るならば

『土居三丈一尺二寸八分。總高十八丈一尺の内九輪の間一尺有。寛永乙亥十二月七日の夜炎上す。再興は寛永十八年事始。同廿年癸未造畢也。右者繪圖に詳に有之故不記之。此塔立時心柱の根本に六寸の木を敷。瓦葺き立て塔下る故に其木を取り、程無く又塔の心柱を四寸切る。凡一尺也。根を切る時心柱を揚ること、佛檀の壁板を取り、心柱に角木を入、以三間木四方より人夫三四十にて心易く刎揚る也。偖十ケ年程有て見るに、露盤と覆鉢の相ひ四寸許りも明きて見ゆ。今猶多し。昔炎上は永祿癸亥雷火也。卅一年絶て、文祿三甲午七月二十二日に東寺塔落慶す。此塔の心柱も後に二尺爲切云傳ふ。故に此度の塔は和泉丹誠を抽て木重正しく升形の中にも鉋を宛、以來の下りを考へしかども如斯也。可得意。亦云。古の塔者度々に心柱の根を切らす故、佛檀より上の心柱を板にて包み如箱、夫れに佛像を畫と云ふ。此度は爲念入故、下ること不可有不及筥事無念也。然とも未來を考へ、福鉢の呑込深き故今以て雨入らず。』

此記錄は塔の構造と心柱の關係を明瞭に說明するものである。心柱は長い木を縱に使ふ爲年を經ても短縮することが殆んどないと云つてもよい位であるのに、塔の四圍の構架は細かな多數の横材を積み重ねるから、年と共に縮む上に荷重の爲に壓縮せられて五層全體では下ること數寸或は尺以上に及んで心柱と四圍の構架の接續點なる露盤と覆鉢の間に隙を生じ、こゝから雨水が浸入することになる。そこでこの憂なからしめんが爲、豫め心柱の下礎石との間を若干あけて置くのであるといふ意味が、前揭の記錄に依つて明らかになつた。

是れに由つて日光東照宮の五重塔の心柱の構造を考へると建造の時に、後に至つて四圍の構架が沈下するのを見越して四重目の桁から四本の鐵鎖で心柱を吊つてあるのが、沈下が少しで濟んで。心柱は礎石に達するに至らず、今日尙三寸五分の隙が明いてゐるが枘の先は礎石の枘穴中に入つてゐるものと分かつた。

然らば心柱の吊り下げ構造と地震との關係に關する說はといふと、これは昔から可なり廣くに傳はつてゐる說で、前にも述べた通り『塔の心柱が礎石に固定せずして、上から吊り下げられてゐるが故に、ペンヂユラムの如く動き塔の傾倒を牽制する爲に塔は安定を保つてゐるので、結局心柱の吊り下げは耐震の爲に考案されてゐるものである』と一般に解せられてゐたので新たに發見された東寺五重塔再建の記錄に由つて心柱の吊り下げの意義は耐震に無關係であることが知れる迄は、恐らく大概の人は心柱の特殊なる耐震構造說を信んじてゐたものと想はれる。偖實際に心柱が吊り下げてある實例はと糺して見ると、其の明らかなのは驚く勿れ僅かに東京淺草觀音の五重塔と日光東照宮の五重塔との二例に過ぎないので、淺草寺のは五重目の小屋組から帶鐵で吊り更に直角に交る二本の水平の鐵棒を心柱に貫通せしめて之を支へてある。日本各地にある五重塔の數は少くないのに心柱が吊り下げられて、ぶら下がつてゐるのは、唯此二例が知られてゐるのみで、他のものに於ては、大概心柱が礎石に固着してゐるとのことであるから、心柱の構造が耐震に關係ありとする說は、之等僅少の例から他の總てを推して想像せられたるものであらうと思ふのであるが、是等二つの塔に於ても、前に述べた

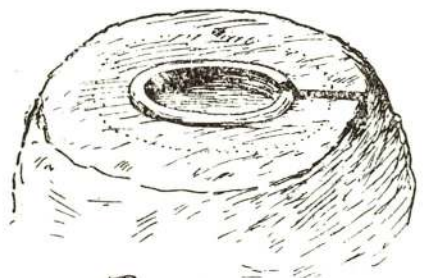
通り心柱は吊り下げられてゐても、共に心柱の底に作り出しの枘があつて夫れが礎石にある枘穴に約半分は入つてゐるのだから、心柱が振子動をするとしても、枘穴と枘との間の隙間だけしか動かない譯で、動きの範圍は極めて少いのである。斯様な次第でこれ迄誰れ云ふとなしに一般に傳へられて居た心柱の吊り下げ構造が耐震の爲であるとする說は今は根據の無いものとなり、從來單に想像に止つてゐた說であることが明白になつた次第である。

然らば古の廢寺遺跡に見る塔心礎の穴も亦皆枘穴と解すべきか何うかといふに古い昔の礎石には枘穴がなくて却つて往々枘穴のあるべき位置には礎石面に上に向つて乳狀に突起が造られ柱の下端の中央が抉ぐられて穴となり、礎石面の乳狀突起にはまる樣になつてゐるものが多くある。左うでない迄が礎石面は平であつて特に枘穴として穿つてあるものは古い建築物には餘り見受けないから柱の枘と礎石の枘穴とは後世に造らるゝ樣になつたのではないかと思はれる。併し此點に就ては私は特に調べたことがないから建築年代と枘との關係に就ては茲に論じないで唯問題となつた古き寺院の遺跡に見る塔礎の穴に就て考察するのに、其穴は枘穴としては餘り大き過ぎる樣に思はれるものが多い。若しも古い建物には多く枘穴がないとすれば、尙更之れを枘穴と見ることが出來ない譯になる。

然すれば其穴は矢張舍利を藏めた穴であるか否やと云ふ事になる。舍利は曾て塔の相輪の先の寶珠及龍車にあつた例（興福寺）もあるが、多くは心柱の下に納められたものとなつてゐるから心柱礎にある穴は總て舍利室と認めてよいかどうかと云ふに其孔から外に向つて溝が穿たれてゐて穴を舍利室と認めるには都合の惡い構造のものが少くない。今次に其例を擧げると、

（第一例）河內國道明寺塔心柱礎（第一圖參照）

礎石の長徑七尺三寸、短徑六尺八寸、其中央に深さ四寸五分、經三尺の圓い穴があり、更に其穴から穴と同じ深さの溝が、礎石の一端に向つて直線に造られてゐる。尙此穴の周圍は一寸の幅に高さ約五分の環狀突起を有つてゐる。此環狀突起は、前にも述べた如く極めて古い寺院の礎石に往々見受ける所の中央突起があるべきを其部位の大部分は穿たれて穴となり唯周圍に一寸幅の環狀突起を殘したもので恐らく柱の下端の中央は經四尺餘に抉ぐられて、此隆起に被ぶさつてゐて、第七圖のやうな外觀のものであつたものと想像することが出來るが、夫れにしても穴や溝は何の爲に造られたものであるか。



第二圖

（第二例）播磨國加古郡神野村下西條廢寺塔心柱礎（第二圖參照）

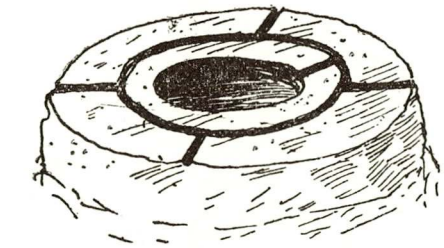
礎石の中央に經一尺五寸の深い圓穴があつて、夫れから一個の幅約一寸長さ六寸の直線溝が造られ穴より六寸の距離にある幅一寸の環狀溝に聯絡してゐる。更に環狀溝からは四方に約八寸の長さの直線溝が造られて、礎石の周邊に達してゐるといふ溝、穴の構造の實

に複雑なるものである。穴は深く穿たれてゐるのに溝は何れも淺く造られてゐる。斯の如き穴と環狀や直線の溝等は何の目的で造られたものであるか。柱があつた時の外觀は第八圖のやうなものであつたと想像される。

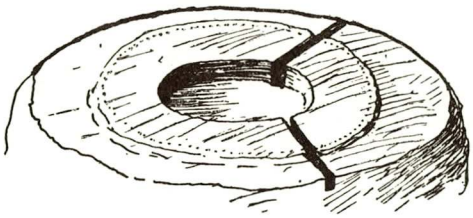
（第三例）筑前國嘉穗郡大分村癈寺塔心柱礎（第三圖第四圖第五圖）參照

礎石は略楕圓形をなし、長經七尺四寸で、中央經約五尺の圓形の部分は、約二寸の高まりを有し、更に其中央部には經二尺七寸、深さ三寸の圓穴が穿たれ、穴から礎石の周邊に達する二つの直線溝がある。溝の深さ一つは三寸で、穴の深さと同じであるが、他の一つの溝は淺くて溝の底面は穴の底面に比し一寸乃至二寸高い。斯樣に穴の深さに比し淺い溝が穿たれてゐるから見ても、塔の癈滅した後に穴の中に溜る雨水を外に排除する目的で溝を穿つたものと見做すことは出來ないものである。柱のあつた時の外觀を想像して見れば第九圖の如きものとなる。

第三圖



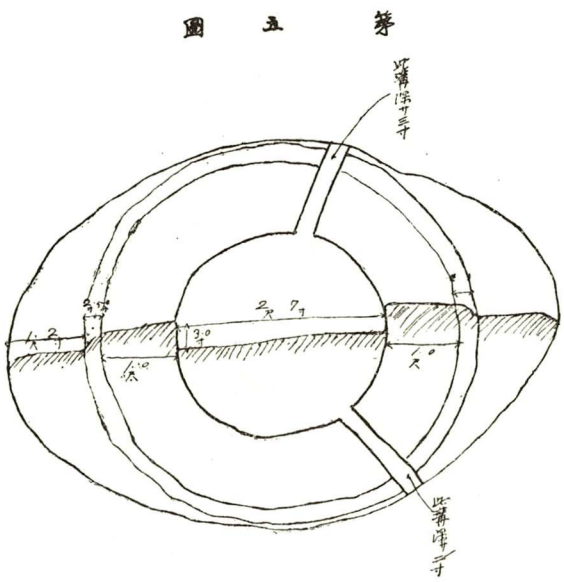
第四圖



（第四例）和泉國泉北郡鄕莊村、禪寂寺塔心柱礎（第六圖參照）

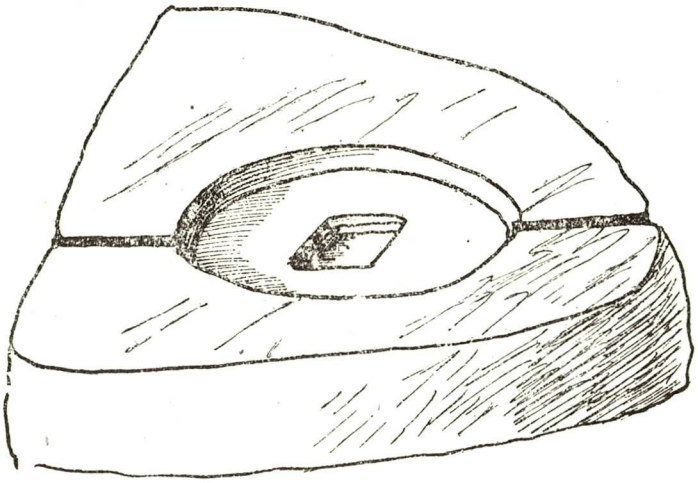
禪寂寺の塔址の礎石に穴、溝のあることを豫て聞いてゐたから、昨年の夏、其實地踏査を大阪府建築技師の池田谷久吉氏に依頼した處、氏は當時博覽會の用務で多忙であられたにも拘らず、私の請を快諾せられて、七月十一日前記鄕莊村の禪寂寺に行つて、茲に圖示する所の實測圖を製して詳報して呉れられたのである。

第五圖

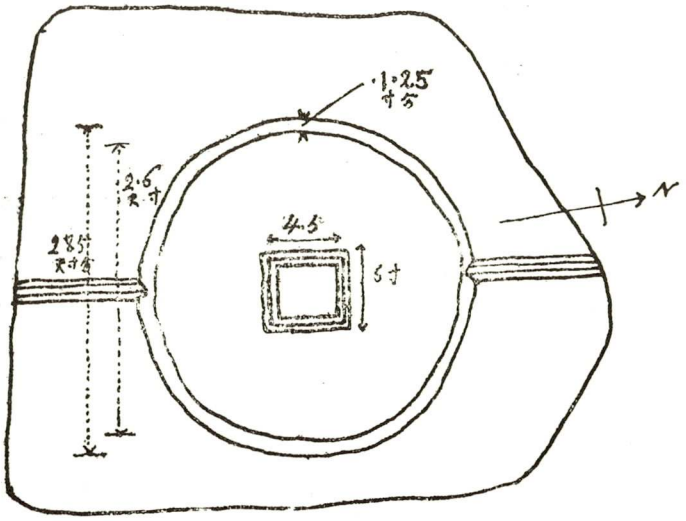


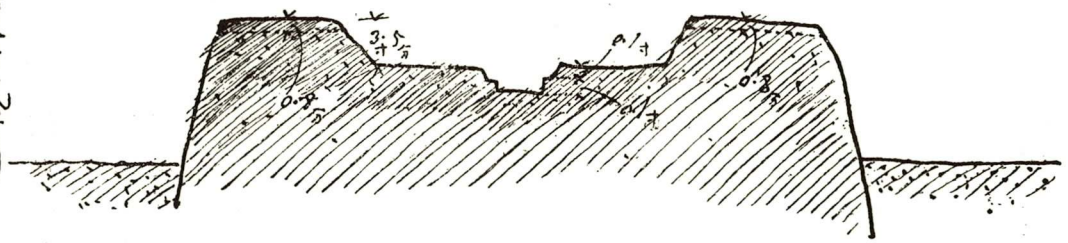
寺は南海鐵道大津驛から東方約四十町の所、小高い丘の上

第六圖



禪寂寺 塔心柱礎





大正一五年七月一一日 池田谷久吉氏實測

に在つて現存せる建物は、何れも德川時代初期のものであるが今は癈滅してゐる、金堂、塔等の在つたのは遠い古のことで、是等の遺趾として殘つてゐる礎石は花崗石で、現場は小松と小笹が繁茂して調査は頗る困難な所であるが、池田谷氏は三個の塔礎が十一尺五寸及七尺五寸の距離を隔てゝ一直線狀に列び、夫れと直角の方向に右の三個の礎石の內中央のものから十一尺五寸を隔てゝ心柱の礎石があるのを發見し、夫れに存する穴、溝を實測せられたのであつた。

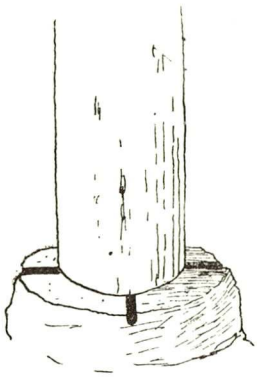
穴は圓くて上部の直經二尺八寸、下部の直經二尺六寸、深さ三寸五分の大さであるが、更に圓穴の底面に方形の穴（上緣六寸角、中段四寸五分角底面三寸五分角、深さ二寸）がある。

又圓穴の上緣から左右に、互に一直線をなせる溝（上部幅一寸「下方に向つて細まれり」深さ八分）が穿つてある。

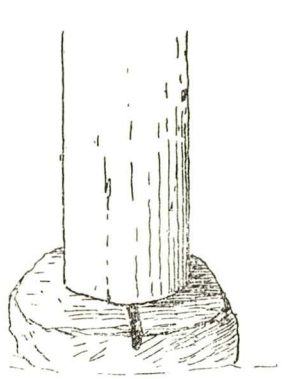
右の禪寂寺の塔心礎の穴、溝等の構造を第三例の筑前國大分癈寺の塔心礎のものに比べると、前者に於ては二個の溝が互に一直線の方向に在るのと、圓穴の中に更に深く小さな方穴が穿たれてあるのとが後者と違つてゐる。禪寂寺塔心礎に於ける溝の深さが二つ共僅かに八分しかなくて、穴の深さの三寸五分に比して甚だしく淺いものであるから、穴中に溜る雨水排除の目的を以て後世穿つたものと見ることが出來ないのは第二例、第三例等と同じである。然らば此穴と溝とは何の爲に設けられたのであるか。圓穴の底に存する小さな方形の穴は、之れこそ恐らく舍利を藏した所であつて其の中間の深さの所に段があるのは、想ふに方形の銅板を以て舍利を覆ふ爲に特に設けたものと認められる。此の礎石上に柱のあつた時を想像するならば第十圖の如きものであらう。

以上の諸例に就て考へるのに斯樣に心柱礎に大きな穴のあるのは、納穴であつたとは直に受取れないし、又舍利室としては外へ通づる溝のあるが爲め、然うとも考へられない。實際舍利室は一段と深い場所に造るべきは禪寂寺の例や近く發見せられた法隆寺の五重塔心柱礎に於ける實際の例から考へられる。

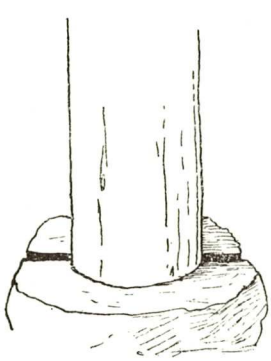
是に於て私は右に列擧した樣な心柱の礎石の穴と溝とは柱



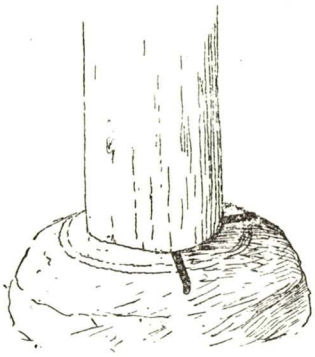
第八圖



第七圖

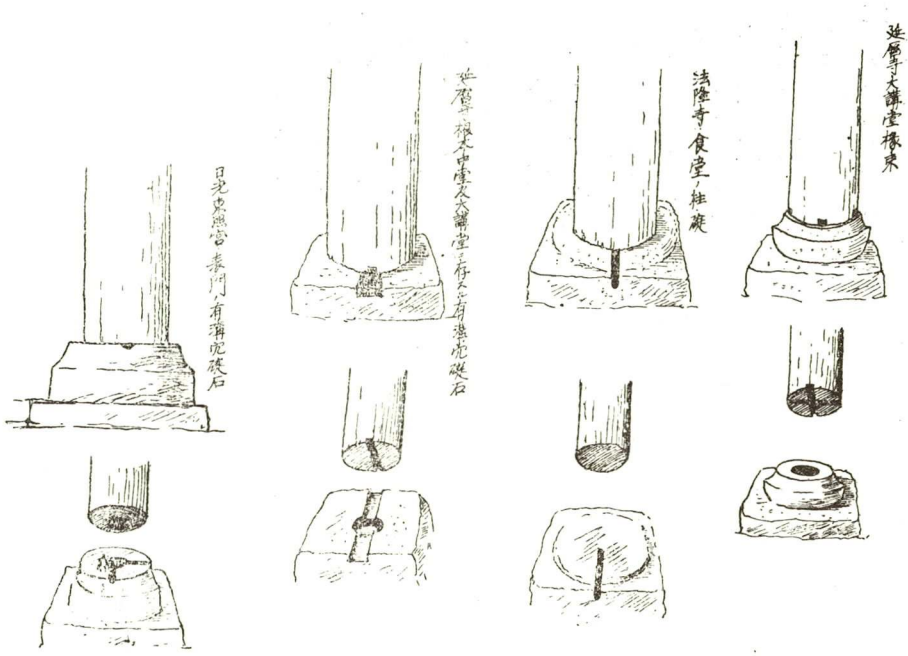


第十圖



第九圖

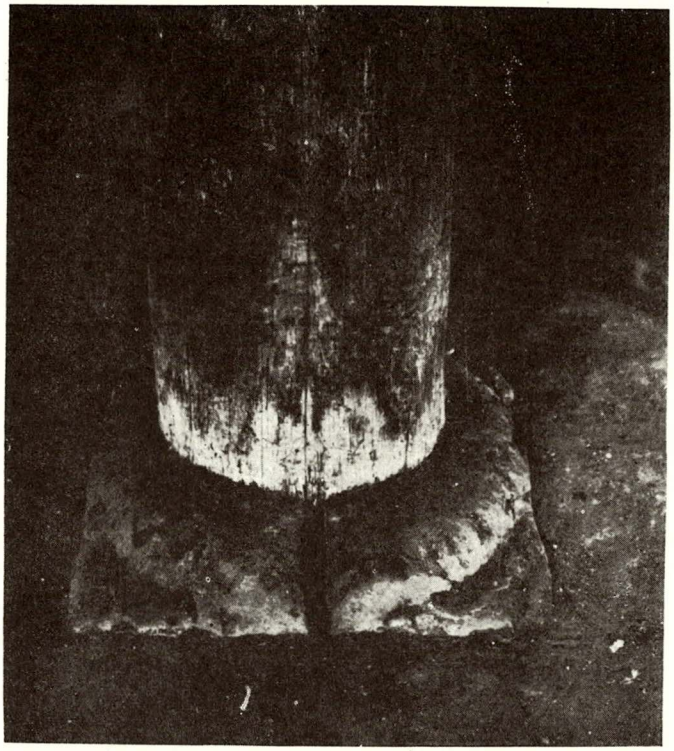
第十二圖



の下端に外部からの通氣を計つて木柱の下端部の腐朽を防止せんが爲に特に設けられた構造のものではあるまいかと考へる、假りに穴には枘が入つてゐたものとしても、枘と枘穴との間には隙間があるものであるし、枘に向つて外部からの通氣を計ることは、即ち柱の下端の中央部の材質をして菌害より免れしむる良法であつて、現に日光東照宮表門の柱の構造（第十二圖參照）の如きは全く其通になつてゐる一例である。又柱に枘がなかつたものとせば礎石の穴には溝を通じて外氣が常に交通し柱の下端の中央をして廣い面積に於て空氣に接せしめてゐるから此穴や溝は柱に枘の有無に拘らず永い年月の間徐々に進行する所の木材腐朽菌の害を換氣法を以て免れしめんとする古へ建築者の周到なる注意に出でたる構造でなければならないと私は愚考するのである。前記第二例の礎石の如きは、若し木柱が之れに樹つてゐたとするならば、外氣は柱礎間に開孔してゐる四方の孔から四條の直線溝に入つて環狀孔を傳ひ、更に直線孔を通じて中央の圓穴に入るものと想像し得べきものであるから、木柱の下端の通氣を計る構造としては、最も精巧なものと謂ふべきものである。

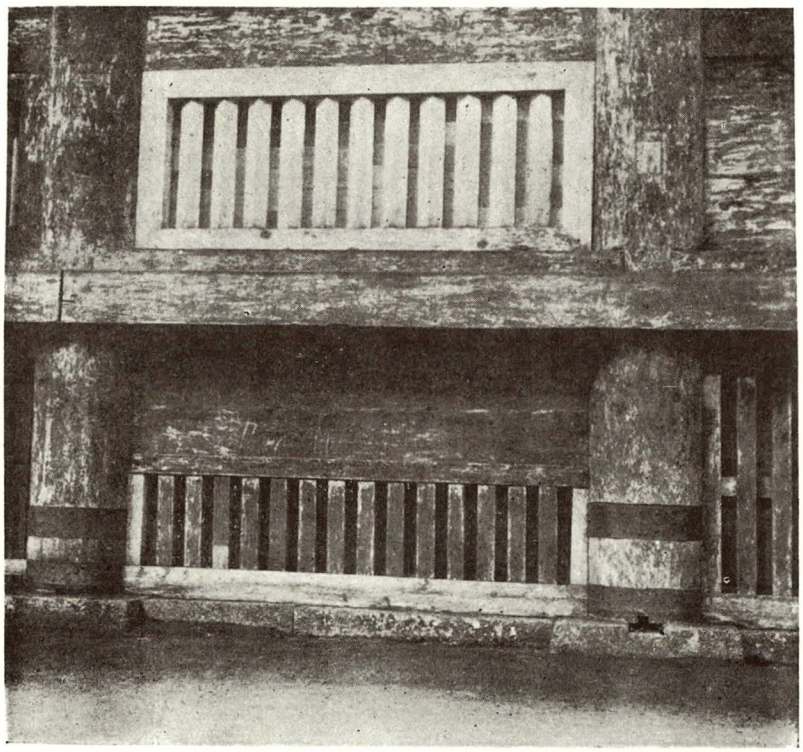
以上擧げた四個の例證は何れも建物の廢滅してゐる塔心礎であるから、其上に樹つてゐた心柱との關係は、之を實際に檢することが出來なくて、單に想像に止るものとは云ふものゝ、之を私が大正二年以來調査した古建築物の木柱下端に存する孔の研究の結果から知り得たる現存する建物で斯かゝ構造のものを求めると、其實例は甚だ多いのである。塔の心柱礎ではないが、礎石に穴又は溝を穿ち、或は又穴と溝の兩者を造つて孰れも木柱と礎石との間に通氣を許して、古建築物

第十三圖



法隆寺・食堂ノ有溝礎石

第十四圖

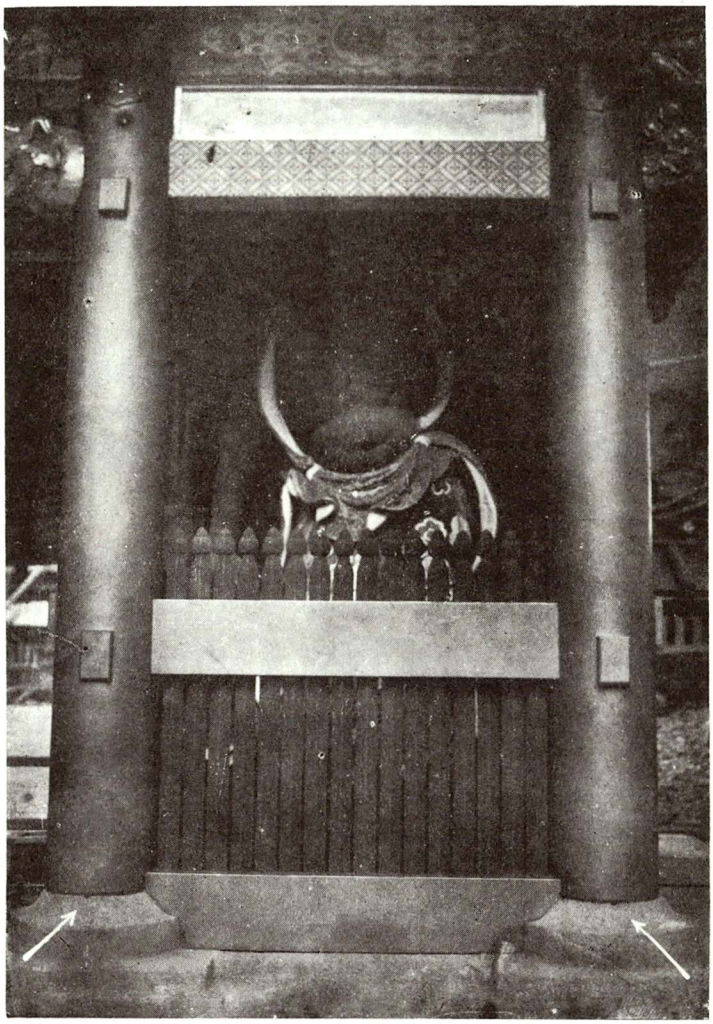


延歷寺・根本中堂ノ有溝穴礎石

に通有なる柱の下部が腐朽して根繼等をすることのない樣木材腐朽菌の性質が通氣を嫌ふのを知つて構造上から腐朽を防止せんとしてゐる實例は、延曆寺の根本中堂、講堂、法隆寺の食堂、談山神社の東門、總社拜殿、神廟所拜所、日光、東照宮の表門、五重塔（心柱礎には枘穴のみあり、他の十六個の柱礎には枘穴の他に枘穴に通ずる溝がある）同大猷院殿、仁王門等の諸建物に於て溝や穴のある礎石を見るのである（第十二圖乃至第十五圖參照）

是等が皆古の建築者が柱礎間に通氣を計つて木柱下端部の腐朽を防止せんが爲特に設けたものであることは既に私が立證し得て發表してゐるのであるが、夫れと同樣に建物が現存しない古寺の遺跡に見る塔心礎にある穴、溝に向つても、木柱保全の爲に設けられたるものと觀ることが出來やうと思ふのである。

第十五圖



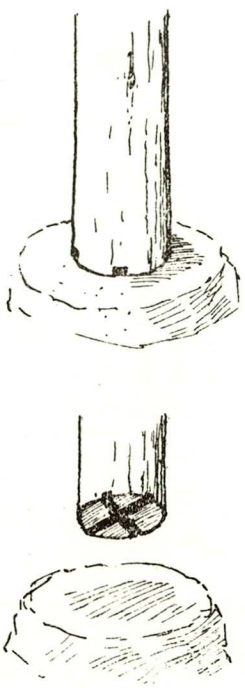
日光・東照宮・表門ノ有溝穴礎石

現存してゐる建築物中、礎石には穴だけあつて柱の下端面に溝を穿つてあるが爲、柱と礎石との間に直線狀の孔があつて、礎石の穴に外氣が通つてゐる構造のものがあることから考へると、古の塔心礎に穴だけあつて溝を缺いでゐるものに向つても、右の通外から通氣を可能ならしめてゐたものもあつたと觀ることが出來る。故に心柱礎に穴のあるものは、夫れを直に枘穴や舍利室だけの目的で造られたものと解するは不可であつて、一般は柱礎間の孔を通じて交通する外氣の溜室と觀るべきものであらう故に穴は純氣室たるか或は柱の枘のあつたものでは、枘穴兼氣室として役立つてゐたものと思はれる。唯特に小さく深く造られゐる禪寂寺に於ける四角な穴の如きに向つて、之を佛舍利室と觀るを至當と思ふのである。

私が古建築物の柱の下端に存する孔に就て研究して、塔以外の建物に向つては、早くに之を目して通氣孔であるとの解釋を下し得たにも拘らず、獨り塔の心柱礎に向つては、其の穴、溝の存する意義を解し得なかつたのは、心柱と礎石との構造上の關係が不明であつて、若し從來一般に傳へられてゐる說の通、心柱に振子動を許す爲に上から吊り下げて永久に礎石と離してあるものとするならば、穴は枘穴でも舍利室でもなく、又防腐の爲の通氣孔たるものでもないと見なければならなかつたからである。

然るに今之をも通氣構造として解釋するの決定を見るに至つたのは、伊東忠太博士が塔の心柱に關し發表せられたるものに負ふ所多いので、茲に私は同博士に深甚なる謝意を表し、又池田谷久吉氏が禪寂寺に出張して塔礎の實地踏査をし實測して詳報し呉れられたることに向つて衷心感謝する所で、是れ等の御援助に由つて大正二年以來十五ケ年の久しきに亘る私の有孔柱礎の研究をして、此の塔心柱礎に關する考察を最後の一章として全編を完成するに至つたのは私の欣ぶ所である。

（本年八月仙臺に開かれたる日本學術協會第三回大會講演要旨）



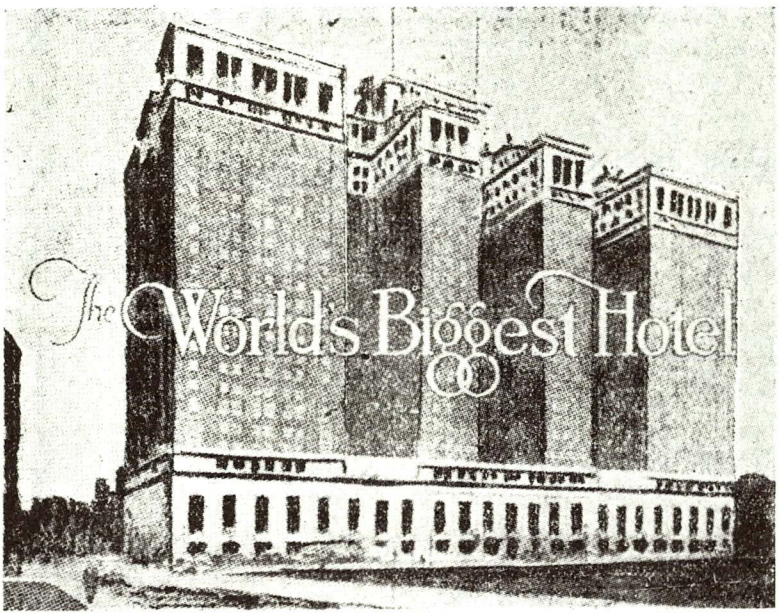
十六圖

一小都市に匹敵する驚異の大ホテル

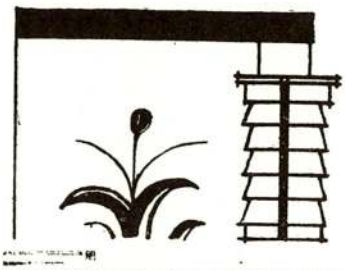
室が三千、病院が二つ

皿が十三萬枚、モーセンは六十マイル、動物園も圖書舘もある設備

世界最大のホテルが最近シカゴ市に出來た、それはスチエブンス・ホテルといふのでその飛離れた設備や、大きさ加減を聞いてはアメリカ人の突飛なのに驚かざるを得ない、まづ第一に度膽を抜かれるのはその建築費である、地上二十五層地下四層の建築費が地代をくるめて驚くなかれ、二千七百萬ドルといふ巨額である、次に驚かされるのはその室の數である、今試みに一人の旅客がこのホテルにとまつて一夜毎にその部屋をかへる事とする、すると彼はホテル全部の部屋に寢る爲めには、八ケ年余り滯在しなければならない、即ちいひかへればこのホテルには、廣い旅客用の部屋が三千ある譯である、また一つの部屋に五人の家族が世帶を持つとすると、全部で三千家族、即ち一萬五千人の人が住まれる譯である、一萬五千の人口といふと、日本では一縣下に幾つもないからちよつとした都會はその全人口をあげてこのホテルに住める譯である、東京、大阪等の大都會にこんなホテルを三つ四つ建たら住宅難も立ち所にして消えうせるだらう、これだけの室數では窓をふくのが大變で、今一人の窓ふきが一日八時間働くとして、一通りふき終るには約五ケ月かゝる、ホテルの一番下層には素晴らしく大きな夜會場がある、そこでは三千人の人が一時にダンスが出來るのである



これ以外に六つの宴會場と、大食堂があるが、食堂では五千百八十四人の人が一時に食ふ事が出來る、これだけでもこのスチエブンス・ホテルの巨大さに驚かされるが、更にその家具や食器の數に至つては驚くといふよりはむしろあきれざるを得ない、即ちイスが七千脚、皿が十三萬四千枚、その他の食器類は五十貨車に滿載する程あり、夜具類は三列車でも運ばんし切れぬ、その外テーブルかけが十三萬八千枚、ナフキンが三十萬枚、コツプは四萬八千個、タオルが五千ダース、ホテル内にしきまはされたモウセンを縦列にならべると、六十マイルの長さになる、なんとあきれざるを得ないではないか、ホテルの經營者は宿泊者の爲めにあらゆる設備をしてゐる、即ち二棟の病院、一萬冊の書物を用意した圖書舘、子供の爲めの休養室、カナリヤ、インコといつた小鳥から熊やカンガルー、ライオンといふ風に數多の動物を飼育する動物園もあつて子供さん達を喜ばせてゐる、この大ホテルに働く人の數は二千五百人から三千人の間を往來してゐる、これがスチエブンス・ホテルの概略である、まさに名實ともにそなはる世界最大のホテルといへやう。



ハウスマン

═都市計畫家銘々傳(二)═

藤田進一郎譯

四

ハウスマン自らは、普通世間で、專ら、かれ一人の努力で出來上つたやうにいひふらされてゐる事業も、あへて、かれ單獨の功績によるではないことを、かなり露骨に言明してゐる。無論、ある細目の點に至つては、その創作者であることを誇りとしてゐる。エトアールの外邊にある街路全部の一般的計畫は、自分免許の天才的作戰家ナポレオンによつて考案されたことは、ある程度までは事實らしい。そこで、ハウスマンの重なる仕事は、精密な測量調査を遂げた上、極めて大ざツぱなナポレオンの原案に對して、必要の修正を加へたり重なる缺陷を指摘したり、新街路をいかにして舊街路に調和せしむべきかといふやうな複雜な面倒くさい問題を決定したりことにあつたらしい。サン・ゼルマンの廣路のごときは、ナポレオンの計畫に對して、ハウスマンの加へた重要なる修正の一つであつた。最初ナポレオンの考へでは、少しく北方に片より、エコール街を利用して、一つの循環道路を開築するつもりであつたらしいが、ハウスマンの監督のもとに、實際の事情をよく研究してみると、ジュネヴイエールの傾斜をよぎるエコール街は、あまりに高すぎたので、それよりも低い、短い、しかも幅の廣い街路を設けることを得策と考へたのである。

ナポレオンの計畫を實行するために組織された大規模の委員會の會長をつとめてゐたのは、古くからのお備ひ人である建築技師デシャンであつた。かれは街路の橫斷面や側面や、多くの交通廣場の設計に關する細目の點を仕上げた。ハウスマンもデシャンの功績をもちあげて、『パリの計畫は、デシャンのものである』といひ、かつ、『今日において、その廣々としたのと、整頓の美しいのとで、世人の賞讃を博しつゝある威風堂々たる大路は、ことごとくデシャンの設計したものであることが、もし世人一般に知れ渡つてゐないならば、その程度のすぎた不當の謙遜は、むしろ非難すべきである』とつけ加へてゐる。しかし、ハウスマンがかういつてゐるのは一般的計畫の工夫よりも、細目の點の考案を意味してゐるや

うに思はれる。もつともデシャンとても、パリ改造の大事業も終りに近く、切迫づまつた軍事的必要がなくなつた後においては、街路の位置などを決定するに與つて力あつたことはいふまでもない。エトアールの構築については、ハウスマンは、かれ自身とデシャンとの功績に歸し、ナポレオンはたゞ十二の放射道路の交叉點を發案したゞけだといつてゐる。しかし、オペラの周圍にある十字街の不出來については、ナポレオンばかりを責めるのは酷らしい。オペラの建築家ジャルニエは、この組立は、古代から近代にかけての建築界中、最も不體裁なものだと罵倒してゐる。ジャルニエは、この計畫の發表されたときに、ハウスマンの面前で、ナポレオン皇帝に、その不可なるゆゑんを力說したところ、皇帝もかれに同意し、直角の廣場を組合はせることを、新たに計畫し、それを略圖に描いたりしたさうである。ところがジャルニエは非常に多忙のからだであつたので、ハウスマンはやはり單獨で實際にその計畫をすゝめ、ナポレオンも呼んでゐた通り我流の『三角の肩掛』(Fichus.)と、ちやうどおなじやうなものを建築したのである。ハウスマンの崇拜者は、このオペラの附近の組立を、その傑作の一つとして數へあげてゐるが、ハウスマン自らは、その備忘錄中に一語もこれに言及してゐないこの備忘錄はジャルニエが猛烈にこれを罵倒した書物の出版された後に書かれたものであるから、あるひは、その攻撃の鋒鋩に辟易して、自讃を思ひとゞまつたのかも知れない。

ブーロニュ、ヴアンサンス、モンソー、バツツ・シヨーモン、シヤンゼリゼー等の公園を、ハウスマン自らは、自分の主宰する土木係りの名譽を表彰する王冠であるとでも考へたらしいが、普通アルファンの功績に歸せられてゐる。ハウスマンがパリへ初めて着いたときに、ナポレオンは、彼れをつれて、ボア・ド・ブーロニュの、初まつたばかりの工事を視察したが、その際ちやうど、そこで工事監督の任に當つてゐた老人の植木屋が、一筋の河を掘開しようとしてゐた。ところが、それはいかにも難工事らしかつたので ハウスマンは、河の代りに、湖水を二つばかり掘つたらよからうと提言したナポレオンは、早速これに贊成し、ハウスマンをして、ボルドーにある彼れの幕下の技師の一人アルファンを呼びよせてそれをやらせることにしたのである。かうして自己の腕だめしに、絶好の機會を與へられたアルファンは、早速パリに來たが、庭園技師として共和國のために盡し、その功勞著しといふ廉で、一八八九年のパリ博覽會の後には、レジョン・ドノールの勳章を授けられたのである。地位も低く無名のうちに早く死去したデシャンに比べると、非常な相違であつた。ハウスマンはアルファンについて、公園のうちに、おほくの道路を開築しなければならなかつたので、彼れを選任したのだとか、彼れは自分の考へとはどんなに違つてゐても、政府の意見を採用するのに、不思議なほど吝かでなかつたとか、彼れはまたその計畫の實行に、良心から忠實であり、一點非のうちどころもないほどに熱誠であつたとかいつて、口を極めて賞讃してゐるのをみても、いかに彼れを信用し、重用してゐたかゞわかる。

アルファンはその後、ハウスマンに代つて、美術學校の椅子を占めたが、ハウスマンに對し、月並の讃辭を呈して、『彼れが驚くべき同化の能力は、何事も理解し保持せざるもの

なく、他人の意見さへも、一旦これを採用するにおいては、自己の意見のごとく確信して、その實施に努めた』と述べた。

公園の庭造りは、園藝家のバリレー・デシャンが主として擔任した。一八七三年ハウスマンがコンスタンチノープルに旅行したとき、太守の公園を參觀して、『住みなれた田舍へきたやうだ』といつたさうだが、そこには見なれた凸面の芝生や、曲折した小徑が、美しくあしらはれてゐた。同行のバリレーも、その時一緒にそこにゐたのである。

五

パリは何故に、また何人によつて、改造されたかを說くのは簡單であるが、それよりも重要な、改造の審美的性質を決定するのはなか〳〵容易なことではない。由來この審美的性質なるものは、フランスにおいても、公の問題とならず、外國の建築家にしても、たゞ、愛と嫉妬とのこんがらがつた妙な心理狀態をもつて、パリの市街を見てあるくだけである。しかし、ハウスマンの改造事業がまだ終らないうちから、いろ〳〵の非難が、すでに、もちあがつてゐた。ことに雅致な古建築物を、惜しげもなく破壞したことについては、猛烈な攻擊がおこり、(かれの生れた家のごときもそのうちの一つである)また新たに改築した街路は、みな、餘りに長すぎる上に、あまりに單調であるとの非難もやかましかつた。

前にも一寸述べておいたジャルニエこそはなか〳〵の强敵で、その批評は實に辛辣を極め、須らく『法律をもつて、二つの家屋を一線に並べることを禁止すべし』とまでいきまいてゐたのである。新聞に投書をするものもあり、政治家たちはこゝを先途と喰つてかゝり、大臣がそれに一々答辯をしたり、一時は大した騷ぎであつたのである。

これらの批評は、みなハウスマンの關心するところであつた。その備忘錄をみると、パリ改造事業の完成において、美觀的方面に、特に重きをおいてゐる。廣路サン・ミケールはサント・チャペルの軸をなし、廣路アンリー四世は、『七月の圓柱』の通景と、パンテオンの圓屋根とを見下し、商業裁判所の圓屋根は、セバストポール廣場と、特にエトアールと一線上に並置されてある。かれはまた圖書館を取り毀ちて、パリの一美觀を臺なしにしたといふ非難に對して、その代りに、カルナヴアレ美術館が立派にできてゐるではないかといふ。

最近二三十年間に、『開通(ペルスマン)』の交通上の便宜は年々に著しくなつたけれども、それと同時にその審美的價値はあまり高まつてこない。結局、一直線でたゞッ廣い街路が、美觀であるのかどうかといふことになるのであるが、一直線でたゞッ廣いことを好きなルネッサンス派の人々は、それが美觀である證據として、カルルスルーエの軸街、古い下りゼント・ストリート及びアヴエニュー・ド・オブセル、ヴアトアール等をあげてゐる。なるほどこれらは、單に一直線にして便利な通路であるのみならず、決定的に統制され、旋律的に、審美的構成を明瞭にいひ表はしてゐるのである。何人も、その街路にさしかゝると、必ずや、その有機的統一を感得し、目貫の建物の一部分としてよく調和しつゝあることを觀取する。しかし、東停車場の方から、ストラスブール・セバストポールの廣路へやつてくると、普通長い〳〵通景(みごほし)が、狹霧のおくにか

くれ去つてゐる。それを降りてゆくと、軸のうへに小さな圓屋根が浮び出してくる。なほも進んで、シャテレーの廣場の隅の方へ出てゆくと、全然ちがつた方向に面してゐる圓屋根の建築物と、自分の歩いてゐる街路とは、少しの連絡もないことを發見するであらう。アヴェニュー・ド・ロペラは、それよりはまだ少しくよくできてゐる方である。しかし、オペラの附近にある建築物は、みなあまりに高すぎるので、その正面は、遠くから見通しの目的物としては、あまりに有效でない。また兩端の假席のみが目立つて、中央の入口が水ぎわ立つてゐない。かうしてオペラが、折角の大通りに十分に君臨してゐるらしくも、またそれと一つになるまでに調和してゐるやうにも思はれない。他の方向から眺めると、一つの圓屋根のついた建築物とよりは受けとれず、近づいて眺めると、一つの大通りが、チョンぎられたホテルの一隅につき當つてゐるとよりは見ない。その圓屋根も、四角の設計なので、一角だけから望まれる。新ルーヴルからは五百尺のかなたにあり、やがて前景のうちに消え入つてしまふ。ハウスマンとデシャンは自分だちの力で出來るだけのことをしたのであらうが、偉大なる藝術を創造するには、善き志嚮以上の何ものかを必要とする。これらの、かりそめの芝居じみた效果は、決して都市の美觀上決して感心のできる材料ではない。

エトアールがまたハウスマン自慢の種である。この廣場は空中からとつた寫眞の上では、たしかに立派なものである。そしてそこから放射する街路は、ナポレオンの綠門の役には十分にたつたに違ひない。エトアールとは星形の廣場をいふのであるが、この星形なるものは、街路計畫の意匠としては甚だ古いものである——恐らく最初は、獲物の張番を容易くするために、狩獵の際、林中に用ゐたものであらう。理想的な星形廣場の重要々件としては、第一に、何人もその中心または中心近くに立つことができ、第二に相對した放射道路が同じ地平線上にあるべく、若くは、あるやうに見え、かつそれがみな同一の長さをもつてゐなければならない。しかもこのエトアールでは、十二筋の放射道路は、三百メートルのものから無際限のものまで、みなその長さを異にしてゐるのみならず、おの〳〵思ひ〳〵に緩急の勾配をなして、廣場から斜面を形づくつてゐる。また本當の廣場は、一般に平面であつて、周圍に建築物を繞らしてゐなければならないが、このエトアールでは、本當に圓形であるのかどうかさへも分らないほどに、四壁の建築物が中斷され、かつ中央が高く凸面をなし、アーチをめぐる自動車が、中心點の丘の影にかくれて見えなくなるのである。それはいかに交通上に便宜であつても、またいかにそのアーチの方に向つて放射さる十二の路線が、いかに利目（きゝめ）を現はしてゐても、十七世紀及び十八世紀のフランス建築家によつて確立された言葉の正確な意味における『廣場（プラース）』と呼ばれるに足るだけの權利は、どうしてもまだ容されてゐないやうである。

六

これらの批評は、デシャンやハウスマンにとつては、或は無意義かもしれない。その當時は、一世紀も以前とは異なり廣場設計の熱も、よほど冷めてしまつてゐたのである。しかも、かれらの仕事に審美的要素の缺けてゐたのは、かれらが

全然都市改造家たるの資格も缺いてゐたからだといふわけではない。前にも述べた通り、パリの改造計畫は、ナポレオンの作戰上の都合から、主として割り出されたものであり、敢て藝術上の大事業たらしめやうとしたのではなく、その實用的價値にのみ重きをおき、實用以外にはこけをどしめいた莊大さを望んだのであつた。ちやうどその時代には、オペラが藝術の女王と信せられてゐた關係上、廣くてまつすぐな大通りに並樹の襞でもとつておけば、都市の女王たることができるものと、ひとりで單純に考へられたのである。

一八六八年ハウスマン辯護のために、出版された小冊子のうちには、ハウスマンの目的は『莊美に滿ちた全體的光景』("Un aspect général plein de grandeur.")にあつたと記されてゐる。つまりこの目的通りに、出來上つたわけなのである。甲羅を經た藝術家ならば、プラース・ド・ロペラをも、厭はしい出來損ひのものと見、ローマのキャンピドグリオでも夢みて、その莊麗と比較するかも知れないが、銀行の頭取や女賣子などは、たゞ一般的効果だけに感心し、何ごともみなシルタハットのやうに、すべ〳〵テカ〳〵してさへをればいゝのである。かれらは、最新流行の衣裳をつけた、裕福な人々の間に交ることを好くやうに、かうしたこけをどしのパリに住んでゐることを好くのである。町の大さと、富力とを誇示するやうな、廣大な街路が、華々しく八方に射出してゐるのをみて、隨喜の涙に咽ぶのである。かれらは批判的な特殊の審美的關係には無感覺であるが、その摑み得る範圍内にも、ある種の莊美がないとはいへない。しかしてこの効果における要素は、藝術の靄ふかき境界線に存在するのである。

斑らな平らな樹と、影まばらな灰色の石との調和や、矢のやうにまつすぐな破風の線が、暮靄のうちにボカされてゐるのや、濡れたアスファルトの上に反映する街燈の列や、平々凡々のうちにも、本當の美の影を發見することができる。また一般にいかにも廣々と餘裕のある樣子には、その形式は粗硬であり、その清純な審美的可能性を十分に發揮してはゐないが、しかし、そのうちには、ちやうど、建築用の切石が、まだ壁のうちにはめこまれない前にもつてゐる價値とおなじやうな一種の價値を備へてゐることも慥かである。

批判的眼光を備へてゐない素人の訪客は、ハウスマンのパリに對して、ヴエルサイユ宮殿に對するとおなじやうな反動に捕へられる。女人にいはせると、ヴエルサイユ宮殿は、完全に調和された空間の構成であるが、ハウスマンの廣路は、たゞ廣い原料品であり、この原料を、ル・ノートルや、マンサールにあてがつたならば、どんなに立派なパリが出來上つたであらう。

パリの改造計畫は、その美觀の破壞によつて、高價の代償を支拂つたことについては、必ずしも、ハウスマンやナポレオンをのみ責めるわけにはゆかないが、しかし、かく美觀上に大なる損害を與へたことは、かれらを、一家をなした美術界の英雄とかにし、かつその成し遂げた事業を、都市計畫の模範とかにするには、あまりに、無資格を證明するものである。非難を一々數へあげると際限がない。小さやかなブーラス・ド・ヴイクトアールや、古きホール・オー・ブレを巡る循環道路をスポイルしたことや、ブラース・ドーフインの改造やルクサンブール庭園の隅つこの方を削り取つて、メヂシの噴

泉をどこかへ移してしまつたことや、廣々として大きなエリゼアン・フィールドの一つにはバレー・ダンデュストリーを建築して、他の一つにはバカげた無意義の庭園を造つたことや美しい古雅な後庭の破壊や、建築物の取除けや、その他いろ〳〵のでたらめな改造計畫の責任は、どうしても皇帝と縣令との負はなければならぬものである。ハウスマンは『五十八個の古建築物を復舊し、切り離した』と誇つてゐるが、その復舊設計は、一般的に惡趣味と見られ、その『身受け（ドガージュマン）』政策は、今や全く信用を失つてしまつた。ノートル・ダームがその一例である、即ちその一目でわかる不調和や、不適當な建築物は、遠近からの觀望を、著しく傷けてゐるのである。

ハウスマンが、貴重なる都市美術の遺産と、實用との調和を、安心して一任することのできるほどの、氣の利いた都市計畫家でなかつたことは、その備忘錄中に記された一つの逸話によつても明かである。一八七一年、彼れがイタリーを旅行中、パリの樣式に隨つてローマを改造せんとする事業を請負ふべき會社を計畫しつゝある大實業家の集團から、その會社の社長たらんことを勸誘されたことがあつた。彼れはそれを辭退はしたが、その代りに、『曲つた街路や、デコボコの地形の『永久の都市』を切り開いて、必要の『堀開（ベルスマン）』をなすべき計畫をたてることを承諾したのである。幸ひにして七丘は削り去られなかつたけれども、ピアザ・ノヴアナの北端にある『深傷（ふかで）』のできたのは一にハウスマンのおかげなのである。彼れはこの話しを、自己の熱心と職業的立場とを示すために記しておいたらしいが、その實、都市計畫に對する熱心の背後に潜んでゐるふつゝかな動機を、あからさまに曝露することに氣づかなかつたのである。

ハウスマンが、永久の大都市計畫家であるかどうかは、都市建設の意義いかんによつて決定さるべきである。それはとにかく、パリにおいて、眞に美觀的なものはみな、ハウスマン以前に建てられたものであることを忘れてはならない。また、ナポレオン三世や、建築家デシャンは、ハウスマンが實行したよりも多くの仕事をしたことも慥かであり、その事業の背後に潜んだ動機は、純粹な人道的のものでないといふことも、その審美的性質が最高のものでないといふことも慥かである。しかし、かゝる輕微な瑕瑾は、致命傷とはいへないハウスマンは美術家でもなく、また美術家たるべき必要もなかつた。かれはたゞ蒸氣鍬の神化したものであつた。彼れはただ忠實な、倦むことを知らない、働らき手の成功者として理想的な時代の徵象であつたのである。かれは、十分にその成し遂げた仕事について功を誇り、上院の貴族たちに對して『今や高き頭と、堅き心とをもつて、今や義務の地位から退かんとするものである』と大得意で宣言すべき權利はもつていゝのである。

＝ハウスマンの項終り＝

本會秋季大會

（昭和二年拾月拾六日於福知山線武田尾）

佳山生

天は愈々高く、馬は益々肥わて今や文字其儘に好季到れる今日昭和二年度社團法人日本建築協會秋季大會は福知山線武田尾山にて開催せられた。



武田尾山の渓谷（武庫川源流）

さなくとも人心の遊行氣分漲れる秋、殊に本年は從來と全然其行方と趣向を換えて會員をしてコンパスを忘れセメントの埃に離れ眞に野外氣分を味はつてもらいたいとの大會委員の心入れにて茲に武田尾山を選定松茸狩を行ふことゝなつた其世話振り人情も尚及ばずか……。

當日會するもの六拾名の多きに達したるに見るも此の擧の如何に時宜に適したるかを覗ひ知ることが出來る。

折柄翌日も祭日と云ふのでこの日曜の人出の多きこと梅田發福知山行一番列車は發車にはまだ餘程の間もあるに早くも車内はすし詰はおろかデッキにも乘客滿載の光景、此の上は屋根に上るより外なく宛然震災氣分の現出と云ふ所である。只悲鳴にかはるに歡聲は矢張り遊樂氣分の一つである。

吾等の滿載列車は豊穰なる稻田を分けて走る程に軈て寶塚驛につく、こゝにも多數の會員諸君の顔を見掛けたが中には乘車不能で次の列車にした人も有つたことは後で明つた。

寶塚を發車してよりは列車は直ちに山間に入る、峽嶺を想はせるやうな地形を七八ツものトンネルを潜つて溪流を距てゝ山を背にせる一小驛に着いた、之が武田尾驛だが驛名の表示も見當り難く長き列車は降車設備を溢れた爲女子供の下車には可成困難に見



武田尾驛附近より眺望

受けられた。

驛頭には何々會と書いた紙旗拾數流を朝風に靡せて出迎ね



景光の手握手の長員委濱横と君介建井森員役會學築建賓來

て居る裡に本會の旗を見出した時は何かなしに小なる興奮を感じた、棧道を谷川に沿ひ丁餘にし細長き鐵橋を南に渡り更に川沿に北に二丁程行く、そこには本日の休憩所たるべき橋本樓の外庭一小亭を取入れたる數拾坪の地面に茶菓を設けて

歡待の委員と紅裙の顏が晴がましく待つて居る。

之より一同勢揃の上直ちに大會々場たる武田尾山上に向ふ武田尾には鑛泉がある、旅館は之を温めて温泉として居る、有馬寶塚の二泉を三角形の底邊の二點として武田尾は丁度頂



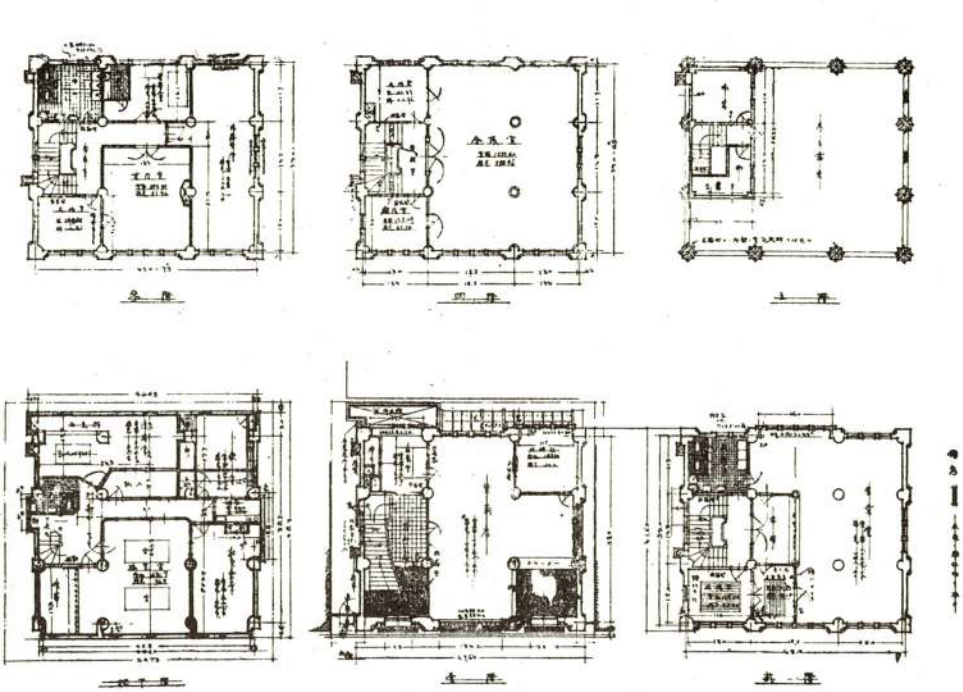
君一雄川白(左)君郎三勇井酒(右)　者勝優狩茸松賞懸

中越大の贈寄長員委はるえとまのの君川白　等賞一の贈寄長會はるてす持の君井酒

點に位して居る、萬病によしとあるから將來大いに有望かも知れない。此鑛泉は德川時代武田尾某の發見したものと傳ね

られて居る温泉もさる事であるが此の邊の風景も亦實によい、山は鐵道を挟でせまり溪流には舞える如く伏せるが如き奇石怪岩の間を清き流が或は白兎の躍るが如く又は激して蛟龍の怒るが如く、仰げば武田尾の秀峰には色鮮やかなる松柏繁茂せる所空には鳶高く悠々と舞つて居る、都塵を洗ふには絶好の地である。

さて一行上る程に山頂設けの場所に到る、こゝにて横濱委員長より本日の松茸狩に對する懸賞及び審査委員の發表あり、男性側より岡部、河合の兩氏他に特に物が物丈に若手美人を一名加へて審査の公平に備へ速時茸狩開始を宣した、各自手渡されたる竹籠を手に勇氣淋漓として出發、茸山は一番山のとこゝて山の口より早矗々たる可憐な姿を見出された一同其豊富なることに聊か面喰ひ氣味であつたが時餘にして豫て宣せられたる茸狩を止め集れの警笛けたゝましく峰谷々に響き渡り以前の根據地に引揚ぐ、各自の手には籠に溢れたる獲物を見た、獲物の審査は先づ一杯傾けて後と設けの席に就き暫時は杯の献酬に維暇なき有樣仲を美形の斡旋に宴愈々興を催し藹々たる和氣一山を被はんばかりに見ゑた、やがて審査は開始せられた。男女兩性より觀察して確に拔群なりと認められたる逸物の獲得者は第一等を酒井勇三郎氏に定まり片岡會長寄贈のいとも見事なる松茸籠を贈られ、外に個人優賞として白川雄一氏選定せられ之にも横濱委員長寄贈の大巾大越中褌を贈呈茲に本日の松茸狩の審査及賞品授與の式を了り再び宴席を温め心行計りの歡樂を極め午後三時頃無事本年度秋季大會を終了した。



有隣生命保險株式會社大阪支店新築工事概要

一、位　置　大阪市東區備後町　丁目五八番地
一、階　數　六階建（地階共）
一、建物高サ　塔屋パラペット上端迄　六十六尺七寸
一、建物様式　近世式
一、構　造　關東震災に鑑み細密なる強度計算による耐震耐火鐵筋「コンクリート」構造となせり
基礎工事には路面下十四尺堀下げ割栗石地形を施したる上に各柱を連結する鐵筋「コンクリート」地形となす
一、屋　根　鐵筋「コンクリート」床版上に防水工事を施し「クリンカー」「タイル」敷となす
一、外部仕上げ　黃龍石「テラカツタ」「スクラッチタイル」並に人造石を以て外裝す
一、內部仕上げ　主として「ドロマイド」主要なる室は壁紙貼及ペンキ塗女關腰は色石張となす
一、床　女關及便所「モザイックタイル」敷地階及び一階には「セメントタイル」敷其他は「リグノイド」仕上げとなす
一、外部窓及出入口　總て鋼鐵製建具を使用し特に隣家に面する三方面には自動式鐵製巻上「シヤツター」を裝置し耐火手法を施す
一、水道工事　各便所及炊事場其他要所に給水し汚水は地階床下汚水淨化槽を經て市下水道に放流せしむ尙各所に消火栓を設備す
一、煖房工事　低壓電力式蒸氣罐を使用し各室に配置せる放熱器に蒸氣す
一、電燈、電話、電鈴工事　電線は總て瓦斯鐵管內に納め床或は壁內に隱蔽し要所に配線す
一、地鎭祭起工　大正十五年十月九日
一、上棟式　昭和二年四月十六日
一、竣功　昭和二年七月二十日
一、設計及工事監督者　村上徹一建築事務所
一、工事請負者　株式會社　大林組



有隣生命大阪支店

設計及監督　村上徹一建築事務所

工場請負者　大林組



有隣生命大阪支店・營業部の一部



同・重役室の一部

都市計畫及建築ニ關スル勅令法令其他

神戸都市計畫街路左ノ通決定ノ件認可ス

神戸都市計畫

街路ノ部

第一　街路ノ等級及幅員ハ左ノ標準ニ依ル

一　廣路　四十四米以上

二　一等大路ハ左ノ三類トス

第一類　三十六米以上

第二類　二十九米以上

第三類　二十二米以上

三　二等大路ハ左ノ三類トス

第一類　十八米以上

第二類　十五米以上

第三類　十一米以上

第二　本計畫ニ定ムルモノヲ除クノ外街路ノ建造ニシテハ大正八年十二月内務省令第二十五號街路構造令ノ定ムル所ニ依ル

第三　新設又ハ擴築スヘキ街路ノ位置及幅員左ノ如シ

一、一等大路第一類

第一號線　幅員三十八米

第二號線　幅員三十六米

但シ新三宮驛前ニ前五千二百平方米ノ廣場ヲ設ク

第三號線　幅員三十六米

二、一等大路第二類

第一號線　幅員三十三米

第二號線　幅員三十三米

但シ東遊園地ニ接スル部分ニ於テ約千三百平方米ノ廣場ヲ設ク

三、一等大路第三類

第一號線　幅員二十七米

第二號線　幅員二十七米

第三號線ノ一　幅員二十七米

但シ國有鐵道小野濱驛前ニ約千二百平方米ノ廣場ヲ設ク

第三號線ノ二　幅員二十七米

第四號線　幅員二十七米

第五號線　幅員二十七米

第六號線　幅員二十七米

第七號線　幅員二十七米

第八號線ノ一　幅員二十七米

第八號線ノ二　幅員二十七米

第九號線　幅員二十五米

第十號線　幅員二十五米

第十一號線　幅員二十五米

第十二號線　幅員二十五米

第十三號線　幅員二十五米

第十四號線　幅員二十五米

第十五號線　幅員二十二米

第十六號線　幅員二十二米

第十七號線　幅員二十二米

第十八號線　幅員二十二米

第十九號線　幅員二十二米

第二十一號線　幅員二十二米

第二十二號線　幅員二十二米

第二十三號線　幅員二十五米

第二十四號線　幅員二十二米

第二十五號線　幅員二十二米

第二十六號線　幅員二十二米

第二十七號線　幅員二十二米

第二十八號線　幅員二十二米

第二十九號線　幅員二十二米

第三十號線　幅員二十二米

第三十一號線　幅員二十二米

第三十二號線　幅員二十二米

第三十三號線　幅員二十二米

第三十四號線　幅員二十二米

四、二等大路第一類

第一號線　幅員十八米

第二號線　幅員十八米

第三號線　幅員十八米

第四號線　幅員十八米

第五號線　幅員十八米

第六號線　幅員十八米

第七號線　幅員十八米

第八號線　幅員十八米

第九號線　幅員十八米

第十號線　幅員十八米

第十一號線　幅員十八米

第十二號線　幅員十八米

五、二等大路第二類

第一號線　幅員十五米

第二號線　幅員十五米

但シ新三宮驛裏ニ約三百平方米ノ廣場ヲ設ク

第三號線　幅員十五米

第四號線　幅員十五米

第五號線　幅員十一米
第六號線　幅員十五米
第七號線　幅員二十七米
第八號線　幅員十五米
第九號線　幅員十五米
第十號線　幅員十五米
第十一號線　幅員十五米
第十二號線　幅員十五米

六、二等大路第三類

第一號線　幅員十一米
第二號線　幅員十一米
第三號線　幅員十一米
第四號線　幅員十一米
第五號線　幅員十一米
第六號線　幅員十一米
第七號線　幅員十一米
第八號線　幅員十一米
第九號線　幅員十一米
第十號線　幅員十一米
第十一號線　幅員十一米
第十二號線　幅員十一米
第十三號線　幅員十一米
第十四號線　幅員十一米
第十五號線　幅員十一米
第十六號線　幅員十一米
第十七號線　幅員十一米
第十八號線　幅員十一米
第十九號線　幅員十一米
第二十號線　幅員十一米
第二十一號線　幅員十一米
第二十二號線　幅員十一米
第二十三號線　幅員十一米
第二十四號線　幅員十一米
第二十五號線　幅員十一米
第二十六號線　幅員十一米
第二十七號線　幅員十一米
第二十八號線　幅員十一米
第二十九號線　幅員十一米
第三十號線　幅員十一米
第三十一號線　幅員十一米
第三十二號線　幅員十一米
第三十三號線　幅員十一米
第三十四號線　幅員十一米
第三十五號線　幅員十一米
第三十六號線　幅員十一米
第三十七號線　幅員十一米
第三十八號線　幅員十一米

右公告ス

昭和二年三月二十五日

京都都市計畫事業中設計第二ニ依リ都市計畫京都地方委員會ノ議ヲ經テ變更シタルモノ左ノ如シ

左記ノ部分ニ付別紙圖面點線ヲ實線ノ通變更ス（圖面省略）

一、第一號線中

一　上京區田中門前町十二番地ヨリ同町所在官有地（知恩寺境内）（東側）ニ至ル及同町四十八番地ノ一ヨリ同町五十七番地ノ二（西側）ニ至ル部分

二　葛野郡西院村大字西院小字三藏七番地ヨリ同字一番地ノ一ニ至ル及同村同字小字淳和院五十一番地ヨリ同字四十九番地ニ至ル部分（東側）

三　葛野郡西院村大字西院小字三藏五番地ヨリ同村同字小字淳和院六十番地ニ至ル部分（西側）

二、第四號線中

一　上京區聖護院山王町二十三番地ヨリ同町二十二番地ノ一（南側）ニ至ル及聖護院山王町十五番地ヨリ同町十八番地先（北側）ニ至ル部分

二　上京區吉田本町所在官有地（京都帝國大學敷地）（南側）ニ於ケル及田中門前町所在官有地（知恩寺境内）ヨリ同町十二番地（北側）ニ至ル部分

三　上京區吉田泉殿町一番地ノ四ヨリ同町四番地ノ二（南側）ニ至ル及田中門前町四十八番地ノ一ヨリ同町五十番地（北側）ニ至ル部分

三、第八號線中

一　上京區聖護院山王町十五番地ヨリ同町十一番地ノ一（東側）ニ至ル及同町四十三番地ヨリ聖護院川原町所出官有地（京都帝國大學醫學部敷地）（西側）ニ至ル部分

二　上京區吉田本町所在官有地（京都帝國大學敷地）（東側）ニ於ケル及吉田泉殿町所在官有地（京都高等工藝學校敷地）ヨリ同町一番地ノ四（西側）ニ至ル部分

四、第十二號線中

一　下京區大宮四條下ル四條大宮町十番地ノ二ヨリ壬生賀陽御所町三番地ノ二（南側）ニ至ル及大宮錦小路下ル錦大宮町百十九番地ヨリ壬生坊城町所在官有地（北側）ニ至ル部分

二　葛野郡西院村大字西院小字三藏十番地ヨリ同字一番地ノ一（南側）ニ至ル及同村同字小字淳和院七番地ノ一地先ヨリ同字五十一番地（北側）ニ至ル部分

右公告ス

昭和二年三月二十五日

都市計畫公告

金澤都市計畫街路左ノ通決定ノ件認ス

金澤都市計畫街路

第一　街路ノ新設及擴築竝ニ位置及幅員左ノ如シ

第一號線

袋町五十七番地ノ三ヨリ岩根町三十番地ノ一ノ一ノ二ニ至ル路線　幅員　十二間

第二號線

五寶町百五十六番地ノ一ヨリ岩根町十一番地ノ三ニ至リ前號路線ニ接續スルノ路線　幅員　十間半

第三號線

彦三六番丁番地ノ二ニ於テ第一號線ヨリ分岐シ五尊町百四十五番地ノ十三ニ至ルノ路線　幅員　四　間

第四號線

桶町三十七番地ヨリ鹽屋町百十二番地ニ至ルノ路線　幅員　四　間

但シ彦三五番丁六十九番地ノ四ヨリ終點ニ至ル區間ハ幅員三間トス

第五號線

彦三一番丁二番地ヨリ岩根町三番地ニ至ルノ路線　幅員　四　間

第六號線

横安江町八十六番地ヨリ彦三一番丁七十八番地ノ二ニ至リ前號路線ニ接續スルノ路線　幅員　四　間

第七號線

岩根町十九番地ニ於テ第一號線ヨリ分岐シ第五號線終點ニ至ルノ路線　幅員　八　間

第八號線

彦三七番丁一番地ノ一地先ニ於テ第一號線ヨリ分岐シ彦三八番丁三十一番地ニ自リ右折シ彦三七番丁四十八番地ニ至リ第二號線ニ接續スルノ路線　幅員　三　間

第九號線

彦三七番丁二番地ノ一ニ於テ第一號線ヨリ分岐シ同四十六番地ノ六ニ至リ第二號線ニ接續スルノ路線　幅員　三　間

第十號線

彦三二番丁一番地ノ一ヨリ第七號線起點ニ至ルノ路線　幅員　三　間

第十一號線

横安江町六十一番地ヨリ彦三五番丁六十九番地ノ七ニ至リ第一號線ニ接續スルノ路線　幅員　三　間

第二　街路ノ築造ニ關シテハ大正八年十二月內務省令第二十五號街路構造令ノ定ムル所ニ依ル

右公告ス

昭和二年六月二十二日

內閣總理大臣　男爵　田中　義一

法律第四十號

防火地區內借地權處理法

第一條　本法ニ於テ借地權ト稱スルハ建物ノ所有ヲ目的トスル地上權及土地ノ賃借權ヲ謂フ

第二條　市街地建築物法ニ依リテ指定セラレタル甲種防火地區內ニ於テ同法第十三條ニ基ク命令ニ定メラレタル建物以外ノ建物ノ所有ヲ目的トスル借地權ヲ有スル者カ其ノ土地ニ建物ヲ築造セントスル場合ニ於テ借地條件ノ變更ニ關シ當事者間ニ協議調ハサルトキハ裁判所ハ當事者ノ申立ニ因リ防火地區內借地委員會ノ意見ヲ聽キ借地權ノ殘存期間、從前ノ借地條件、土地ノ狀況、借地ニ關スル從前ノ經過等一切ノ事情ヲ斟酌シテ借地條件ノ變更其ノ他當事者間ノ衡平ヲ維持スル爲相當ノ措置ヲ命ズルコトヲ得

第三條　前條ノ裁判ヲ爲ス場合ニ於テ裁判所ハ當事者ノ申立ニ因リ相當ノ出捐其ノ他適當ノ條件ニテ借地權ノ消滅ヲ命スルコトヲ得

第四條　本法ノ裁判ハ借地ノ所在地ノ管轄スル區裁判所ニ於テ非訟訴事件手續法ニ依リ之ヲ爲ス

第五條　防火地區內借地委員會ハ五人以上ノ委員ヲ以テ之ヲ組織ス

第六條　防火地區內借地委員ハ特別ノ知識經驗アル者其ノ他適當ナル者ニ就キ每年豫メ地方裁判所長ノ選任シタル者又ハ當事者ノ合意ニ依リ選定セラレタル者ノ中ヨリ各事件ニ付裁判所之ヲ指定ス

第七條　防火地區內借地委員會ノ決議ハ委員ノ過半數ノ意見ニ依ル

第八條　防火地區內借地委員會ノ評議ハ秘密トス

第九條　防火地區內借地委員ニハ旅費、日當及止宿料ヲ給スル其ノ額ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十條　本法ノ裁判ニ對シテハ卽時抗告ヲ爲スコトヲ得其ノ期間ハ之ヲ二週間トス前項ノ卽時抗告ハ執行停止ノ效力ヲ有ス

第十一條　本法ノ裁判ニシテ財產上ノ給付ヲ命スルモノハ執行力ヲ有スル債務名義タルノ效力ヲ有ス

第十二條　本法ノ裁判ノ費用ニ付テハ民事訴訟費用法

第十六條及民事訴訟用印紙法第十六條ノ規定ニ依ル

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

本法施行ノ地區ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

下關都市計畫街路左ノ通決定ノ件認可ス

下關都市計畫

街路ノ部

第一　街路ノ等級及幅員ハ左ノ標準ニ依ル

一　廣路　幅員　四十四米以上

二　一等大路ハ左ノ三類トス

第一類　幅員　三十六米以上

第二類　幅員　二十九米以上

第三類　幅員　二十二米以上

三　二等人路ハ左ノ三類トス

第一類　幅員　十八米以上

第二類　幅員　十五米以上

第三類　幅員　十一米以上

第二　前項ニ定ムルモノヲ除クノ外街路及橋梁ノ築造ニ關シテハ大正八年十二月內務省令第二十五號街路構造令ノ定ムル所ニ依ル

第三　街路ノ新設及擴築竝位置及幅員左ノ如シ（省略）

右公告ス

昭和二年四月二日

名古屋都市計畫事業運河新設設計竝執行年度割左ノ通變更ノ件認可ス

一、大正十三年十一月十七日認可名古屋都市計畫事業運河新設設計圖面中別紙圖面ノ通變更ス（圖面省略）

一、名古屋都市計畫事業運河新設及建築敷地造成ハ大正十三年度ヨリ昭和三年度ニ至ル五箇年度ニ繼續執行スルモノトシ其ノ年度割左ノ通更ム

大正十三年度　約一割九分

大正十四年度　約二割二分

大正十五年、昭和元年度　約一割

昭和二年度　約二割八分

昭和三年度　約二割一分

右公告ス

昭和二年四月五日

大阪都市計畫事業竝施行年度割ノ左通追加ノ件認可ス

大阪都市計畫事業（追加）

第一　街路ノ新設及擴築ノ部

三、一等大路第三類

第三十一號線（寢屋川線）

天滿橋南詰ニ於テ大阪市區改正設計二等大路第一類第一號線ヨリ分岐シ京橋一丁目一番地々先ニ於テ一等大路第三類第二十號線ニ接續シ新寢屋川新架橋ヲ經テ京橋北詰ニ至ル路線

幅員十二間

但シ本道路ニ接スル北側ノ廢川敷地及國道二號ト本道路トノ中間ニ介在スル土地ニ於テ建築敷地ヲ造成ス

右八ノ三　施行年度割左　如シ（一等大路第三類第十七號線）

昭和二年度　約一割九分二厘

昭和三年度　約二割三分二厘

昭和四年度　約二割九分九厘

昭和五年度　約二割七分七厘

右公告ス

昭和二年四月十一日

◉內務省告示第三百十九號

東京都市計畫土地區劃整理東京市長施行地區第四地區ノ換地處分ノ決定ヲ認可セリ

昭和二年四月十二日

◉內務省告示第三百二十六號

岐阜都市計畫區域內左ノ區域ニ昭和二年五月十五日ヨリ市街地建築物法ヲ適用シ之ヲ同法施行令第三十一條ノ規定ニ依リ指定ス

昭和二年四月二十日

一、岐阜縣稻葉郡加納町、本莊村、長良村ノ一部（大字長良、福光）、厚見村ノ一部（大字上川手）、北長森村ノ一部（大字岩戶、北一色、野一色）

大阪都市計畫第二期下水道事業竝年度割中左ノ通變更ノ件認可ス

大阪都市計畫第二期下水道事業竝年度割

第三

一　四貫島春日出排水區

下水道延長　約一萬五千五百十一間

下水管種類　「鐵筋入膠泥管」ヲ「鐵筋混凝土管」ニ改ム

下水管內徑　「八寸以上」ヲ「一尺以上」ニ改ム

排除方法　「三百四十馬力」ヲ「二百七十五馬力」ニ「每秒百二十立方尺」ヲ「每百四十立方尺」ニ改ム

二　善源寺東野田排水區

下水道延長　約二萬五千七百七十一間

下水管種類　「鐵筋入膠泥管」ヲ「鐵筋混凝土管」ニ改ム

下水管内径　一尺以上八尺以下
排除方法　「電動喞筒機械五臺」ノ次ヲ「四百七十五馬力ヲ設備シ晴天時下水ハ汲揚後主トシテ鳴野橋下流ニ於テ寢屋川ニ排出シ降雨時下水ハ榎並川ノ一部ヲ改修シテ鯰江川ニ排出ス其ノ排水容量ハ毎秒二百二十立方尺トス」ニ改ム

三　西野田排水區

イ

下水道延長　約四千二十一間
下水管種類　「鐵筋入膠泥管」ヲ「鐵筋混凝土管」ニ改ム
下水管内徑　「八寸以上」ヲ「一尺以上」ニ改ム
排除方法　「約五十馬力」ヲ「六十馬力」ニ「毎秒二十立方尺」ヲ「毎秒三十立方尺」ニ改ム

ロ

下水道延長　約二百二十二間
下水管種類　鐵筋混凝土管及鐵筋混凝土暗溝
下水管内徑　二尺及六尺
排除方法　「木場川」ノ次ニ「及六軒屋川」ヲ加フ

第五　施行年度割左ノ通定ム

大正十三年度　約三割五分
大正十四年度　約四割二分
大正十五、昭和元年度　約一割四分
昭和二年度　約九分

右公告ス

昭和二年四月十三日

神戸都市計畫事業年度割左ノ通決定ノ件認可ス

一、神戸都市計畫街路ノ新設及擴築事業年度割ヲ左ノ通更正ス

自大正十二年度　至大正十五年度　約八割八分
昭和二年度　約一割二分

右公告ス

昭和二年四月十三日

文部省告示第二百十八號

古社寺保存法第四條ニ依リ左記ノ建造物ヲ以テ特別保護建造物ノ資格アルモノト定ム

昭和二年四月二十五日

名稱	構造形式	所在地名
大覺寺宸殿	桁行六十六尺一寸、梁間四十四尺八寸七分、單層、屋根入母屋造、檜皮葺	京都府葛野郡嵯峨町大覺寺境内
稻荷神社御茶屋	桁行二十三尺二寸、梁間二十六尺、單層、屋根入母屋造、上部欄干、下部欄干、檜皮葺、腰廻檜皮葺、北ノ方ニ附屬車寄之ニ附屬ス	同紀伊郡深草町大字福稻稻荷神社境外地
淨土院客殿	桁行三十尺一寸、梁間十二尺七寸、單層、屋根入母屋造、檜皮葺	同久世郡宇治町淨土院境内
丹生神社本殿	一間社春日造、屋根檜皮葺	奈良縣添上郡柳生村丹生神社境内
東光寺本堂（藥師堂）	桁行五間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺	山梨縣西山梨郡里垣村東光寺境内
寶福寺塔婆（三重塔）	二間三層塔婆、屋根初重二重本瓦葺、三重銅板葺	岡山縣吉備郡總社町寶福寺境内
妙本寺鎭守堂	一間社流造、屋根柿葺	同大和村妙本寺境内
光明坊塔婆（十三重石塔婆）	十三層石塔婆	廣島縣豐田郡南生口村光明坊境内
安國寺釋迦堂（大雄寶殿）	桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺	同沼隈郡瀨戸町安國寺境内

神戸都市計畫事業街路ノ新設擴築中左ノ通一部設計變更ノ件認可ス

第十二號線ノ二號中運河ニ架スル橋梁ノ幅員ヲ別紙圖面ノ通變更ス（圖面省略）

右公告ス

昭和二年五月二十六日

京都都市計畫道路新設擴築事業執行年度割中左ノ通變更ノ件認可ス

大正十年八月十一日、大正十二年七月二十日、大正十三年九月二十五日及大正十五年三月三十一日認可大正十年度乃至昭和五年度京都都市計畫道路新設擴築事業執行年度割中

大正十五昭和元年度　「約一割四分」ヲ「約一割二分」ニ改ム
昭和二年度　「約一割四分」ヲ「約一割一分」ニ改ム
昭和三年度　「約一割五分」ヲ「約一割二分」ニ改ム
昭和四年度　「約一割五分」ヲ「約一割八分」ニ改ム
昭和五年度　「約一割四分」ヲ「約一割九分」ニ改ム

右公告ス

昭和二年五月二十八日

新刊紹介

日本建築史要（奈良市登大路町 飛鳥園發行）

會員　工學博士　天沼俊一著

本著は京都帝國大學教授にして日本建築の權威者たる著者の或る意味に於ける處女出版である。それだけに是迄の類書とは全然立場を異にし所論說實に穩健質實にして學究の徒としての態度面目遺憾なく躍如として充分に現はれてゐる。殊に文章の通俗平易にして簡にして要を摘み、本著の目的たる學生のための良教科書たるのみならず、斯道專門家及一般觀賞家にも格好の參考の座右書である。

本論と附面との二部よりなり何れも菊版にて本文は四六版五號活字組四七〇頁として空白を大きくして記入に便し勉學者のために周到なる注意を拂ひ内容を第九ケ章に分ち古代より江戸時代に到る各年代別に簡潔に總說を講述したる後佛寺建築神社、宮室等、一々代表的遺物を引例し緣起、構造概要、細部に就て其の特徴を詳記してゐる。尙附圖以外に所々に插繪を嵌めどこまでも萬全を期し懇切を盡してゐる。

附圖は全部凸版及コロタイプ版を用ひ百八十葉の多數を以つてし、しかも著者が永らく奈良縣技師として在勤中より今日迄自ら實測製圖によるものなれば其の正確な點に於ても珍奇な資料を豐富に蒐集せる點に於ても無二といつてよい。

尙、礎石、柱、斗拱、鴟尾類、鬼瓦、木鼻、懸魚等年代別に依る比較研究圖は本書の最も價値あるところにして即ち古代より近世に到る變遷を明瞭に敎示してゐる。

裝幀は著者自らの手になり堵婆に飛鳥を配し獨特の文字と相俟つて高雅な興趣を添えてゐる、恐らくは近來稀に見る快著であると共に類書中の逸品である、本著の如き公刊を見るは學界のため大いに慶賀すべきである。（定價四圓八十錢）

（御購讀の方は建築協會編輯部（麻田宛にて御申込を乞ふ）

訂正及正誤

頁	順	訂正及正誤の位置	誤	正
第一頁	六行目	第六字目	杯	抔
同	二行目	第五字目	杯	抔
同	一四行目	第一字目	見	月
第一五頁	一七行目	第一字目ヨリ	ラバとあるは削除す	
第二四頁	二四行目	第六字目ヨリ	富女	貧男
同	同	第八字目ヨリ	貧男	富女
第四三頁 第四四頁	この頁の寫眞は次の頁の寫眞と入替つてゐますから御斷りして置きます			
第五五頁	二行目	第二字目	一	居

本誌定價表

冊數	定價	郵稅
一冊	七拾五錢	貳錢
十二冊	九圓	貳拾四錢

昭和二年十月廿一日印刷
昭和二年十一月一日發行　（毎月壹回一日發行）

大阪市東淀川區豐崎西通一ノ七
發行兼編輯人　薦田夏次郎

大阪市東區内淡路町一丁目廿一番地
印刷兼發行所　大阪活版所

大阪市西區土佐堀通一ノ一
大同ビルヂング
發行所　社團法人　日本建築協會
電話土四二六五番
振替口座大阪三、九九七五

大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店　柳々堂書店
電話（土佐堀四四〇番）
振替口座二二〇八四番

御購讀の向は本會直接又は特約店へ振替又は爲替にて前金御拂込被下度候

會合

○評議員會

昭和二年九月廿九日自午後六時半至同八時

場所　大同ビル第二集會室

出席者（二十二名）

池田谷君、德政君、和田君、片岡君、橫濱君、高田君、宗君、坪井君、永田君、長田君、波江君、野呂君、能村君、松本（儀）君、小西君、木村君、三木君、光安君、島田君、日高君、平島君、須川君

決議事項

一、定款一部變更に關し臨時總會開會の件

定款第三條中「大阪市北區中之島二丁目二十五番地」とあるを「大阪市西區土佐堀通一丁目一番地」に變更せむとするものにして定款の變更は會員の同意を要するに付臨時總會を開會せんとするものなり

異議なく全會一致可決す

尙臨時總會會員召集に付定款第二十四條第三項に據り書面決議となすことを諮り可決

二、名譽賛助員推薦に關する件

左記諸氏を名譽賛助員に推薦することに可決

1 工學博士　渡邊讓氏

2 左記官職に在任する者

內務大臣　大阪府知事　京都府知事　兵庫縣知事　第四師團長　阪神電鐵社長　阪急電鐵社長　京阪電鐵社長　新京阪鐵道社長　南海鐵道社長　大軌電鐵社長　大阪鐵道社長　大阪商船會社長　大阪府會議長　大阪市議長　京都市長　神戸市長　京都商業會議所會頭　神戸商業會議所會頭

議事錄署名代表者は光安君、平島君に指名決定

○臨時常務會

昭和二年九月二十一日自午後四時半至同六時

出席者

理事　片岡君　宗　君　日高君

常務　坪井君　松室君　阪口君

德政君　池田谷君　波江君

決議事項

一、定款一部變更に付評議員會招集の件

協會事務所移轉は定款第三條の變更を要するに付評議員會を招集して其決議に依り臨時總會を開かんとするものにして評議員會開會のことに可決、時日は九月廿九日午後五時半

二、評議員兒玉廣太郎君辭任申出に關する件

同君東京へ轉任に付辭任申出られたるも其理由は定款には住所如何を限定したる條項無きに依り撤回を同君に求むることに可決

三、本年秋季大會開催に關する件

本年十月の秋季大會は松茸狩を催すことに可決

四、各部委員中不出席者に對し委員長へ注意の件

各部委員中受任以來一回の出席もなきものあるに付委員會設置の主旨に反する次第に付各委員長へ注意を促すことに可決

五、評議員會に附議すへき事項の件

名譽賛助員推薦に付入選をなしたるも未決定

○臨時常務會

昭和二年九月二十九日自午後四時半至同六時

出席者

理事　片岡君　宗　君　日高君

常務　坪井君　德政君　池田谷君

波江君　野呂君

報告

一、建築職工講習會開催實施の件

第二部委員會より今秋の建築職工講習會は「壁の構造と其仕上」とし十月二十四日より一週間市內久寶小學校に於て擧行の旨報告ありたり（講師、時間割別記の通）

決議事項

一、評議員會議事に關する件

1 定款一部變更に關し臨時總會開會の件

2 定款第九條による名譽賛助員推薦の件

以上二件提案に決定

二、本年秋季大會臨時委員選定の件

主記會に其選定を一任のことに可決

三、建築資料總覽刊行會設立に付本協會後援の事を表示するの件承認に關する件

佐野博士外三名連記照會に係る本件は後援のことに可決

四、會員入退會の件

左記諸君の入會を承諾すること

會員

井原國三君　石井　勇君　櫻田文雄君　中田幸一郎君　小宮浩一郎君

普賛

橋本正太郎君　小松讀之助君　森本　正藏君　日方　悅治君

左記諸君の退會を承認すること

會員

山上富君　山田佶君

普賛

初田廣之助君　前田立一君　原田鹭三君　古澤堯君　小俣清君　大村大藏君

○主記會

昭和二年十月一日自正午至午後二時

出席者

松室君　坪井君　阪口君

決議事項

一、秋季大會臨時委員選定の件

常務會より一任されたる本件は左記諸

君を選定推薦することに決定
小笠原　鋼君　岡部　顯則君
和田貞治郎君　横濱　勉君
永田三次郎君　野村　敬一君
黒田　茂君　木村　寛一君
下浦　光衛君　須川廉太郎君

○例　會

昭和二年九月二十一日自午後六時至同九時
場　所　大同ビル第二、三集會室
出席者
宗君外二十二君
講　演
〈演題「子供の敎養に就て」
△講演者　大坪德一氏
宗副會長開會を宣し大坪氏を紹介す
大坪氏右記演題の下に其蘊蓄を傾けて前後二時間に亘る講演あり宗副會長の謝辭ありて終る

○第二部委員會

昭和二年九月十九日自正午至二時半
出席者
池田谷君　小笠原君　酒井君　澁谷君
報　告
去る十六日大阪市視學、建築業協會委員及本協會委員（小笠原、松本儀、酒井三君出席）會合し建築職工講習會開催に付協議、打合せの結果を報告
議　事
一、大阪市、建築業協會及本協會主催建築職工講習會の件
1講習科目
「壁の構造と其仕上」
2聽講者
大工、左官、タイル工
3講師
下浦光衛氏　池田宮彦氏　安井武雄氏
松儀本八氏
右決定
尙講師依頼の交涉は小笠原君に一任し承諾濟の上は時間割を作ること

○第二部委員會

昭和二年十月四日自正午至午後二時十分
出席者
池田谷君　小笠原君　松本君　姫野君
一、大阪市、建築業協會及本協會主催建築職工講習會時間割左の如く決定
開會式十月二十四日午後六時

日次	時間割	講師
廿四日	午後七時—八時	下浦光衛君
	八時—九時	池田宮彦君
廿五日	午後七時—八時	池田宮彦君
	八時—九時	
廿六日	午後七時—八時	池田宮彦君
	八時—九時	
廿七日	午後七時—八時	松本儀八君
	八時—九時	
廿八日	午後七時—八時	松本儀八君
	八時—九時	安井武雄君
廿九日	午後六時—七時	安井武雄君
	七時—八時	

閉會式及證書授與式二十九日午後七時
尙下浦講師は「技術者の責務に就て」池田講師は「壁構造の種類」松本講師は「壁の仕上」安井講師は「內外美的裝飾工法」に付夫々講演
一、其他

○秋季大會委員會

昭和二年十月三日至午後五時至同八時
出席者
委　員
横濱君　岡部君　野村（敬）君　黒田君
木村（寬）君　下浦君　須川君
常　務
坪井君　松室君　阪口君　德政君
吉井君　谷　君　波江君
一、秋季大會次第書決定の件
1趣　向
「松茸狩」
2擧行日
十月十六日（日）
3場　所
福知山線武田尾方面
4會　費
弐圓
5役　割
案內係
永田君、野村君、黒田君、木村君、波江君、野呂君、八木君
宴會係
岡部君、和田君、下浦君、須川君、阪口君、池田谷君
庶務係
松室君、坪井君
會計係
德政君、吉井君、谷君、小笠原君、坪井君
二、委員長決定の件
横濱君委員長に當選承諾

○秋季大會委員會

昭和二年十月六日自午後五時至同八時二十分
出席者
横濱君　岡部君　永田君　野村君
黒田君　下浦君　須川君　木村君
片岡君　坪井君　松室君　波江君
議　事
一、岡部君外三名より福知山線武田尾松茸山に付夫々調査事項の報告ありて協議の結果同地溫泉橋本樓を本據とし當日雨天ならば同樓に於て宴會を催すことに決す
擧行當日先發隊として岡部君外九名出發のこと其他協議散會

新入會者宿所

會員		
石井	勇君	西宮市東口染殿町一勤先　大阪橋本組設計部
櫻田	文雄君	西宮市西濱町新家二二四八筥谷方勤先　大阪橋本組設計部

中田幸一郎君（兵庫縣武庫郡魚崎町横矢五七六勤先住友合資會社建築課）
小宮浩一郎君（西淀川區浦江町五三一勤先淺野物産株式會社大阪支店）
普贊
森村正義君 京都市大宮通八條上ル鹽屋町二八三
橋本正太郎君 京都市田中上柳町三
小松讀之介君 京都市上長者町通知惠光院西入須濱町五五六
日方悅治君（神戸市兵庫東出町三ノ二四勤先神戸鐵道局大阪保線事務所）

轉勤轉居

會員
小笠原銀君 北區曾根崎中二丁目第一曾根崎ビル四階小笠原建築事務所
大倉直三君 東區大手通一丁目松村組
藤井令三君 西區北堀江上通四ノ一七
野村理一君 岐阜市揖斐郡池田村上田
姫野武君 住吉區南田邊町三九ノ一〇
小田惠輔君 住吉區天王寺町二〇四九
小島淳吉君 北區芝田町六二
岸平君 神戸市熊内町六ノ一二一
稻上俊之助君 東京市牛込區戶山町陸軍軍醫學校大林組戶山町出張所
角田吉章君 東京市日本橋區本石町四ノ一大阪橋本組東京支店
鈴木文治郎君（此花區春日出町中一ノ一ノ甲一六勤先東洋紡績四貫島工場營繕課）
龜井幸一郎君 東京府西多摩郡青梅町本町日本電力出張所
川本榮次郎君 東京府下蒲田町御園二一五
古都猛雄君 福井縣今立郡舟津村上鯖江齋藤方
荒木賢治君 東京府下上目黑三田四
普贊
小田周次君 釜山府凡一町七四ノ一
江藤猛夫君 東京府下小松川町下平井一九二一
小島榮二君 東京市麹町區三番町六七富田方
北川安成君 愛媛縣屬土木課營繕係

工務店開設

會員
藤井令三君 藤井工務店西區北堀江上通四ノ一七

寄贈雜誌

電氣評論 每號 社
都人 每號 社
學士會月報 每號 學士會
建築世界 每號 其社
朝鮮と建築 每號 朝鮮建築會
セメント界彙報 每號 日本ポートランドセメント同業會
住宅 每號 住宅改良會
建築雜誌 每號 建築學會
工政 每號 其會
經濟資料 每號 東亞經濟調查局
土木建築 每號 其社
建築新潮 每號 洪洋社
大阪工業俱樂部 每號 大阪工業俱樂部
通俗衛生 每號 大阪府衛生會
帝國鐵道協會報 每號 其會
工業評論 每號 其社
電氣學會雜誌 每號 其會
鐵道軌道經營資料 每號 鐵道同志會
趣味ノ園藝 每號 關西園藝會
國際建築時論 每號 其社
土木建築之日本 每號 其社
優生學 每號 日本優生學會
工業ト社會 每號 東京工業會
工業 每號 大阪工業會
滿州建築協會雜誌 每號 其協會
日立評論 每號 其社
庭園と風景 每號 日本庭園協會
圖書室月報 每號 東京市政調查會
大阪綱島工業會誌 每號 其會
エンヂニヤリング 每號 其社
工業要錄 每號 其發行所
都市研究 每號 兵庫縣都市研究會
名古屋工業會々報 每號 其會
大阪 每號 大阪都市協會
生活 每號 生活改善同盟會
建設 每號 其社
都市問題 每號 東京市政調查會
新建築 每號 其社
京都の實業 每號 京都商業會議所
建築 每號 中央建築會
都市創作 每號 其會
研究資料彙報 每號 大分高商調查部
木材彙報 每號 大阪木材協會
駿工 每號 其會
建築時論 每號 其社
建築學研究 每號 其會
大阪土木建築業組合報 每號 其組合
建築時代 其社

役員

會長 理事 片岡安
副會長 理事 宗兵藏
理事 監事 日高胖
橫濱勉
松本禹象
主記 常務 坪井誠一
同 常務 松室重光
同 常務 阪口芳三郎
主計 常務 德政金吾
同 常務 吉井長七
同 常務 谷民藏
編輯 常務 池田谷久吉
常務 波江悌夫
同 常務 野呂長四郎
同 常務 八木幸次郎

本誌掲載廣告見出表 第十輯 第十一號

位置	廣告主
表紙二頁	シッター汎建製作所
第一頁	大野シッター製作所
第二頁	伊奈製陶株式會社
第三頁	コルク柳商店
第四頁	笹岡家具裝飾店
第五頁	建築用鐵製品一切關西建鐵製作所
第六頁	萬年スレート株式會社
第七頁	大理石大理工業株式會社
第八頁	淺野スレート株式會社
第九頁	日本ペイント株式會社
第一〇頁	ソリデチット日本化學產業株式會社
第一一頁	東洋コルク工業株式會社內土木建築材料合資會社
第一二頁	日本エレベーター製造株式會社
第一三頁	東亞ペイント株式會社
第一四頁	電燈器具駒井商店
第一五頁	煖房衞生其他阿波田良之助商會
第一六頁	大阪電氣分銀株式會社屋根板
第一七頁	酸化鐵東洋鐵粉所
同	大阪鐵板製造株式會社平、溝板
第一七頁	オ！シーエレベーター
第一八頁	照明燈カールツアイス合資會社
第一九頁	東洋リノリューム株式會社

位置	廣告主
第二〇頁	關西ペイント株式會社
第二一頁	床板、衛生、葵商會
第二二頁	タイガボード其他鯛島合名會社
第二三頁	大ヒトロライト工業會社阪
第二四頁	中村ガラニット商會
第二五頁	ボーリング川森組
第二六頁	セメントプラスター其他飾磨化學工業株式會社

後附ノ部

位置	廣告主
第二七頁	池田建築事務所
同	大阪建築相談所
同	橋本建築事務所
同	大阪建築事務所
第二八頁	小笠原建築事務所
同	岡部建築事務所
同	片岡建築事務所
同	石本建築事務所
同	和田建築事務所
同	橫河工務所
第二九頁	宗建築事務所
同	藤井工業所
同	國枝工務所
同	安井建築事務所
第三〇頁	增田清建築事務所

位置	廣告主
第三〇頁	設樂建築事務所
同	眞三橋建築事務所
第三一頁	西原衞生工業所
第三二頁	大倉土木出張所
池田勘藏	
同	龜阪橋本開作組
第三三頁	大竹谷工務所
同	中塚川鐵丁
同	佐伯助組
第三四頁	野村亥種吉
同	久保田熊次郎
同	熊谷組
第三五頁	松村工務店
同	木藤木工所
同	日本海鹽泉合資會社
第三六頁	內高林一郎商店
同	錢大吉建築組
第三七頁	大阪鐵筋コンクリート工業所
同	和泉建築組
第三八頁	石川屋岡本工務店
同	池山組
同	有限會社淺田商店
第三九頁	安藤組出張所
同	駒井喜商店鐵工部
同	辰巳吉之助
第四〇頁	森本組建築店
第四一頁	清水組支店
第四二頁	各種鐵戶其他改良便所SO商會
第四三頁	便利瓦佐久間建材工業所
第四四頁	東洋コンクリート建築衞生一切須賀商會合資會社
第四五頁	大阪耐リノリウム工業合資會社
第四六頁	塗料剝離劑三菱造船所
第四七頁	內外エレベーター株式會社
第四八頁	村木北村梅七商店
同	大阪鐵扉製作所
第四九頁	佐渡島西店金屬天井部
第五〇頁	屋根材野田幸三郎商店
第五一頁	コルクタール高島屋吳服店
第五二頁	セメント防水劑株式會社日本工劑

位置	廣告主
第五四頁	眞三カ所
同	第五橋建築事務所
第五六頁	水洗便利其他梶田豐作
同	スチールシャッター其他
第五七頁	大阪建材商會
第五八頁	スタッコマンダユリヤ
第五九頁	三井物產株式會社
第六〇頁	大連ドロマイド
第六一頁	淺野物產株式會社防水劑マーメイド油脂化工部
第六二頁	スチイルサッシュ其他鐵工所
第六三頁	阿部日出便利瓦
第六四頁	日本建築紙工株式會社
第六五頁	米材其他田村商會
第六六頁	日本スレート販賣會社
第六七頁	辨柄大平工業所
第六八頁	電力ト燈淺海商店
第六九頁	タイルとテラコッター
第七〇頁	山本窯業商店
第七一頁	建築用鐵料山本東商店
第七二頁	三製疊熊
第七三頁	便所之改善城口研究所
第七四頁	床板、丹丹商店
第七五頁	スデマンドグラハベニス工房
第七六頁	淺野スレート株式會社
第七七頁	屋根材料木下謹三商店
第七八頁	日本洋瓦株式會社
第七九頁	矢橋大理石商店
第八〇頁	日米商事合資會社
第八一頁	アルス工業部
第八二頁	水道、衞生、煖房其他桐田商會
第表紙三頁	日本工具製作株式會社
第四頁	王子製瓦株式會社
同	佐治タイル合資會社
煖房其他大和工業株式會社	
塗裝工事松本商店	
山中支那綴通商會	
テラコッタ其他政正合資會社	
デウエット商會	
フーラー塗裝店佐村本勝吉	
小野田ポルトランドセメントシッター其他建築金物商會	
東京建鐵會社	
シッター其他	
煖房其他東亞鐵工所	
スチインドアラス玲光社	
水洗便利米本商店	
便利瓦其他梶田豐作	
スチールシャッター其他	
大阪建材商會	
スタッコマンダユリヤ	
三井物產株式會社	
大連ドロマイド	
淺野物產株式會社防水劑マーメイド油脂化工部	
スチイルサッシュ其他鐵工所	
阿部日出便利瓦	
日本建築紙工株式會社	
米材其他田村商會	
日本スレート販賣會社	
辨柄大平工業所	
電力ト燈淺海商店	
タイルとテラコッター	
山本窯業商店	
建築用鐵料山本東商店	
三製疊熊	
便所之改善城口研究所	
床板、丹丹商店	
スデマンドグラハベニス工房	
淺野スレート株式會社	
屋根材料木下謹三商店	
日本洋瓦株式會社	
矢橋大理石商店	
日米商事合資會社	
アルス工業部	
水道、衞生、煖房其他桐田商會	
日本工具製作株式會社	
王子製瓦株式會社	
佐治タイル合資會社	
煖房其他大和工業株式會社	
塗裝工事松本商店	
山中支那綴通商會	
テラコッタ其他政正合資會社	
デウエット商會	
フーラー塗裝店佐村本勝吉	
小野田ポルトランドセメントシッター其他建築金物商會	
東京建鐵會社	
シッター其他	

建築と社會第十輯第十一號附錄
昭和二年四月六日
內務省令第二十六號

工場附屬寄宿舍取締規則

附 大阪京都府令施行細則

社團法人
日本建築協會

昭和二年四月六日
內務省令第二十六號

工場附屬寄宿舍規則

適用ノ範圍

第一條　本令ハ工場法ノ適用ヲ受クル工場ニ附屬スル寄宿舍ニ之ヲ適用ス

火氣粉塵ニ關係スル作業場ノ寢室

第二條　左ノ各號ノ一ニ該當スル作業場アルトキハ保安上又ハ衛生上ノ害ヲ避クル爲寄宿舍ノ寢室ハ之ト別建物ト爲スベシ但シ除害、豫防又ハ避難ノ設備アル場合ニ於テ地方長官（東京府ニ在リテハ警視總監以下之ニ同ジ）ノ許可ヲ受ケタルトキハ別建物ト爲スコトヲ要セズ

一　爆發性、發火性若ハ引火性料品又ハ多量ノ易燃性料品ヲ取扱フ作業場

二　窯爐ヲ使用スル作業場

三　瓦斯、蒸氣若ハ粉塵ヲ發散シ衛生上有害ナル作業場

地方長官前項ノ寢室ニシテ保安上危險ノ虞アリ又ハ衛生上有害ナリト認ムルトキハ除害、豫防又ハ避難ノ設備ヲ命ジ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ノ停止ヲ命ズルコトヲ得

寢室ト建物階數關係

第三條　寢室ハ建物ノ三階以上ニ之ヲ設クルコトヲ得ズ但シ建物ノ外壁、床、屋根、階段及柱ヲ市街地建築物法施行規則第一條ニ規定スル耐火構造ト爲シタル場合又ハ本令施行ノ際現存スル宿舍ニ付地方長官ノ許可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

外出入口

第四條　寄宿舍ノ廊下ヨリ屋外ニ通ズル出入口ノ戶ハ外開戶又ハ引戶ト爲スベシ

寄宿舍ハ何時ニテモ容易ニ外部ニ避難シ得ル樣ニ爲シ置クコトヲ要ス

ノ戸

第五條　寢室、食堂、病室其ノ他職工（徒弟ヲ含ム以下之ニ同ジノ）居住ノ用ニ供スル室ノ天井高ハ七尺以上ト爲スベシ但シ本令施行ノ際現存スル寄宿舍ニ付地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

居室ノ天井高

第六條　寢室及病室ニハ屋根小屋組ヲ露出セザル樣天井ヲ設クベシ但シ本令施行ノ際現存スル宿寄舍ニシテ防鼠ノ爲屋根小屋組ヲ露出シタルモノニ付地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

寢室、病室ノ天井

第七條　寢室及病室ノ外窓ニハ少クトモ雨戸及障子ヲ設ケ又ハ硝子戸及窓掛ヲ設クベシ寢室及病室ト廊下トノ間ニ戸、障子、壁ノ類ノ設ケナキ場合ニ於テ其ノ廊下ノ外窓ニ付亦同ジ

寢室、病室ノ外窓設備

寢室及病室ト廊下トノ間ニ紙障子ノミヲ設クル場合ニ於テハ其ノ廊下ノ外窓ニ雨戸又ハ硝子戸ヲ設クベシ

第八條　食堂及炊事場ノ床ハ土間（石敷又ハ三和土叩ノ類ヲ含マズ）ト爲スコトヲ得ズ

食堂、炊事場ノ床

第九條　寢室ハ收容人員一人ニ付室面積（押入及床ノ間ヲ除ク）〇・七五坪ヲ下ルコトヲ得ズ但シ臨時必要アル場合ニ於テ地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

寢室ノ室面積

第十條　寢室ノ收容定員ハ一室ニ付十六人ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ本令施行ノ際現存スル寄宿舍ニシテ構造上間仕切ヲ爲スコトヲ不適當トスルモノニ付地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ非ラズ

寢室收容定員

寢室ニハ之ニ收容スル者ノ氏名及定員ヲ入口ニ揭グベシ

第十一條　交替就業ノ爲就眠時間ヲ異ニスル二組以上ノ寄宿職工ヲ同一ノ寢室ニ收容スルコトヲ得ズ但シ十六歲未滿ノ者及女子ヲ收容セザルモノニシテ地方長官ノ許可ヲ受ケタルモノハ此ノ限ニ在ラズ

就眠時間ノ異レル二組以上ノ寄宿工ヲ收容スルトキ

第十二條　寄宿舍ニハ職工每ニ專用セシムル爲必要ナル寢具ヲ備附クベシ寢具ハ少クトモ其ノ襟部ヲ白布ニテ被包シ且敷布ヲ備フベシ

專用寢具

寢具ハ常ニ清潔ニ保チ時時之ヲ日光ニ曝シ且其ノ白布及敷布ハ時時之ヲ洗濯スベシ

第十三條　食堂ニハ職工ヲシテ坐食ヲ爲サシムル場合ヲ除クノ外必要ナル腰掛又ハ椅子ヲ備附クベシ

食堂設備

第十四條　寄宿舍ニ於テ使用スル食器ハ常ニ清潔ニ保チ時時消毒スベシ

食器消毒清潔保持

第十五條　寄宿舍ニハ工場法施行規則第八條第一項ノ疾病ニ罹レル者ヲ使用スルコトヲ得ズ

傳染病者使用不可

第十六條　宿寄舍ニ收容スル職工及宿寄舍ニ使用スル者ニ對シテハ少クトモ一年二回健康診斷ヲ施行スヘシ

健康診斷

記錄保存

前項ノ健康診斷ニ關スル記錄ハ其ノ施行後三年間之ヲ保存スベシ

唾壺配置消毒

第十七條　寄宿舍ニハ液體ヲ入レタル適當箇數ノ唾壺ヲ配置スベシ

唾壺內ノ唾痰ハ消毒シタル後ニ非ザレバ之ヲ投棄スルコトヲ得ズ

寄宿舍ニ於テハ唾壺以外ニ唾痰ヲ咯出スルコトヲ得ズ

共同手拭

第十八條　寄宿舍ニ於テハ共用手拭ヲ備フルコトヲ得ズ

「トラホーム」患者ノ洗面器

「トラホーム」患者ノ使用スル洗面器ハ之ヲ健康者ニ使用セシムルコトヲ得ズ

手洗水ハ流出裝置ト爲スベシ

第十九條　工場法施行規則第八條第一項第二號乃至第五號（流行性腦脊髓膜炎ヲ除ク）ノ患者ノ使用シタル寢具其ノ他ノ物件ハ之ヲ消毒スルニ非ザレバ他ノ者ヲシテ使用セシムルコトヲ得ズ第二號ノ患者ノ使用シタル寢室ニ付亦同ジ

前項及第十七條第二項ノ規定ニ依ル消毒ノ方法ハ傳染豫防法施行規則第五章ノ規定ニ依ルベシ但シ藥物ヲ以テ唾痰ヲ消毒スルニハ鹽酸加石炭酸水（防疫用石炭酸五分鹽酸一分水九十四分）ヲ使用スベシ

手洗裝置傳染病者ノ寢具

便所及手洗裝置

第二十條　寄宿舍ニハ之ヲ收容スル職工ノ數ニ應ジ適當且十分ナル便所及洗面裝置ヲ設クベシ

地方長官前項ノ便所又ハ洗面裝置不適當又ハ不十分ト認メタルトキハ期間ヲ定メ變更又ハ增設ヲ命ズルコトヲ得

管理規程取設

第二十一條　寄宿舍ノ管理ニ關シ規程ヲ設ケタルトキハ遲滯ナク之ヲ地方長官ニ屆出ヅベシ

地方長官必要ト認ムルトキハ前項ノ規程ノ變更ヲ命ズルコトヲ得

管理規程揭示

第二十二條　本令竝寄宿舍ノ管理ニ關スル規程ハ之ヲ見易キ場所ニ揭示スベシ

小工場寄宿舍ニ一部適用除外

第二十三條　本令第二條、第三條、第四條第一項、第五條、第六條、第八條、第十條第十一條及第十六條ノ規定ハ常時十人未滿ノ職工ヲ收容スル寄宿舍ニ之ヲ適用セズ

附　則

施行期日

本令ハ昭和二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

猶豫期限

第四條及第十三條ノ規定ハ、本令施行後一年間第二條、第七條、第八條及第十二條ノ規定ハ本令施行後二年間第六條、及第九條乃至第十一條ノ規定ハ本令施行後三年間之ヲ適用セズ

特ニ許可ヲ受クル申請期限

第三條又ハ第五條ノ規定ニ依ル許可ノ申請ハ本令施行ノ日ヨリ二月以內ニ之ヲ爲スベシ

（參照）

第三條但書

建築物法施行規則第一條第十三號乃至第十六號

第十五條
工場法施行規則第八條第一項

第十七條第二項、第十九條第一項
大正十一年九月三十日內務省令第二十四號
傳染病豫防法施行規則第五章消毒方法ニ關スル規定

（頁數二〇三―二〇四）

火氣粉塵ニ關係アル作業場ト同一建物內ニ寢室ヲ設クルトキ

火氣粉塵ニ關係アル作業場ト同一建物內ニ寢室ヲ設クルタメ除害豫防ノ爲サヽルトキ

三階以上ニ寢室ヲ設クルトキ

工場附屬寄宿舍規則施行細則（昭和二年六月二十三日大阪府令第六十四號）

第一條　工場附屬寄宿舍規則（以下單ニ規則ト稱ス）第二條第一項但書ニ依ル許可申請書ニハ左ノ事項ヲ具備スルコトヲ要ス
一、規則第二條第一項各號ノ作業場ト寢室トノ距離ヲ明示スルニ足ルベキ圖面
二、寄宿職工人員數（男女別）
三、除害豫防又ハ避難設備ノ詳細（圖面及構造仕樣書）

第二條　規則第二條ニ定ムル除害豫防又ハ避難ノ設備ヲ爲サントスルトキハ左ノ事項ヲ具シ豫メ當廳ニ屆出ヅベシ但シ他ノ法令ニ依リ許可若ハ認可ヲ受クベキモノ又ハ屆出ヲ爲スベキモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ
一、設備ノ種類、個數及其ノ設計ノ概要
二、設備施行ノ個所
三、圖面

第三條　規則第三條但書ニ依ル許可申請書ニハ左ノ事項ヲ具備スルコトヲ要ス
一、建物ノ三階以上ニ設ケアル寢室數及其ノ室面積竝收容定員（男女別）
二、建築物ノ建築認可竝使用認可年月日及認可番號
三、避難設備アルモノハ其ノ仕樣書及圖面

第四條　規則第五條但書ニ依ル許可申請書ニハ左ノ事項ヲ具備スルコトヲ要ス

一、建築物ノ用途

二、天井高七尺ニ達セザルモノハ室數及各室面積並收容定員

三、採光換氣ノ設備ヲ明示スルニ足ルベキ圖面並仕樣書

四、建築物ノ築造認可並使用認可年月日及認可番號

第五條　規則第六條但書ニ依ル許可申請書ニハ左ノ事項ヲ具備スルコトヲ要ス

一、屋根小屋組ヲ露出セル室數及各室面積並收容定員(男女別)

二、建築物ノ建築認可並使用認可年月日及認可番號

第六條　規則第九條但書ニ依ル許可請申書ニハ左ノ事項ヲ具備スルコトヲ要ス

一、臨時必要ナル理由

二、規則第九條ノ制限ヲ超エテ職工ヲ收容スル寢室數及各室面積並收容豫定人員(男女別)

三、期間

第七條　規則第十條第一項但書ニ依ル許可申請書ニハ左ノ事項ヲ具備スルコトヲ要ス

一、構造上間仕切ヲ爲スコト能ハザル事由

二、建築物ノ建築認可並使用認可年月日及認可番號

三、寢室ノ構造仕樣書

四、寄宿舍平面圖

五、收容豫定人員

第八條　規則第十一條但書ニ依ル許可請申書ニハ左記事項ヲ具備スルコトヲ要ス

一、交替就業ヲ爲サシムル各部ノ職工數(同一ノ寢室ニ收容スルモノ)

二、各組職工ノ就眠起床時間

三、使用スベキ寢室數及各室面積

四、使用スベキ寢室ノ位置ヲ示スニ足ルベキ圖面

第九條　寄宿舍ノ非常口ニハ適當ノ標示ヲ設クベシ其ノ通路ニハ障碍ト爲ルベキ物件ヲ放置スルコトヲ得ズ

第十條　寄宿舍ニハ適當ナル照明ノ設備ヲ爲スベシ

第十一條　書間睡眠スル夜業者ノ寢室ノ硝子戸ニハ適當ノ窓掛ヲ設クルコトヲ要ス

第十二條　工業主ハ別表第一號樣式ニ依リ寢具臺帳ヲ調製シ各寄宿舍毎ニ備付クベシ

第十三條　工業主ハ職工ニ使用セシムル寢具ヲ毎月二回以上日光ニ曝シ且ツ隔月一回以上其ノ白布及敷布ヲ洗濯スルコトヲ要ス

前項ノ白布及敷布ハ其ノ使用者ヲ更フルトキハ其ノ都度洗濯スルコトヲ要ス其ノ洗濯ニ要スル費用ハ工業主ノ負擔トス

第十四條　職工ハ寢具ヲ共用スルコトヲ得ズ

食堂床卓子清潔保持　第十五條　食堂ノ床面並卓子ハ常ニ清潔ニ之ヲ保持スルコトヲ要ス

食器洗淨消毒　第十六條　食器ハ使用ヲ終リタル毎ニ之ヲ洗淨シ且ツ成ルベク熱氣消毒ヲ行フベシ

防塵防蠅　前項ノ食器並職工ニ供スル飲食物ニ對シテハ適當ナル防塵防蠅ノ方法ヲ講ズベシ

職工使用人健康診斷記錄　第十七條　寄宿舍職工及使用人ニ對スル健康診斷ノ記錄ハ別表第二號樣式ニ依ル

便所ノ數　第十八條　常時五十人以上ノ職工ヲ收容スル寄宿舍ニハ適當個數ノ檢溫器及適當ノ救急材料ヲ備付クルコトヲ要ス

檢溫器及救急材料備付　第十九條　寄宿舍ニ設クル便所ハ收容職工二十人ニ付一個以上トス但シ工場附屬ノ便所ニシテ寄宿職工ノ利用シ得ベキモノアルトキ又ハ交替作業ノ場合若ハ寄宿舍職工ノ員數百人ヲ超ユルトキハ其ノ標準ヲ遞減スルコトヲ得

消火設備　第二十條　寄宿舍ニハ消火ニ必要ナル設備ヲ爲スコトヲ要ス

危害衛生上不備アルトキ　第二十一條　寄宿舍ノ構造設備ガ危害ヲ生ジ又ハ衛生、風紀其ノ他公益上必要ト認ムルトキハ適宜ノ措置ヲ命スルコトアルベシ

願書ノ提出方　第二十二條　本令ニ依リ當廳ニ提出スル願屆書類（副止二通）ハ總テ所轄警察官署ヲ經由スベシ

附則

施行期日　本命ニ依リ昭和二年四月六日內務省令第二十六號工場附屬寄宿舍規則施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（別表）第一號樣式

寢具帳臺（寮寢室數　收容定員　寢室坪數　名　坪）

品目	越高	廢棄 月日	數量	新調 月日	數量	月末現在	備考
掛布團			枚		枚	枚	
敷布團			枚			枚	
敷布			枚			枚	
枕			個		個	個	
蚊帳						枚	

記載心得

一、本臺帳用紙ハ每月之ヲ新調更改シテ記入スルコト

一、本臺帳ハ各寮（一建築物）每ニ之ヲ備付クベキコト

一、寢具ニシテ一時使用ヲ罷メタルトキハ廢棄ノ欄ヘ又使用ヲ開始シタルトキハ新調欄ヘ記入スルコト

第二號樣式

寄宿職工使用人健康診斷表

所在地
工場名

	人員總數	受診者數	受診者類別 職工 使用人 罹病者 健康者 罹病者 健康者
男			
女			
計			

記載心得

本表總數欄ニハ職工ハ勿論賄夫等苟モ寄宿舍ニ直接關係アル者ハ凡テ包含セシムベシ

氏名	生年月日	業務別	男女別	病名	發病年月日	診斷醫氏名	診斷年月日	備考

記載心得

一、本表ハ罹病者ノミヲ登載スルコト

一、業務別ニハ何々職工又ハ何々ト具體的ニ記入スルコト

一、病名欄ニハ脚氣、感冒、黴毒、淋疾、胃腸加答兒等ヲ記入スルコト

一、備考欄ニハ特殊ナル參考事項ヲ記入スルコト

工場附屬寄宿舎規則施行細則

（昭和二年六月二十八日京都府令第八十八號）

第一條　本令ニ於テ規則ト稱スルハ工場附屬寄宿舎規則ヲ云フ

規則及本令ノ規定ニ依ル願届書類ニハ各條所定事項ノ外左記事項ヲ具シ正副二通ヲ所轄警察官署經由提出スベシ

一　工場所在地

二　工場名

三　工業ノ種類

四　工業主ノ氏名、法人ニ在リテハ其ノ名稱、主タル事務所所在地及代表者ノ氏名

五　工場管理人アルモノハ其ノ氏名

第二條　規則第二條但書ノ規定ニ依ル許可申請書ニハ左記事項ヲ具備スベシ

一　除害豫防又ハ避難設備ノ現況及特ニ別建物ト爲スニ要セズト認メウルル事由ノ詳細

二　規則第二條第一項ノ作業場ト寢室トノ距離

第三條　規則第三條但書ノ規定ニ依ル許可申請書ニハ左記事項ヲ具備スベシ

一　各階ノ平面圖

二　建築物ノ建築認可及使用認可ノ年月日

略稱

書類ノ提出方

火氣粉塵ニ關係アル作業場ト同一建物内ニ寢室ヲ設ケムトスルトキ

三階以上ニ寢室ヲ設ケムトスルトキ

廊下ノ幅員

屋外出入口ノ廣サ

居室面積五十坪以上ノトキ非常口取設

階

幅

蹴上

踏面

手摺

木造

三　男女別收容定員

四　避難設備アルモノハ其ノ詳細

第四條　廊下ハ幅内法九〇糎（約三尺）以上ト爲スベシ但シ中廊下ノ場合ニ在リテハ幅内法一、三五米（約四尺五寸）以上ト爲スコトヲ要ス

廊下ヨリ屋外ニ通ズル出入口ハ幅廊下ノ幅以上、高一、七二米（約五尺七寸）以上ト爲スベシ

第五條　居室面積ハ一六五平方米（約五十坪）以上ノ寄宿舎ニハ適當ナル箇所ニ非常口ヲ設ケ其ノ幅廊下ノ幅以上、其ノ高一、七二米（約五尺七寸）以上トシ戸ハ外開戸又ハ引戸ト爲シ非常口タルノ標示ヲ爲スベシ

第六條　寄宿舎ノ階段ハ左記標準ニ據ルベシ但シ直上階ノ居室面積一六、五平方米（約五坪）以下ノモノ及非常用階段ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

一　階段ノ幅ハ内法九〇糎（約三尺）以上トシ踊場ノ幅及長ハ階段ノ幅以上ト爲スコト

二　蹴上二二糎（約七寸）以下、踏面二二糎（約七寸）以上トシ各段均一ナラシムルコト

三　階段ニハ手摺ヲ設クルコト

四　階段ハ螺旋狀ト爲サザルコト

五　木造建築物ニシテ直上階ノ居室面積ノ合計四九、五平方米約（十五坪）以下ニ在

段	ノトキノ数	本造以外ノ数
寝室、食堂、病室等ノ天井高ニ付テ許可ヲ受ケムトスルトキ		
寝室、病室ニ天井ナキトキ許可ヲ受ケムトスルトキ		
臨時必要アルトキ		
寝室有効面積不足スルトキ		

リテハ階段一箇所以上、九九平方米(約三十坪)以下ニ在リテハ二箇所以上、一九八平方米(約六十坪)以下ニ在リテハ三箇所以上、一九八平方米(約六十坪)ヲ超ユルモノニ在リテハ四箇所以上ヲ設クルコト

六　本造以外ノ建築物ニ在リテハ直上階ノ居室面積ノ合計八二、五平方米(約二十五坪)以下ニ在リテハ階段一箇所以上、一六五平方米(約五十坪)以下ニ在リテハ二箇所以上、三三〇平方米(約百坪)以下ニ在リテハ三箇所以上、三三〇平方米(約百坪)ヲ超ユルモノニ在リテハ四箇所以上ヲ設クルコト

各室ノ配置簡單ニシテ階段ノ幅特ニ廣キ場合ニハ前項第五號及第六號ノ規定ニ拘ラズ其ノ數ヲ減ズルコトヲ得

第七條　規則第五條但書ノ規定ニ依ル許可申請書ニハ左記事項ヲ具備スベシ

一　許可ヲ受ケムトスル各室ノ平面圖、構造、設備及用途

各室ノ男女別收容定員

三　周圍ノ狀況

第八條　規則第六條但書ノ規定ニ依ル許可申請書ニハ許可ヲ受ケムトスル各室ノ構造(特ニ屋根小屋組ノ構造ヲ詳記スルコト)及其ノ用途具備スベシ

第九條　規則第九條但書ノ規定ニ依ル許可申請書ニハ左記事項ヲ具備スベシ

一　許可ヲ受ケムトスル各室ノ面積(押入及床ノ間ヲ除ク)及其ノ收容人員

二　臨時必要ナル事由ノ詳細

三　期間

第十條　規則第十條但書ノ規定ニ依ル許可申請書ニハ左記事項ヲ具備スベシ

一　許可ヲ受ケムトスル各室ノ面積及其ノ收容定員

二　構造上間仕切ヲ爲スコトヲ不適當トスル事由ノ詳細

第十一條　規則第十一條但書ノ規定ニ依ル許可申請書ニハ左記事項ヲ具備スベシ

一　許可ヲ受ケムトスル各寢室ノ位置ヲ示スニ足ルベキ圖面

二　各室ニ於ケル各組職工數竝其ノ就業時間及就眠時間

第十二條　規則第十二條第三項ノ規定ニ依ル寢具ノ日光曝露竝白布及敷布ノ洗濯ハ使用者ヲ更ムル毎ニ之ヲ行ヒ同一使用者ノ場合ト雖寢具ノ日光曝露ハ少クトモ月二回白布及敷布ノ洗濯ハ少クトモ年六回之ヲ行フベシ

蒲團類ニハ使用者ノ氏名ヲ書シタル布片ヲ附スベシ

第十三條　規則第十四條ノ規定ニ依ル食器ノ消毒ハ各自專用ノ場合ニ在リテハ少クトモ月二回、其ノ他ノ場合ニ在リテハ其ノ使用ヲ終ル毎ニ煮沸消毒又ハ蒸汽消毒ヲ行フベシ

第十四條　食堂ノ附近ニハ適當ナル手洗場ヲ設クベシ

食堂及炊事場ニハ防塵防蠅ニ關シ必要ナル設備ヲ爲シ其ノ床面及卓子ハ使用ノ都度

段	收容定員ヲ超過スルトキ	寢室ニシテ許可ヲ受ケムトスルトキ	同一ノ寢室ニシテ就眠時間ヲ異ニスル二組以上ヲ收容セントスルトキ
寢具ノ日光消毒、布ノ洗濯			
食器、洗淨、消毒			
食堂ニ手洗所			
防塵防蠅			

之ヲ掃除スベシ

健康診斷ノ成績、届出記錄保存

第十五條　規則第十六條ノ規定ニ依ル健康診斷ハ少クトモ春秋二回之ヲ行フベシ

前項ノ健康診斷ヲ施行シタルトキハ其ノ成績ヲ樣式第一號ニ據リ十日以内ニ居出デ且健康診斷個人記錄ヲ樣式第二號ニ據リ調製シ居書寫ト共ニ備置クベシ

臨時健康診斷

第十六條　寄宿舍ニ收容スル職工及寄宿舍ニ使用スル者ニ對シ臨時ニ健康診斷ヲ施行セシムルノ必要アリト認メタルトキハ之ガ施行ヲ命ズルコトアルベシ

唾壺ノ配置個數

第十七條　規則第十七條ノ規定ニ依ル唾壺ノ箇數ハ左記標準ニ據リ配備スベシ

一　室内ニ在リテハ一室毎ニ一個以上但シ三三平方米（約十坪）ヲ超ユルトキハ三三平方米（約十坪）以内ヲ增ス毎ニ一個以上ヲ加フ

二　廊下ニ在リテハ一八米（約十間）毎ニ一個以上

三　前各號以外ノ場所ニ在リテハ其ノ狀況ヲ斟酌シテ個數ヲ定ムルコト

便所ノ數

第十八條　便所ハ男女用ニ區別シ大便所ハ二十人以内毎ニ一個ノ割合ヲ以テ建設スベシ但シ工場附屬ノ便所ニシテ寄宿舍ノ便所トシテ使用シ得ベキモノハ之ヲ通算スルコトヲ得

寄宿舍ノ管理規程

第十九條　規則第二十一條ノ規定ニ依ル寄宿舍ノ管理ニ關スル規程ニハ不文律ヲ含ムモノトス

前項ノ規程中ニハ寄宿職工ノ外出制限及制裁ノ意味ニ於ケル課役等ニ關スル事項ア

ルトキハ之ニ關シ特ニ詳記スルヲ要ス

居室ノ有効採光面積

第二十條　居室ノ窓又ハ之ニ代ルベキモノノ有効採光面積ハ室面積ノ八分ノ一以上トスベシ

炊事場ノ有効採光面積

炊事場ノ窓又ハ之ニ代ルベキモノノ有効採光面積ハ其ノ室面積ノ五分ノ一以上トスコトヲ要ス

前二項ノ適用ニ於テ天窓ハ其ノ面積ヲ三倍ニ換算ス

照明設備

第二十一條　寄宿舍ニハ適當ナル照明ノ設備ヲ爲スベシ

寢室ノ設備

第二十二條　寄宿舍ノ寢室ハ男女用ニ區別シ其間仕切ハ開閉又ハ取除キ得ザル構造トスベシ

浴室

第二十三條　浴場ハ男女用ニ區別シ又ハ男女ノ入浴時間ヲ異ニスル等適當ナル措置ヲ爲スベシ

防火設備

第二十四條　寄宿舍ニハ防火ニ付必要ナル器具ヲ設置シ之ヲ有効ニ保持シ其ノ使用方法ヲ明示シ置クベシ

救急材料備付

第二十五條　寄宿舍ニハ收容職工ノ負傷又ハ疾病ニ對スル應急措置ニ必要ナル材料ヲ備置クベシ

危害衛生上不備アルトキノ場合

第二十六條　寄宿舍及其ノ附屬建設物竝其ノ設備等ニシテ危害ヲ生シ又ハ衛生、風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル措置ヲ命ズル

構造設備制限斟酌

廊下ノ幅階段、便所ノ數等ノ制限ヲ受ケサルモノ

施行期日猶豫期間

コトアルベシ

第二十七條　本令第四條乃至第六條、第十八條及第二十條ノ規定ニ依ル制限ハ各其ノ實狀ニ依リ斟酌スルコトアルベシ

第二十八條　本令第四條、第六條及第十八條ノ規定ハ當時十人未滿ノ職工ヲ收容スル寄宿舍ニ之ヲ適用セズ

附　則

本令ハ昭和二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十四條第二項ノ規定ハ本令施行後二月間、第十三條、第二十二條、第二十四條及第二十五條ノ規定ハ本令施行後一年間、第十二條及第十四條第一項ノ規定ハ本令施行後二年間、第五條及第十八條ノ規定ハ本令施行後三年間之ヲ適用セズ

第四條、第六條及第二十條ノ規定ハ本令施行ノ際現存シタル寄宿舍ニ付知事ノ許可ヲ受ケタル場合ハ之ヲ適用セズ

前項ノ許可申請書ニハ許可ヲ受ケムトスル事由ノ詳細ヲ具備シ本令施行ノ日ヨリ二月以內ニ之ヲ爲スベシ

樣式第一號

健康診斷成績

工場名													
工場所在地													
施行期日	自昭和　年　月　日 至昭和　年　月　日												
成績	檢診者數	病傷	性別	職工數			其ノ他ノ者數			計			
				男	女		男	女		男	女		
	病傷者數												
	病傷者百分率												

（備考　本書寫ヲ備置クコト）

診斷醫師氏名捺印

工場主又ハ管理人氏名捺印

昭和　年　月　日

京都府知事　殿

様式第二號

健康診斷個人記錄

被檢者	氏名	生年月日 年月日生	雇傭年月日 年月日	男女別
期日	事實	業務別	病傷ノ有無又ハ診斷名	處置	備考	診斷醫師氏名捺印
昭和 年 月 日						
昭和 年 月 日						
昭和 年 月 日						

注意事項

一　本記錄ハ各個人別ニカード式トスナコト

一　本記錄ハ健康診斷施行ノ都度之ヲ繼續使用スルコト

一　工場ニ於テ從來使用ノモノニシテ本様式所要事項ヲ具備セル記錄在ルモノハ之ヲ代用スルコトヲ得